LIFE AFTER DEATH　～死後の人生～

小野　大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＩＦＥ　ＡＦＴＥＲ　ＤＥＡＴＨ　～死後の人生～

【Ｎコード】
Ｎ２６８６Ｚ

【作者名】
小野　大介

【あらすじ】
三十路を目前にし、リストラで会社をクビになった《立花　麗子》は、
大学時代からの恋人には浮気を告白され、しかも妊娠を理由に別れを告げられてしまう。
絶望し、自殺まで考えるも、なんとか思い留まった麗子にさらなる不幸が襲いかかる。
その結果、麗子はあっけなく死んでしまった……。
そんな麗子の元に歩み寄る黒い影。それは彼女に手を差し伸べ、言

った。
「立花　麗子さん、死神という仕事に興味はありませんか？」
それは幼い姿をした死神の《命》だった。

（1）

とあるマンションの一室で、一人の女性が自らの命を断とうとしている。

玄関を入ってすぐのところにあるバスルームに、彼女はいた。バスタブの中に横たわり、熱いシャワーを頭からかぶっている。

ダークブラウンに染められた髪が濡れて、肩から胸元にかけてぺたっと張りついている。まるで、打ち上げられた水死体にへばりつく海藻のようだ。

彼女の右手には、化粧用のカミソリが握られている。その鋭利な刃を、自らの左手首に押し当てている。

その目はひどく虚ろで、その表情には感情というものがまるで見られない。不安も恐怖もなく、さしずめ生きる屍のようだ。しかし、カミソリを持った右手に力を込めたとき、その焦げ茶色の瞳が、わずかだが左右に動いた。最後の瞬間に躊躇いを見せたのだ。

そのときだ、リビングの電話が鳴った。すると、洗面所に置かれた子機も連動して鳴りだした。

彼女はその音に驚き、びくりと肩を揺らした。

「つっ！？」

彼女は小さな声を漏らした。動いた拍子に切ってしまったのだ、左手首を。

傷自体は小さなものだったが、思いのほか深く、表皮の下にまで達しており、その隙間からは見る見る血が溢れだしてきた。

血を認識した瞬間、さらなる痛みが走った。

その刺激が彼女の目に光を宿し、感情を呼び起こさせた。怒りである。

「こんの、クソバカァッ！」

彼女は目をつりあげて鬼のような形相をしたかと思えば、カミソリを投げ捨てた。

備えつけの鏡に当たって小さな傷を残し、床に落ちた。
彼女は急ぎバスタブを出て、シャワーを止めた。そのままバスルームを飛びだす。
バスルームの外すぐのところに洗面所はある。
彼女は、洗面台の近くに置かれた子機に右手を伸ばすも、濡れると気づいて躊躇った。ならばスピーカーホンにしようとも思ったが、そのボタンは充電器の設置面のそばにあり、断念した。
彼女は子機を取るのを諦めると、その横の棚の中に丸めた状態で置いてある純白のバスローブを引ったくり、素早く羽織った。
当然のことながらまだ出血しており、袖など、触れたところが赤く染まってしまった。彼女はそれに構わず、急ぎリビングに向かった。
電話はまだ鳴り続けている。彼女はその音に導かれるように、キッチン手前の壁付けの棚の前へと移動した。
ふくらみの乏しい胸に左手首を押し当てながら、スピーカーホンのボタンを押した。
苛立ちを押し殺しながら話しかける。
「もしもし、立花ですが――」
『――麗子！　やっと出た！』
彼女の声が、女性の大声にかき消された。
『ちょっとアンタッ！　携帯、マナーモードにしてるでしょ！？何回かけても出ないんだから！　まったく、なんの意味の携帯よ！』
「なっ、なんだ、絵里か……」
その声と口調で電話の相手が誰かわかるようで、彼女はひと息ついた。
『なんだとはなによぉ、私じゃ不満？』
「いや、別に不満ってわけじゃないけど……」
『けどってなによぉ、けどって。含みのある言い方ねぇ』
「ああもう、めんどくさいなぁ。で、なによ？　なんか用なの？」
『用があるから電話してるんじゃないの！　……麗子、アンタ、会

社辞めたってホント？』
　相手の声が若干重たくなった。彼女はそれに気づいたのか、答える際に間を置いた。
「……ええ、本当よ」
『なんで！？』
　間髪入れずに聞き返された。
「なんでって……一身上の都合によりってやつよ」
　彼女は答えに苦笑を含めた。
『……怒るわよ？』
　相手の声に静かな怒りが感じられる。
「わ、わかったわよ！　ほら、うちの実家って農家じゃない。私、けっこう遅くに生まれたしさぁ、それに一人っ子だし。両親ももう年で辛いみたいだから、面倒見てあげなきゃいけないって思ったわけよ、だから！」
　人は嘘をつくとき、無意識に右斜め上を見てしまうというが、彼女は今まさにそうしながら答えた。
『本当にぃ？』
　疑われている。
「ほ、本当もなにも、嘘つく意味ないし……」
　電話だというのに、彼女は視線を逸らした。
『……ハァ。いいわよ、そういうことしておいてあげるわよ。言いたくないんでしょ？　だったら、無理には聞かない。言いたくなったら言いなさいな。愚痴のひとつやふたつ、いくらでも聞いてあげるからさ。独りで抱え込んじゃダメよ』
「うん……あんがとぉ……」
　彼女は俯き、涙声を漏らした。
『ちょっと、なんて声出してんのよ、アンタらしくない！　あーもう、話題変えよ！　えーっと……あ、そう！　あれ！　彼氏とはどうなのよ、このところ仕事が忙しくて会えてないって言ったけど、あれからどうなのさ？』

「真……？　真とは昨日会ったよ。いつものカフェでお茶した」
麗子は微笑みを交えながら言った。
『あら！　あらあらあら！　そう、よかったじゃん！　……で？　会社辞めたこと、もう言ったの？』
「あー……いや、ううん、それはまだ……」
『そう……早い方がいいわよ。言いにくいかもしれないけどさ』
「うん、そうだね……」
『あ、そうだ。そのときにさ、ついでにプロポーズしちゃったら？　会社辞めたついでに家庭に入っちゃうっていうのもいいんじゃない？　今なら寿退社みたいなもんだし』
「アハハ、それもいいかもね」
『待っていてもダメよ、今の男は草食なんだから。それに、今は女からプロポーズをする時代なんだってよ』
「なるほど、考えてみようかなぁ――」
と、そのとき、スピーカーから水が勢いよく流れる音がした。
「――ちょっ、アンタ、今どこにいんの……？」
『どこって、トイレに決まってんじゃん。じゃなきゃ、こんな時間にこんな長い間、私用電話なんかかけられないわよ』
「汚いなぁ」
『清潔ですぅ！　あ、ところでさぁ、もうすぐ定時だけど、今日飲みにいかん？』
「え、今日……？」
『大丈夫よ、聞かないから。気晴らしに飲んで騒ぐだけ。いつものとこ行こうよぉ、美味しいのどぐろ出すとこ！　その後、ちょっと前に見つけたニューハーフの店に行ってさぁ、オッパイ、揉んじゃおうぜぇ～！』
「セクハラ親父かい、アンタは……」
嬉々としたその声に、彼女は呆れた顔をした。
『ねぇ、行こうよぉ。一緒に二日酔いになって苦しもうぜぇ～！』
「どんな誘い文句よ、まったく……うん、わかった。いい

よ、行く」
『よっしゃあ！　じゃあ、居酒屋で待ち合わせね。あとに着いたほうが、ボトル新しいの開けるのよ』
「え、それって、私の方が有利じゃない？」
『だから、おごってやるって言ってんのよ。察しなさ～い。あ、でも、ボトルだけよ』
「わかってるわよ」
『ハハッ。じゃあね』
「うん、じゃあ……」
彼女は右手を伸ばし、受話器を取ってすぐに戻した。そうかと思えば、大きなため息をつき、目の前の棚に寄りかかった。
「いっそ、愚痴っちゃったほうが楽だったかなぁ……」
彼女はぽつりとつぶやくと、胸に押し当てていた左手を離し、そして見た。
手首や袖口、押し当てていた胸元が赤黒い色に染まっている。すでに血は止まっており、傷口も、固まった血のおかげで塞がっていた。
血が止まったことを知り、ホッと胸を撫で下ろした彼女だったが、その表情が見る見るうちに怒りの色へと染まった。
「なにを考えているんだっ！」
そう声を荒げたと同時に右手を振り上げ、目の前の壁を一撃した。
「バカだ、ひどい、意味がわからない！　こんなこと、するなんて……」
彼女は憤慨し、自分を激しく貶したと思えば、一転、今度は泣きそうな顔になり、壁を叩いた右手で後ろ髪をぎゅっと掴んだ。
絞り出された水滴が、ポタリポタリと足元に落ちた。
「……出かける準備しなきゃ」
彼女は、長い沈黙のあとにきびすを返した。
洗面所に戻り、洗濯機の前でバスローブを脱いだ。
「これ、さすがに無理かなぁ……」

血に染まったバスローブを見つめ、彼女は残念な声を漏らした。
洗濯機の横にあるゴミ箱に押し込むと、開けたままにしていた扉をくぐり抜けて、再びバスルームに入った。
落ちているカミソリを拾いあげ、バスローブを入れたゴミ箱へと投げやった。
彼女が扉を閉めてまもなく、シャワーの音が聞こえてきた。
だが、その直後、「いったぁ！　うう、しみるぅ……！」という声も聞こえた。

（2）

それは、昨日のことだった。

前夜、めずらしく深酒しなかったので目覚めがよく、遅刻の危険がある時間に起きずに済んだ。顔がむくまなかったので化粧のノリもよかった。

余裕があったので朝のニュースの占いを見届けてから家を出られた。

家を出るまでの間にあった残念なことと言えば、運勢が悪かったことぐらいだった。

今日は晴天だった。空は高く澄みわたり、なんとも清々しい朝だった。

駅までの道のり、一度も信号に引っかからなかった。ちょうど、ホームに電車が入ってきたので、スムーズに乗車できた。

朝の通勤ラッシュはともかくとして、会社までの間に気分が滅入るようなことは一度も起きなかった。段差につまづいたり、ヒールが折れたりもせず、ガムを踏んづけてしまうこともなかった。久しぶりに気持ちのよい出勤ができた。

今日はきっと、いいことがある。そう思える朝だった。

「おはようございまーす！」

扉をくぐり、職場に顔を出した立花（たちばな）　麗子（れいこ）は、元気よく挨拶をした。先に来て、すでに各々のデスクについていた数人の男女が振り返り、挨拶を返してくれた。

麗子は扉の横に設置されているタイムカードを押し、自分のデスクに移動した。椅子に腰を下ろしてすぐのことだった。「立花さん」と、誰かに名前を呼ばれた。

「はい？」

麗子はすぐに顔をあげた。すでにそれが誰かを察しており、迷わず窓際に目をやる。
窓のそばに一台、他とは距離を離して置かれたデスクがある。そこに、全体的に細く、ひょろっとした男が座っている。くたびれた顔をしている。
「課長、なんですか？」
麗子は、その、よく言えば物腰が柔らかい、悪く言えば頼りない、白髪が目立ち始めた頭をした男のことを、課長と呼んだ。
「ちょっと話があるんだけど……今、いいかな？」
「はい、大丈夫ですが」
麗子はすぐに席を立ち、課長の元に向かった。すると、彼も席を立ち、彼女とは別の方向に歩きだした。
「奥で話をしようか」
課長は、奥に見える壁とガラスで仕切られた応接間を指差した。麗子は言われるままについてゆく。そんな二人の姿を、同僚たちは訝しげにチラチラとうかがう。
課長は扉を開け、麗子を待った。彼女が入るとすぐに閉めきり、向かい合う形で置かれているソファーの一方をすすめた。彼女が席に着くのを待たずして、外から見えないようすべてのブラインドを下ろし、その場を密室に変えた。
課長の行動を横目にうかがいながら、麗子はソファーに腰を下ろした。
（話ってなんだろう……？）
麗子は表情は変えぬよう注意しながら、内心で勘ぐる。
（仕事とか人間関係でトラブルを起こした覚えはないしなぁ。自分で言うのもなんだけど、勤務態度は真面目なほうだし、挨拶だってちゃんとしてるし、セクハラとか、性的問題は、嬉しいような悲しいような、今までに一度もなかった……あ、お見合いとか？　前に一度あったなぁ）
麗子があれこれ想像していると、課長がもう一方のソファーに腰

を下ろし、向かい合わせになった。意識が自然と彼に向く。と、二人の間に置かれているテーブルの上に、これ見よがしに置かれた大きな茶封筒の存在に気がついた。
課長はその茶封筒に手を伸ばし、ひもをほどいて口を開けようとする。けれど、途中でその手を止めてしまった。
どうしたのだろう？
麗子は訝しみ、眉をしかめた。
課長はしばらく動かなかった。ようやく動いたと思えば、茶封筒を隣の席にやった。
「立花さん、あのねぇ、そのぉ……」
課長は少し前かがみになり、ボソボソとつぶやきだした。
両肘を両膝の上に乗せて、祈りをあげるときのように指を組み合わせて、両手を口元に押し当てている。
「僕はねぇ、立花さんのことを人として好きだからね。あ、人だよ、人！　人としてね。だからさぁ、こんなときはちゃんと言わなければいけないと思うんだよね、包み隠さず。うちの会社さぁ、このところ業績が悪いでしょう。節約とか、節電とか、かなりうるさくしていたから知っているとは思うんだけどさぁ、けっこうキツイみたいでね。ついにやりだしたんだよねぇ……人員削減を。ようはリストラなんだけどね。それでさぁ、今、早期優遇退職というのを募っているところなんだよ……」
課長の悪い癖である遠まわしな言葉に軽い苛立ちを覚えた麗子だが、“リストラ”や“早期優遇退職”の言葉にドキリとした。
（まさか……？）
麗子は手に力を込めた。じんわりと嫌な汗をかく。
「立花さんはどうかなぁ？　会社のために辞めてくれって言われたとき、辞められる？」
課長は上目遣いになり、麗子の目を見つめた。そんな彼の目だが、左右に小刻みに揺れ動いている。いわゆる泳いでいるという状態で、動揺が見て取れる。

その目に見つめられ、麗子は思った。
（うわ、そっちかぁ……）
手伝えと言われるのか、それとも、辞めてくれと言われるのか、どちらかと勘ぐってはいたが、その答えはより悪い後者のほうだった。
「……課長、はっきりおっしゃって頂けませんか？」
麗子もまた少し前かがみになり、今まで以上に敬語を使い始めた。
「あ、う、うん。ちょっと遠回しだったね、ゴメン。あ、いえ、申し訳ありませんでした」
課長も敬語を使い始めた。一度深くお辞儀をすると、「立花さん、任意退職に応じては頂けませんでしょうか？」と、求められたとおり、はっきり自分の意思を伝えた。
自ら求めたとはいえ、面と向かって会社を辞めてくれと言われて、麗子は軽く動揺してしまった。すでにわかっていたことだが、どうしても戸惑ってしまう。
（どうして私なの？　課長はどうして私を……）
麗子は考え、原因を探った。
課長との関係は決して悪くなかった。とはいえ、部下と上司という関係でだ。友人関係ではないし、ましてや、それ以上は皆無である。
忘年会などで飲み交わすことはあっても、目上であり、年上でもある課長の前で限度を超えた羽目の外し方をした覚えはないし、不用意な失言も、覚えている限り一度もない。そういった礼節に関しては重んじていた。だから、人間としては嫌われていないはずだ。仕事においても、使い勝手のいい一人だったはず。使われていて、それはわかっていた。だからこそ解せなかった。どうして自分を選んだのか……。
だが、ちょっと考えてみればすぐに判明した。
リストラ――正しくは整理解雇。その際に選ばれやすい人間というのがいる。

サバサバしていて、辞めることに執着心の薄いタイプ。
求められた際に文句を言えない小心者のタイプ。
頼まれるとつい引き受けてしまう人の良いタイプ。
仕事ぶりや、給料の高い安いに関係なく、これらのタイプがまず選ばれる。とはいえ、会社にとって価値のある存在や派遣は別だ。そもそも、派遣はそれ以前の問題である。
麗子という人間は、どちらかといえばサバサバしているタイプだ。自らもそれはわかっている。それに、彼女には特別秀でたところがなく、会社にとっての価値も低い。単なる正社員の一人に過ぎない。けれど、仕事ができないわけではない。とはいえ、特別できるわけでもなく、それなりになんでもこなせてしまう。ともすれば、職を失ってもすぐ次が見つかるだろうと思われてしまうのだ。
麗子は自分という人間を再確認し、そして納得した。
「や、やっぱり嫌だよねぇ。すぐには決められないよねぇ」
ため息を漏らし、ソファーに身を沈めた麗子の姿に、課長は背中を丸めて猫背をひどくした。さらに前かがみになったことで、元々小さかったのがより小さくなった。
自分よりも細くて小さな課長の姿を見つめ、麗子は思った。
（人の良さが取り柄みたいなものなのに、こんな仕事一番不向きじゃん。どうせ部長あたりにでも押しつけられたんだろうけど。この人断れないもんなぁ。そもそもそういう性格だし、立場的にもねぇ……）
麗子が務める会社にも当然労働組合がある。だが、社の労働組合は管理職に就いている社員の加入を認めておらず、つまり課長には後ろ盾がなく、もっとも危うい立場にいると言っても過言ではないのだ。だから、率先して行わなければ自分の身が危ういのである。
（立場的にも）という言葉にはそのような意味が含まれている。
面と向かって言われたわけではないだろうが、ようするに、「会社から追い出されたくなければ生け贄を差し出せ」と、脅迫されているのに等しい。

かわいそうに。
解雇勧告を受けているのは自分だというのに、麗子は今課長に同情している。……が、ふとあることに気づいた。
（待てよ、解雇勧告を受けた人間に同情されるんだから、課長って、ある意味適任者なんじゃ？　怒りや反感を抱かせず、かわいそうだと思わせる。これは狙ってできることじゃない。この仕事ってトラブルをなによりも嫌うはずよね。下手に怒らせて労働組合を動かされたり、解雇強要だとかいちゃもんをつけられて訴訟問題にまで発展したら面倒なことになるわけだし。そう考えると、課長って逸材なんじゃ……？　なーんて、なにを馬鹿なこと考えてるんだ、私は……）
麗子は課長にわからぬように小さく鼻で笑った。
気づかれたかもしれないので、確認のためにも課長の姿をチラリとうかがったのだが、その際、あらためて見たことで、またあることに気づいてしまった。
（あーあ、目にクマ作って。寝てないのかねぇ……なんだかなぁ、今にも自分が辞めると言い出しそうな顔してる。どうしようかなぁ、同情心で辞めるつもりなんか全然ないけど、こういうのって、断ると後が面倒だって言うし、少なくとも目をつけられる。今のうちに辞めて、退職金を多めにもらった方が得かもなぁ……）
「あの、質問しても宜しいですか？」
そんなことを思った麗子は、ふいに発言した。
「はっ、はい！　どうぞ」
課長はハッとして顔を上げ、許可するように手を差し伸べた。
「今、退職した場合、退職金とか、割り増しで頂けたりするんですよね？」
「はい、もちろんです！　整理解雇ですからね」
課長は笑顔を浮かべ、大きく頷いた。
「そうですか……」
（笑顔で答えちゃってるし……ハーア、もういいかなぁ。会社にと

って私はいらないってことなわけだしねぇ）
開き直った麗子だが、その顔は少し悲しそうで、少し切ない。
「……わかりました。応じますよ、任意退職」
麗子は、今度は聞こえるように鼻で笑うと、素っ気なく言った。
「えっ、本当かい！？　……あ、いや、ごめんなさい」
課長は笑顔を強め、安堵の表情を浮かべた。……だが、無意識とはいえ、顔に出るほど喜んでしまった自分に気づいて、自己嫌悪のあまり俯いてしまった。
「構いませんよ。ひどい役回りを押しつけられましたね。――書類とか、記入しなければいけないものってあったりしますか？」
そう言うと、麗子は字を書くしぐさをした。
「あ、うん。あ、いえ、ございます。こちらで用意した退職願にお名前をご記入頂けますでしょうか？　こちらでございます」
課長は隣の席にやった茶封筒から書類を取り出し、背広の胸ポケットからボールペンを取り、ともにテーブルに置いて差し出した。そして、空白の部分を指差し、丸で囲った。
「拝見しても宜しいですか？」
麗子は書類を手にし、すでに目を通していながら形式的にたずねた。
「もちろんです」
課長は大きく頷いた。が、麗子は見向きもせず、じっくり、すべての項目に目を通した。
「……これが退職願なんですね。当然ですけど、初めて見ましたよ」
ようやく視線を上げると、麗子は苦笑した。……だが、目は笑ってない。
「あ、そういえば、もうすぐ給料日ですよね。給料はどうなるんです？　次が最後になるんですか？」
「ええ、そうですね、次が最後になります」
「そうですか。あ、じゃあ、給料日が過ぎてからにしようかな。一回分多くもらえるじゃないですか」

麗子はにやりとした。
「え……」
課長の顔が引き攣った。
「……冗談ですよ。真に受けないで下さい。切なくなりますから」
麗子は真顔になった。ちょっと不機嫌にも見える。
「すみません……」
課長は申し訳なさそうにする。
麗子は書類をテーブルに戻し、ボールペンを取った。ペン先を出して、紙面に近づける。先端を押しつけようとするが、ペンを持つ右手が急に震えだして動かせなくなった。
麗子は自分が動揺していることを知った。身体がサインを書くことを拒んでいる。
自分の名前ほど書き慣れているものはないというのに、《立花麗子》という四文字を書き終えるまでにかなりの時間を要してしまった。そして、ひどく疲れた。
まるで、自分の死刑執行のための書類にサインしているような、そんな気分だった。
「ハァ……課長、今までお世話になりました」
大きなため息をついた後、麗子は退職願とボールペンを差しだした。ついでに、首から下げていた社員証もテーブルに置いた。
課長は言葉なく、ただ深々とお辞儀するばかりだった。
「退職金ですが、いつ振り込まれますか？」
「ご要望がなければ給料日に振り込まれます。ただちに振り込むことも可能です」
「では、すぐでお願いします。気持ちに区切りをつけたいので。……金額が変わることはないですよね？」
「それはございません。ご安心下さい」
「わかりました」
「他に、気になることはございますか？」
課長はそうたずねながら、ボールペンを胸ポケットに戻し、退職

願を茶封筒にしまい、代わりに離職票などの書類を取りだして、麗子の前に置いた。
「……任意退職ですが、私以外にも候補がいるんですか？」
麗子は考え、そしてたずねた。
「ええ、まぁ」
「よかったら教えて頂けませんか？　もちろん、他言無用にします」
「……わかりました。必ず、他言無用にお願いしますね。――うちの課では、立花さんを含めた四人が予定されていました。後の三人は山田さん。窪塚さん。木本さん……です」
課長は、ブラインドが閉め切られていて見えないはずの外を気にしつつ、答えた。
「ああ……」
三人の名前を聞くと、麗子は大いに納得した。
それらの名前は、麗子が、うちの課でリストラされるとしたら誰か、という想像をした際にまず候補としてあがる面々だった。例の選ばれやすいタイプの者たちである。ただし、一人だけ例外がいる。最初に名前があがった山田だ。とはいえ、選ばれて当然の人物ではある。
山田は女性で、名前は沙織と可愛らしいが、人は名前とは正反対に育つとはよく言ったもので、その顔も人柄も可愛くはない。彼女はいわゆるお局様で、仕事はできる人物なのだが、性格に少々……いや、かなり難がある。我が強く、プライドも高く、とにかく敵を作りやすい。世渡りは下手だ。麗子とも何度か衝突したことがあった。かといって関係が悪いわけではない。だが、仕事以外の付き合いは一切なく、仕事以外の会話もしない。
そんな山田は、会社にとって疎ましい存在だった。麗子が知っているほどにだ。だが、彼女の性格上、下手なことをすれば厄介なことになるのは目に見えている。だからこそ、未だに働けている。しかし、今回、それをわかっていながら候補の一人に選んだということは、全面戦争を覚悟で切り捨てたいということなのだろう。

（誰か、怒らせてはいけないやつでも怒らせたかな？　それか、それほどまでに逼迫しているか……山田さんも、わざわざ敵を作ってどうするのかと思っていたけど、ついに来るところまで来たわけね。でもなぁ、あの人、なんとなくだけど、今回の任意退職、応じる気がするんだよねぇ。あの人の言葉の端々に、自分はいつ辞めても構わないんだっていう覚悟？　みたいな感じがあったもんなぁ。この会社に対して執着してない感じ。そういう意味では、私と似ているのかねぇ？）

麗子は、山田の、冷静沈着だが威圧的に思えてしまう人相や、哀れに思うような言動、左目の下の泣きボクロなどを思い出しつつ、考えに更けた。

「わかりました。ありがとうございます。他言無用にしますので」

麗子は、ふいに一度だけお辞儀をすると、目の前の書類を手にし、すぐに席を立った。

「デスクの私物、大切なものはないので、捨てるなり、誰か欲しがる人にでもあげるなり、ご自由にどうぞ。ありがとうございました。今までお世話になりました。さようなら」

麗子は姿勢を正し、深々とお辞儀をした。課長も彼女の動きに合わせてすぐに席を立ち、お辞儀を返すが、彼女はそれを見届けもせず、そそくさと応接間を後にした。

今まで同僚だった皆々の視線を受けながら、今まで自分のものだったデスクに移動し、自分のものであるバッグを手にした。その際、一番遠い席にいる女性の姿が目に入った。

左目の下の泣きボクロ。

彼女の、なにかを察したような悲しげな表情に気づくと、麗子はふっと笑い返した。

麗子はデスクを後にし、出口に移動する。道中、タイムカードのことを思い出した。

「早退しまーす！」

麗子はいつぞやのように元気な声を上げ、タイムカードを押した。

これで最後となる本日の勤務時間は、一時間にも満たなかった。

（3）

麗子は今、最寄り駅を目指して歩いている。その足取りは重く、歩幅も小さい。

国道沿いの歩道は幅広く、様々な会社や商店が立ち並んでいる。人の行き来も激しい。出勤時にはサラリーマンやＯＬといった同じ職種の人間が多く見られるが、今はちらほら。いずれも焦っていたり、開き直ったような顔をしていたりする。遅刻でもしたのだろうか。中にはやる気に満ちた顔をした者もいる。外回りだろうか。

通行人を眺めてはあれこれ想像している麗子だが、ふと人の流れに逆らっているような感覚にとらわれた。皆がゴールを目指しているのに、自分だけが逆走している気がした。それに気づいたとたんにひどく切なくなった。それでいて妙に罰が悪くて、まっすぐ前を向けなくなった。

俯いたり、横を向いたりしながら歩いていた麗子だが、急に足を止めた。

立ち止まった麗子の視線の先には、一軒の店があった。大きな窓ガラスの上にある看板には《ひとときの幸せ》と丸っこい文字で描かれている。

麗子は、その店の外観や、大きな窓ガラスを通して見える店内の様子には目もくれず、足早に扉に近づき、開けた。

ガラス扉に取りつけられたベルがきれいな音色を奏でた。

店内に入った麗子を焙煎されたコーヒーの香りが出迎えた。

ここはカフェ。木の温もりと穏やかな光に包まれた空間になっており、清潔感にも満ちあふれている。落ち着いた雰囲気を感じられるところだが、堅苦しさはない。

ＢＧＭは音楽ではなく、自然の音だ。風に吹かれて揺れる木の葉や、小鳥のさえずりといった森林の音がどこからともなく聞こえてくる。

広くはないが奥行きはある店内。右手にはカウンターがあり、左手には数えるばかりのテーブル席が並んでいる。右手に見える磨かれた木のカウンターの奥には、様々な産地の名が記されたコーヒー豆や茶葉の入ったガラス容器に、陶器製の洒落たカップとソーサー、曇りひとつないグラスがズラリと並んでいる。そして、男が一人いる。

黒い髪を短く刈り込んだ、背の高い男だ。年の頃は麗子の一回り上に見える。

黒いシャツにズボン、コーヒーを連想させる焦げ茶色のエプロンを身にまとっている。清潔感が感じられる身なりをした男だが、真っ黒なサングラスをかけているため、一見、強面である。

サングラスはともかく、その格好から見てわかるように、彼はこの店のマスターである。

「いらっしゃい」

ベルの音に気づくと、マスターは顔を上げて麗子を見た。その見た目にそぐう渋い声と、そぐわぬ微笑みで彼女を迎えた。サングラスで目元こそ見えないが、微笑んだその顔はなかなかにダンディーだ。

麗子は挨拶でもするように小さく手を上げた。すると、マスターが店の奥に向けて手を差し伸べた。その先には一番奥のテーブル席がある。彼女は小さくお辞儀をすると、店の奥に歩を進めた。

朝食の時間を過ぎたからか、店内には客が一人もいなかった。

麗子は、空席が目立つ店内を眺めながら、コの字の形をしたソファーに腰を下ろした。まもなくマスターがやってきて、水入りのグラスとおしぼりをテーブルに置いた。その際、彼は、麗子の表情が物悲しいことに気づいた。

「？」

どうしたのかと気にかけていると、麗子もまた気づいて苦笑いを浮かべた。

「こんな時間にめずらしいでしょ、外回りでもないのに……その、

実は、会社を辞めてきたんです。ほんと言うとリストラなんですけどね……」

麗子は悲しげに微笑み、肩をすくめた。彼女の告白を受けたマスターは、口角を下げ、つられたように悲しい顔をする。

「……いつもの？」

マスターは少しの間を置いてたずねた。麗子が小さく頷くと、それ以上のことは聞かず、すぐにカウンターへと戻っていった。

遠ざかるマスターの姿をうかがいつつ、麗子はソファーにその身を沈めた。今の気分としてはテーブルに額を押しつけたいところだったが、ファンデーションがついたりしたら迷惑だから、しないでおいた。

マスターはカウンターに立つと、すぐにコーヒー豆の焙煎を始めた。しばらくすると、なんとも香ばしい匂いが立ち始めた。

この店では注文を受けてから豆を煎る。そのため、時間はかかるが、その分味も香りも申し分ない。この店の常連である麗子はそれを不思議とも思わず、立ち込める香りに酔い痴れている。

麗子がこの店を知ったのは数年前のこと。辞めてきた会社に勤めて間もない頃だった。

仕事でミスをしてしまって、ひどく落ち込みながら駅に向かっていたとき、コーヒーの香りに誘われ、この店の存在を知った。そして、つい訪れてしまった。そのとき、気分は重く沈んでいたのだが、一杯のコーヒーを飲んだところ嘘みたいに軽くなり、晴れやかなものとなった。不思議とやる気がわきおこり、またがんばろうと思えた。

それからというもの、麗子はマスターの入れるコーヒーの虜となった。会社からの帰り道ということもあり、以来、ほぼ毎日通っている。

マスターが入れるコーヒーには不思議な魅力がある。ただ美味しいだけじゃなく、人を元気にさせる力があると思い、そして信じている。だからこそ、今日も訪れた。心の中で渦巻いている嫌な気持

ちを洗い流し、元気にさせて欲しかった。
マスターがコーヒー豆を煎り終えて、今度は挽き始めた。
コーヒー豆の砕ける音が店内に響く。麗子はその音に耳を傾けながら、店内を見回す。
（そっか、会社辞めちゃったら、なかなかこの店に来られないんじゃん。どうしよう……通うには遠いし、次の就職先がこの近くだったらいい話だけど、そんなうまくはいかないだろうし……いっそ引っ越す？　でも、会社の近くに引っ越すなんてさすがに気まずいよなぁ……）
麗子は遠い目をし、あらためて店内を見回した。これで見納めになるわけではないが、ついそうしてしまった。そうかと思えば、何故か不機嫌な顔をした。
（あーもう、会社で思い出しちゃったよ……くっそー、腹が立つ。なんであの女の名前がないわけ？）
今、麗子が頭に思い浮かべているあの女（、、、）とは、同じ課の女性社員で、入社して二年目になる後輩である。
そこそこの顔を持った女だ。美人とは言いがたいが、ブサイクともいえない中途半端な顔をしている。顔では自分のほうが勝っていると麗子は自負している。だが、男受けするのはその女のほうだ。何故なら、その女は、彼女にないものを持っている。それは胸だ。巨乳なのだ。それこそ、ホルスタインと呼びたくなるようなでかさである。女は胸ではないと言いたいが、たいていの男がその胸を選ぶ。それを知ってか、それともあてつけか、その女はいつもでかい胸を強調した格好をしてくる。
（むかつく……なにが、肩がこってしょうがないだ！　肩こりで死んでしまえ！）
麗子は、その女のことが生理的に嫌いだった。大嫌いだった。しかし、それは胸だけが理由ではない。もろもろ含めて、総合的に嫌いだった。
名の知れた大学を出てはいるが、接して見ればすぐに露見する頭

の悪さ。勉強はできるバカという奴だった。脳みそに届くはずの栄養をすべて胸に吸い取られたんじゃないかと、見るたびに思ってきた。
（巨乳女は頭が悪いというあれは迷信だと思う。でも、あいつだけは別だ！　もう二年になるのに、未だに仕事を覚えない！　一年目ならまだ許せる。けど！　二年目となったら我慢にも限度があるわよ！　なんのために会社に来てるんだつーの！）
仕事は覚えないが、男の名前や経歴は見事なほどに覚える。社内も、そして外も。
なにかといえばトイレで化粧を直し、同族と男の情報を交換し合って、定時に帰っては合コン三昧。
理想の恋人や夫を探すためだけに会社に来ているようなそんな女で、相手によってコロコロと性格を変え、男はほぼ味方につけ、女は互いに利用できる相手を確実に味方にし、山田のような人物を確実に敵に回す、ある意味一番恐ろしい女。
麗子は常々そう思い、そして嫌ってきた。
（同じ女とは思えない……でも、生物学的に見たら、あれが女なのかねぇ？）
麗子は、学生時代に男らしいと言われたことを思い出して、ちょっと情けない気持ちになった。
（私だったら、あいつをまず切り捨てるけどなぁ、会社は選ばなかったわけだ。まぁね、二年目で給料も安いし、男からの人気もあるし、他の会社で通用するとは思えないし……）
その女のことを考えるたびに苛立ちが募る。なんだか、自分に言い訳をしているような気がしてならない。
（なんで？　なんで私なわけ？　あいつより、私のほうが断然仕事できるのに！　なのに、なんで！？）
麗子はつい叫んでしまった。……心の中で。
（意味わかんない！　気分悪い！　ああもう、いい！　どうでもいい！　もう考えない！　考えたくない！　あそこは、あいつを残す

ようなそんなところだったってこと！　そんなくだらないとこ！　そうよ！　そんなところなんだから、辞めてよかったのよ！　多めに退職金もらえるんだし、さっさと見限ってしまえ！）

麗子は自分自身に言い聞かせている。なおかつ、かぶりを振って舌打ちをして、嫌なことを忘れようと躍起になっていた。とにかく落ち着こうと、目の前のグラスに手を伸ばす。ひんやりとした水を口に入れた瞬間、奥歯にズキンと鋭い痛みが走った。

知覚過敏のいやらしい痛みが口内を駆けめぐり、麗子は身震いした。痛みが静まるのをとにかく待ち、細く息を吸って吐いた。

（歯医者に行こう……う～。あ、でも、ここのお水ってやっぱり美味しいなぁ。……あれ、それにしても遅いなぁ）

しみる奥歯を舌先で舐めて温めるついでに、この店が扱っている水の美味しさをあらためて感心していた麗子だが、ふとコーヒーがまだ来ないことに気づいた。

豆を挽く音はすでに止んでいた。

カウンターを見ると、ちょうどマスターが手にトレイを持って出てくるところだった。テーブルにやってきて、コーヒーの入ったカップ一式と、たっぷりのホイップクリームが乗ったパンケーキをそっと置いた。

「？」

麗子は小首をかしげ、「えっ、頼んでないけど？」と口にしようとしたところ、マスターがそれよりも早く、「サービス」と言って微笑んだ。彼は穏やかな微笑と、コーヒーとだけ書いた伝票を残し、カウンターへと戻っていった。

（マスター……！）

マスターの優しさに感動を覚え、麗子は目を潤ませてしまう。涙を誤魔化すようにカップに手を伸ばした。

飲むのに適した温度になっているブラックコーヒーを、一口すすったところ、口の中にまず香ばしさと共に苦みが訪れ、次に適度な酸味がやってきた。さらに、ほんのかすかな甘味がふわりと広がり、

それらは絶妙な味のハーモニーを奏でながら喉を通過していった。
そして、残された余韻が鼻へと抜けた。
至高の香りに酔い痴れて、麗子は思わず身震いしてしまった。
コーヒーの美味さに身体の力が抜けて、自然とため息が漏れた。
……と、我慢していたはずの涙がほろりとこぼれ落ちた。
「本当は辞めたくなかったよぉ……」
涙と共に本音もこぼしてしまった。
「ハァ……やっぱり美味しい」
麗子は自分にすら嘘をついていた。それゆえ、店を訪れたときから今の今まで、ひどく思いつめた顔をしていた。けれど、もう違う。本音と向き合った今は、なんとも穏やかな顔をしている。
麗子はもう一度ため息をつくと、カップを置き、代わりにナイフとフォークを取った。一枚だけなのに、二枚三枚と重ねたようにふっくらしたパンケーキを食べやすい大きさに切り取り、上に乗っているシナモンパウダーがかかったホイップクリームをちょっとだけつけて、口に運んだ。
「うんまいっ！」
麗子は感激して声を上げ、フォークを持つ手を掲げた。
「マスター、美味しいよぉ！　最高！　これからも絶対通う〜！」
麗子は、カウンターにいるマスターに向かって言った。すると、彼はふっと微笑んで、ぐっと親指を立ててみせた。
マスターは一見強面だが、実は気さくである。
そのとき、出入り口の扉が開いてベルが鳴った。客が入ってきたのだ。それに気づいたマスターはハッとし、素早く手を下ろした。恥ずかしがっているのか、頬をほんのり赤らめながら、「いらっしゃい」と応対をする。
マスターは実はシャイでもある。
注文を受け、何事もなかったように豆の焙煎を始めたマスターの姿を、麗子は、周りのカウンターも含めてまるで一枚の絵のように眺めながらコーヒーとパンケーキを味わう。今だけはなにもかも忘

れて、ひとときの幸せを心から堪能している。

（4）

コーヒーを飲み干し、パンケーキも残り一切れというところで、妙な音がした。

麗子はすぐに横の空席を見やり、手を伸ばしてカバンを取った。その中から取り出したのは携帯電話だった。それがブルブルと震えている。手慣れた様子で操作し、確認する。

液晶画面に映し出された着信履歴を見たところ、麗子は眉をあげた。

「真……」

画面には、高城（たかぎ）　真（まこと）という名前と電話番号が表記されている。

（え、こんな時間になんだろう……？）

麗子は、画面に表示されている現在の時刻を確認しつつ、そう思った。

現在、午前十時。

どことなしか緊張した面持ちで通話ボタンを押し、耳に近づける。

「もしもし……？」

『あ、麗子？　ゴメン、仕事中に電話して』

「ううん。大丈夫。真も仕事中なんじゃないの？」

『いや、今、外に出てるんだよ。だから、平気』

「そう、それならいいけど……それで、なに？」

『ああ……えーっと、実はさ、大事な話があるんだよ。それで、時間、作れないかなって。その確認なんだけど』

「大事な話？　電話じゃダメなの？」

『……うん。できれば、直接会って話したいんだよ。無理か？　仕事、忙しい？』

「あ、ううん。大丈夫。時間なら作れるよ。いつでもいい。……あ、今はダメ？　私、今、外に出てるの。いつものカフェにいるんだけど」

『あ、じゃあ、すぐに行くよ。今、近くにいるしさ。すぐに行くから』
「うん。じゃあ、待ってる」
『わかった。じゃあ！』
通話が途絶えたので、麗子も電話を切った。待ち受け画面を見つめながら、考える。
（大事な話……なんだろう？　なんか、怖いなぁ。話があるって言われたら実はリストラだったわけだし。まさか、別れ話とか……？）
麗子は嫌な予感がした。軽い悪寒に見舞われ、身震いをしてしまった。
（でも、そんなに関係悪くないしなぁ。最近は仕事が忙しくて会えてなかったけど、別にケンカしたとか、冷めてるとか、そんなんじゃないし……ちゃんと好き、だし……）
麗子は自分の言葉に頬を赤らめた。
（相性も悪くない。……色んな意味で……。別れ話とかじゃないと思うんだけどなぁ……でも、だったらなんだろう？　他に大事な話ってなにがあるかな？　……お金を貸してほしいとか？　いや、あいつは女から金を借りられるようなタイプじゃないなぁ。会社をクビになったとか？　――って、それは私だし。あいつはないない。一応エリートだしねぇ。独立とかも今は考えにくいなぁ……うーん、なんだろう？）
麗子は小首をかしげながら、携帯電話をカバンの中にしまった。テーブルに肘をつき、手の上に顎を乗せて考えに更ける。そのまま、右手を皿の上のフォークに伸ばし、パンケーキの残りの一切れを口へと運んだ。なんとも行儀の悪い食べ方でパクリと頬張ったとき、ふと頭にある言葉が思い浮かんだ。
（え、まさか、プロポーズとか……？　――えええっ！？）
麗子は自分の言葉に驚き、思わず姿勢を正した。
（いや！　いやいやいや！　ないない！　ない！　……とも言い切れないかも。――っていうか、もしそうだったら嬉しい……かも）

麗子はフォークを咥えたまま、なにも乗っていない皿をじっと見つめ、自問自答する。
（大学のときからだから、もう七年……うん、七年だ。結婚か……うん、時期的には十分。会社をリストラされたその日にプロポーズ……ありだ。このまま、主婦になっちゃうのも悪くないかも。リストラでクビなわけだけど、今結婚したら結果的に寿退社ってことよね。三十を目前に無職になって沈んでたけど、沈む瀬あれば浮かぶ瀬あり。地獄で仏に会ったよう。人間万事塞翁が馬！）
麗子は心の中で、念仏でも唱えるように知るかぎりのことわざを思い浮かべると、ようやく口からフォークを抜き、パンケーキの最後の一切れをそしゃくした。彼女の顔が見る見るゆるんでゆく。幸せそうににんまりしている。
そのとき、麗子の頭の中では様々な妄想がされていた。ロマンティックなプロポーズの瞬間や、薬指に指輪をはめた左手を想像したり、向こうのご両親にあらためて挨拶しなければいけないとか、純白のウェディングドレスを身にまとった自分の姿を鏡越しに眺めていたり。しまいには、新婚旅行で遥か彼方の地に旅立った。
麗子がその顔をゆるませているとき、マスターが客に飲み物を運び、カウンターに引き返そうとしていた。幸せの絶頂にあり、もはや不気味な彼女の笑顔に気づいてハッとした。見てはいけないものを見てしまったとたじろぐ。すぐに視線を逸らしたのだが、その際、カップの中身が空になっていることに気づいた。
マスターはカウンターに戻り、お代わりの用意を始めた。すると、ベルの音がした。
扉が開いて、スーツ姿の男が入店した。
「いらっしゃい」
三十前と思われるその男はマスターとは顔見知りらしく、軽く会釈をするとさっと店内を見回し、奥のテーブルを目指して足早に歩を進めた。
マスターはお代わりの用意を中断し、飲み水を注いだグラスとお

しぼりをトレイに乗せてカウンターを出た。そのとき、男は、先客の麗子がいる一番奥のテーブル席に着いた。マスターもそのテーブル席に向かい、彼の前にグラスとおしぼりを置いた。
「コーヒーを」
男は、グラスに手を伸ばしつつ、注文した。その声は先ほどの、携帯電話のスピーカーから聞こえてきた声と同じものだった。つまり、彼が、高城　真である。
マスターは伝票を取り、男の注文を書き記した。伝票を元のところに戻すと、麗子が使った食器を下げ、カウンターへと引き返す。
「ゴメンな、いきなり」
「ううん……」
後ろから二人の声が聞こえてきたが、客の会話を盗み聞きしてはいけない。マスターは聞こえないふりをしてカウンターに戻り、二人分のコーヒーを用意する。
豆を煎り、挽き、そして抽出する。
その間、二人のことがどうも気になり、サングラス越しに見守っていたが、恋人関係のはずなのに会話が少なく、お互い何故か緊張している。
麗子は気まずそうにし、それでいてなにかを期待しているようだった。
一方、真は思いつめた顔をして俯いている。
マスターは、淹れたばかりのコーヒーを注いだ二人分のカップをトレイに乗せ、再び、二人の元に向かった。
「――ねぇ、電話で言ってた大事な話だけど……なに？」
マスターが二人の前にカップを置いたところ、それをきっかけにするように麗子が口を開いた。真も、そしてマスターも、思わず身を固めた。
邪魔してはいけないと、マスターはそそくさその場を離れる。
「あ、ああ、それなんだけど……」
真は口ごもった。視線を合わせず、しきりに俯いている。彼の言

葉に期待していた麗子だが、想像と温度差があることに気づく。
（あれ、プロポーズじゃない……？）
麗子がそう思い、小首をかしげたとき、真がテーブルに手をついて頭を下げた。
「ゴメン！　俺、おまえに隠していたことがある！　実は、ずっと前から麗子以外の人と付き合ってた！　つまり、その、浮気……してたんだ……」
真は頭を下げたまま、それらの言葉を絞り出した。
店内の空気がピンと張りつめた。
「え……」
今、声を漏らしたのは麗子である。
突然のことですぐには理解できなかった。恋人が浮気していたなんて、まったく知らなかった。思ってもみなかった。まさに青天の霹靂だった。
ショックは大きかった。心が悲しい気持ちに満たされた。万力で締め付けられているようでひどく痛かった。……けれど、少しだけホッとした。
真が正直に打ち明けてくれたことや、「してた」と言葉が過去形だったことにかすかな喜びを感じたのだ。
（ハーア……違ったんだ……）
麗子は、期待していたときの自分の姿を思い浮かべ、恥ずかしくなった。情けなかった。なにかを諦めたように鼻で笑った。ずっと正していた姿勢を崩し、ソファーに身を沈めた。
（結局、また不幸だよ……）
麗子がそう思ったとき、頭を下げたままだった真がさらなる告白をした。
「彼女とは二年前から……浮気だから、いけないことだとはわかってたんだけど、でも、今はもう浮気じゃないんだよ。本気……なんだ。彼女に……彼女が妊娠したんだよ、俺の子なんだ。だから、その……結婚しようと思ってる。しなきゃいけないし、したいとも思

ってるんだ。言い訳したくないからさ。それに、これ以上は嘘吐きたくないし、だから、ちゃんと話しておこうと思ったんだ。麗子、おまえには悪いと思ってる。本当に悪いと思ってる。でも、そういうことだから……だから、別れてほしいんだ。麗子、別れてくれ！

ゴメンッ！　本当にゴメン……」

麗子は言葉を失った。頭の中が真っ白になり、なにも考えられなくなった。

麗子は動けなくなり、声のひとつも出せなくなった。無言のまま、テーブルの上にある、手をつけていないコーヒーばかりを見つめている。

（浮気が本気……彼女……妊娠……嘘……別れて……）

麗子はそれらの断片的な言葉をしきりに繰り返している。

頭の中も心の中もグチャグチャで、ひどく気持ちが悪くなった。

そうこうしていると、真が席を立った。ポケットから取り出した小銭をテーブルの上に置いた。

「……ゴメン……」

その一言を、喉の奥から絞り出すと、真はその場を後にし、まっすぐに出口を目指した。一度も振り返ることはなかった。

そのときに鳴ったベルの音色が、麗子の耳には妙に切なく聞こえた。

麗子がカバンに手を伸ばしたのは、それからしばらくのことだった。

サイフを取りだし、千円札一枚を裏返しに置かれた伝票の上に置いた。

麗子はすぐに席を立ち、サイフとカバンを両手に抱えて出口を目指す。客とマスターの視線を受けながら、カウンターの前を通ろうとしたとき、ふとなにかを思い出したように足を止めた。

「コーヒー、美味しかったです」

麗子は精一杯笑顔を作り、マスターにその言葉を贈った。そしてまた歩を進めた。

麗子が顔を正面に戻したとき、マスターは見た。彼女の顔がくしゃりと歪んだ。
マスターは一番奥のテーブルをうかがい、麗子のために入れたコーヒーが一切手をつけられていないまま残されているのを知り、口角をわずかに下げた。
そのとき、ベルの音がした。
マスターはすぐに、店を出てゆこうとする彼女の背中に目をやった。……すると、彼の目は、彼女の背中以外のものを見た。
丸まり、小さくなった背中に“黒い靄”を見た。
「！」
マスターはハッとした。あらためて麗子の背中を見つめるも、彼女が扉の前から離れてしまったため、見えなくなった。彼は急ぎ、後を追いかけた。
麗子は肩を落とし、駅の方向にトボトボと歩いていた。見るからに憔悴している。
マスターは麗子の後ろ姿を見つけると、ずっとかけ続けていたサングラスを外し、裸眼の状態で見つめた。
マスターはもう一度黒い靄を見た。先ほどはほんの一瞬で不確かだったが、今度ははっきりとその目に捉えた。
黒い靄は確かに存在し、麗子の身体を覆い隠さんばかりにまとわりついている。
それを目の当たりにしたとたん、マスターの表情が悲しみの色に染まった。
まるで、大事ななにかを失くしてしまったようだ。
前から人がやってくるのに気づき、マスターはすぐにサングラスをかけた。そのときに垣間見えた彼の瞳だが、その色は血のように鮮やかな赤い色をしていた。
サングラスで目元を隠すと、マスターは遠のいてゆく麗子から視線を逸らした。店内に戻るべく、開けたままにしてあった扉に手を伸ばしたとき、彼はぽつりとつぶやいた。

「……さようなら……」

扉が閉まり、ベルが鳴った。それは、美しくも哀しい音色だった。

（5）

カーテンの隙間から漏れた光が目に当たり、麗子は寝返りを打った。

「うう……」

麗子はうつ伏せになり、枕に顔を押しつけた。その際、左手がベッドの下に滑り落ち、手首の絆創膏が貼られたところが、角にガツンとぶつかった。

麗子は悲鳴をあげた。

左腕をぴんと伸ばして、しばしの間震えていた。

痛みで強制的に起こされた麗子は、まだ寝ぼけて視界がぼんやりとしている中、ひどく痛む左手首を見てみれば、絆創膏の中央のガーゼの部分が赤く滲んでいた。

傷が開いてしまったようだ。

「うう、痛いなぁもう……ああ、頭が重い……うっぷ、気持ち悪いい……」

麗子はひどい顔をしている。脱力したようにまた枕に顔を埋めると、ズルズルと全身を伸ばして再び横たわった。が、お腹を下にしていると気分が悪いので、すぐに横を向いた。

光のまぶしさに目を細めつつ、壁にかけられた時計をうかがった。

現在、九時四十五分。

「うわっ！　……あ、そっか、もういいんだ」

麗子は目覚まし時計をセットし忘れたことに気づいて、慌てて飛び起きた。で、すぐに思い出した。

遅刻するはずがない。

麗子は心臓の激しい鼓動を感じながら、すっかり眠気が覚めてしまったことに苛立ちを覚えた。

「今日どうしようかなぁ……へへッ、三十を目前に無職になっちゃったよ。恋人にもフラれて、残ったものは命と金ばかりってか。…

…あ、そういえば、退職金ってどうなってるんだろう……？」
頭が重く、胃も重く、身体を起こすのもおっくうで、麗子は、足をベッドから下ろして膝をつき、横着だが器用にも座った。
「二日酔いっていうのはだね……ようするに……脱水症状なわけよ……つまり、水を取ればいいわけさ……糖分を取れればなおのことよし……胃が荒れている恐れがあるから……冷たいものよりは……温かいものを……ようするにだ……スポーツドリンクを温めて飲みましょうってことなのよ……」
麗子は、その状態から四つん這いになり、もそもそとベッドを離れる。まるで呪文でも唱えるようにぶつぶつと独り言をつぶやきながら、開けっ放しにしていた扉をくぐり抜けて、寝室からリビングに移動した。脱ぎ散らかしたとしか思えない服や下着を横へ押しやりつつ、キッチンを目指す。そんな彼女の今の姿だが、両目は腫れぼったくなって、髪はまるでライオンのたてがみのようだ。着ているものは寝間着として使っているよれよれのＴシャツにショーツだけと、とてもじゃないが人前に出られる姿ではなかった。
それらが改善されて、人前に出られる姿になったのは、およそ三時間後のことだった。つまり、昼過ぎのことである。
シミ、そばかす、肌荒れなどを隠す程度の化粧をし、髪を梳いて、セットするのが面倒なので簡単に後ろで束ねてポニーテールにした。
ジョギング用にと以前買ってあったパーカーに、着古して色あせたジーパンを合わせ、なんともラフな格好をした。靴は歩きやすいスニーカーを選んだ。
充血を隠すためのサングラスをし、ポケットにサイフだけを入れて、家を出た。

麗子は駅前の銀行を訪れた。
ＡＴＭで、まずは残高照会し、現在の預金額を調べた。
「おお……！」
画面に表示された金額に、麗子は軽く驚いた。退職金はちゃんと

振り込まれていた。
（課長、約束どおり、すぐに振り込んでくれたんだ……）
麗子は心の中で課長に感謝をした。が、すぐに当然だということに気づき、その感謝を撤回した。
とりあえず、当面の生活費用にと5万円を下ろし、麗子は早々に銀行を後にした。
自宅のある方向を目指して歩き出した。
（これからどうしよう。親には泣きつけないよなぁ……とりあえず、ハローワークにでも行かなきゃなぁ。でも、今のご時世、再就職ってそう簡単じゃないんだろうなぁ……あ、そういえば、資格とかなんにも持ってないじゃん。大卒ってだけだ。パソコンを人並みに扱えますって、今時、当たり前よね。ああ、だから皆、ヒマさえあれば勉強して、資格を取ろうとしてたんだ、なるほどねぇ。やっぱり、資格があると有利なのかねぇ？　資格、取ろうとかなぁ、どうせヒマなんだし。車の免許も取りたいなぁ。あ、その前に歯医者に行かなきゃなぁ……）
麗子はそんなことを考えながら、トボトボ、とりあえず歩を進めていると、グニャッ、という妙な感触が足の裏に。アスファルト以外のものを踏んだとすぐにわかった。
嫌な予感がしつつ、そっと足を上げてみれば、それはやはりガムだった。
グニョ～ッ、と伸びた。
「うえぇ……」
麗子は半歩後ろに下がり、ガムがくっついたほうの足の裏を地面にこすりつけて強引にはがそうとするが、それは失敗だった。ベッタリ張りついて取れなくなってしまった。
ガムがまだやわらかかったようだ。つまり、吐き出されて間がない……。
「最悪……」
これでもかと気分が滅入った。

麗子は、もう一度足の裏を地面にこすりつけてみたが、やはり取れなかった。手で取るなんて絶対に嫌だから、仕方なくそのまま歩き出した。

ニチャッ、ニチャッ、と不快な音と感触がし、一々癇に障る。

「どこのどいつだ！　マナーを守れないならガム食うな！」

麗子は、ガムを吐き捨てた名も顔を知らぬ人間に対して文句を言った。周りに人がいて、二日酔いで頭が痛いから、小さな声でだ。

今まで、あてもなく歩いているようだった麗子だが、今は、帰宅するべく早足で歩いている。このまま不快な思いをしてはいられないし、早急にガムを取り除きたかったからだ。何故なら、このスニーカーは新品なのだ。ジョギング用にと、パーカーと一緒に購入したもので、買ってからだいぶ経つが、履いて外を歩いたのはこれが初めてだった。それゆえ、少しでも早くガムを取り除きたかった。

……が、そんな彼女の思いを、無情にも邪魔する存在があった。

（くそっ、また赤か！）

横断歩道を渡ろうとするたびに信号が赤になり、一々立ち止まらなければならなかった。交通量が多いから信号を無視して渡ることもできない。待っている間に苛立ちが募る。

普段であれば特に気にも留めず、苛立ちはしても仕方ないと気持ちを切り替えるのだが、ガムのことや、これまでにあった色々なことで、まるで嫌がらせを受けているような気がしてならなかった。

舌打ちしながら待っていると、信号がようやく青になった。

（遅いっ！）

スタートダッシュ。麗子は誰よりも早く歩き出した。急ぎ、横断歩道を渡ろうとするが、ここでまた、苛立ちを助長させることが起きた。

風に吹かれてどこからともなくやってきたチラシを、ガムを踏んだほうの足で踏んづけてしまったのだ。チラシがガムにくっついて、足の裏にぺたりと張りついてしまった。

それは、横断歩道の向こうで配っているパチンコ店の宣伝チラシ

だった。
「うぐぐ……」
麗子は足を止め、歯を食いしばって悔しそうな声を漏らした。
横断歩道の中ほどに立ち止まっている麗子を、一人、また一人と避けて追い越してゆく。
二度あることは三度ある。泣きっ面に蜂。弱り目に祟り目。痛む上に塩を塗る。
怒りが頭を駆け巡り、こういった状況に見合ったことわざが次々に浮かんだ。
「ハァ〜……」
わなわなと震えていた麗子だが、とたんに脱力し、ひとつ、大きなため息を吐いた。
腹が立ち過ぎて、もうどうでもよくなった。怒りよりも、呆れや情けなさが先立った。
（フッ、まぁ待て。待て待て。ここはポジティブに考えようじゃないか。紙にくっついたのは、ある意味ラッキー。このまま紙ごと外しちゃえばいいんだから。きっと、きれいに取れるわよ、うん！）
麗子は心を鎮めようと努め、大きく深呼吸をした。
（……うん、落ち着いた）
麗子はそう自分に言い聞かせると、もう一方の足でチラシを踏み、ガムもろとも外しにかかった。――と、そのときだった。
麗子から見て左手すぐの道路を、前方から一台のバイクが走ってきた。
ヘルメットを通して見えた信号は青だった。だから、赤信号に変わる前に通り過ぎてしまおうとスピードをあげ、交差点を通過しようとした。が、そのとたん、右隣の追い越し車線を走っていた車が突然左折を試み、まさに目前に迫った。
ブレーキをかける余裕はなかった。刹那、車の左前輪部に激突。スピードを上げていたこともあって勢い止まらず、運転手もろとも跳び上がった。

「へ？」
激しい物音に気づいて顔を上げると、目前に、回転するバイク（、、、）が――。
麗子がそれをバイクだと認識したその刹那、それは、一陣の風と共に顔の横スレスレを通り過ぎた。その際、頬をわずかだがかすめた。
後ろから荒々しい音が聞こえてきた。直後、ガラスが割れるような音もした。
振り返れば、バイクが、交差点の角にある店のガラスを突き破っていた。
「いたっ」
そのとき、麗子は頬に痛みを覚えた。触れてみれば、その手にわずかだが血が付着した。
頬が切れている。どうやら、まさに紙一重だったようだ。
「キャア――ッ！」
事故を目撃した通行人の女性が悲鳴を上げた。
「事故だ！」
「バイクが突っ込んだぞ！」
「おいおい、救急車、呼んだ方がいいんじゃないか……？」
通行人が口々に騒ぎ始めた中、麗子だけはその場に立ち尽くして、言葉を失っていた。彼女は今、凄まじい悪寒をその身に感じていた。
（今の、なに……？　私、死ぬところだったんじゃ……）
麗子は、手のひらについたわずかな血と、足の下にあるチラシを見た。
（当たらなかったけど、ここに立ってなかったら、そもそも当たるはずがない……なに、これ？　なんか、おかしくない……？　一昨日から悪いことばかり……まるで悪いことがいっぺんに襲いかかってきてるみたい！）
ゾクリッ、とまた強い悪寒に襲われた。麗子はなにかの気配を察して、すぐさま後ろを振り返った。……しかし、そこには誰もいな

い。見えるのは、横断歩道の手前で、事故の様子をうかがっている通行人の姿と、事故を起こした車とその持ち主と、交差点に倒れているバイクの運転手と、その周りに広がるおびただしい量の鮮血だけだった。

そして、信号が点滅しているのに気づいた。

（ここにいたら、もっと悪いことが起きるかもっ！）

麗子は、ただちにここを離れるべきだと思った。チラシのことは忘れて、ひとまず横断歩道を渡り切るべく、バイクが突っ込んだ交差点の角にある店を背にする形で走り出した。

すると、背後から赤い光に照らされた。直後にけたたましいまでの音があがった。

店内で爆発が起き、あたりに無数のガラス片が飛び散ったのだ。その中にはバイクの残骸もあって、それは背を向けていた麗子めがけて飛んだ。しかし、直撃はせず、一瞬頭をかすめただけだった。バイクは彼女の頭上を飛び越えて、歩行用の信号機を破壊し、その向こうにあるビルの一階に突っ込んだ。

頭頂部に軽い痛みを覚えたと思えば、額から目元にかけて温かいものが流れた。

わかりきったことだが、それは血だった。バイクがかすめたところがほんのわずかだが切れていた。ついでに髪を束ねるためのゴムも切れて、麗子の後ろ髪がほどけた。

麗子は確信した。なにかが襲ってきている。目には見えない、なにか（、、、）が。

（帰ろう……もう帰ろう！　早く帰りたいっ！）

麗子は恐怖に駆られた。

流れ落ちた血が入り、片目が赤く濁ってしまったが、そんなことはどうでもよかった。気にも留めず、麗子はその場から逃げるべく走り出した。素早く横断歩道を渡りきって、事故に戸惑っている通行人を避けて自宅へ急ぐ。……だが、彼女は辿り着けなかった。

地面にチラシが散乱していた。配っていた人間が事故に驚いて落

としてしまったのだ。麗子はそのうちの一枚を、ガムのせいでチラシがへばりついてしまったほうの足で踏みつけてしまい、滑って引っくり返って天を仰いだ。

ガツンッ、という激しい音が頭の後ろで響いた刹那、鼻の奥で嫌な臭いがした。

瞬間的に目の前が真っ白になった。そして、真っ暗になった……。

（6）

「もしもし、聞こえますか？」
闇の中で声がした。
「もしも～し！」
誰かが呼んでいる。そう思ったとたん、目の前がまぶしくなった。
「ハァッ！？」
大量に息を吸い込み、まさにハッとして目を見開いた。
まず、青い空と白い雲が見えた。続いて、右手にビルと思われるコンクリートの外壁がうかがえた。左手にはなにもない。空があるばかりだ。――と、思いきや、顔がひとつ、ひょっこりと現れた。
幼い顔だ。誰かと思い、意識したところ、真っ赤な瞳に見つめられた。
目が合った。
「ああ、やっと気づいてくれた」
幼い顔がにっこりと笑った。屈託のない笑顔を浮かべているそれは、小学の高学年ぐらいの男の子だった。可愛らしい顔立ちをしている。
一見、どこにでもいそうな少年なのだが、彼が持つ色は異質なものだった。
瞳の色が赤い。まるで血のような色だ。真紅とでもいったところか。その肌は透き通るように白く、髪もまだ幼いのに真っ白だ。……いや、違う。ほんのちょっと銀色がかっているようだから、白銀。つまり、プラチナブロンドである。
「だ、誰、キミ……」
そんな少年に覗き込まれ、麗子（、、）は眉をしかめた。彼女は今、横断歩道の手前の、歩道の上にいた。コンクリート製のタイルに覆われた地面に横たわっている。
（外人？　でも、顔立ちは日本人っぽい……）

麗子は少年の顔をじっと見つめた。すると、彼が笑顔のままに手を差し伸べた。彼女は少し戸惑いつつも、その小さな手を掴もうとする。――が、彼の風貌もまた異質なことに気づき、寸前のところでその手を止めた。

少年はぼろきれのような黒衣を身にまとい、黒くて長い棒のようなものを背負っていた。その棒だが、地面につきそうになっている下側の先端には、毒々しいまでに赤い三日月を半分にしたようなものがくっついていた。それは、緩やかな湾曲を描いた、長くて鋭利な刃だった。根本は幅広く、尖端に近づくにつれて細く鋭くなっている。

それは一般的に、“鎌”と称されるものだった。それも、“大鎌”や、“草刈り鎌”と呼ばれる類のものだ。

人間味が薄く感じられる少年の容姿と風貌と、背負っている大きな鎌に気づいて、まじまじと見つめた麗子は、その顔を強張らせた。

「まっ、まさか……」

「あれ、気づいちゃいました？　フフッ。まぁ、でも、普通はわかりますよね」

麗子が出した手を引いたところ、少年が声に出して苦笑した。

「キッ、キミ、誰なの……！？」

麗子は慌てて上体を起こし、少年を警戒する。

「誰って、すでにご存じなのではありませんか？」

少年は笑顔のままに首を横に傾けた。

「……いやっ！　いやいやいや！　そんなことありえないって！　ないない！　絶対にないっ！」

脳裏にとある名称が浮かぶも、麗子はそれを自ら否定し、かき消さんとかぶりを振る。

「おやおや、ダメですよ、自分に嘘をついては。ほらほら、下を見て」

少年は差し伸べた手を引っくり返して地面を指差した。麗子はその声と動きにつられ、つい目で追って地面を見てしまった。すると、

自分の身体の下から人の足が二本、にゅっと出ていて、驚いた。
「えっ、わっ！　ごめんなさい！」
麗子は条件反射とばかりに謝り、慌てて飛び退こうとするが、そこではたとあることに気づいた。誰のものかわからないその足は、見覚えのあるスニーカーを履いており、その片方の裏には、これまた見覚えのあるチラシがぺたりと貼りついていた。
「……嘘でしょ……」
麗子は静止し、消え入るような声を漏らした。そっと、首だけを後ろに振り返らせる。そして見つけた。自分の身体の下にいて、地面に横たわっている女性の顔や上半身を。
その女性は見覚えのあるパーカーを着ていた。左の頬がわずかに裂けて出血している。頭もどこか切れているらしく、流れてきた血が片目に入り込み、白目を赤く濁らせていた。少量だが鼻血も出ている。
ダークブラウンと控えめに染められた長い髪が、地面と接する後頭部からあふれ出した鮮血にまみれている。意識がないのか、彼女の目は虚ろだった。
生気というものをまるで感じないその顔に見覚えがあった。見慣れた顔だった。とても見慣れている。毎日見ている。一日に何度も見る。何故なら、それは“自分”だった。
まったく同じ顔、同じ姿をした女性を目の当たりにし、麗子は言葉を失った。
「念のために言っておきますが、これは夢ではありませんよ。現実です。今ご覧になっているのは、立花（、、）　麗子（、、）さん、間違いなくあなたです」
少年は麗子の視線の先に移動し、足元にいる、横たわったまま動かない女性を指差した。
「……キミってさぁ、あれでしょ？　死神、なんだよね……？」
自分としか思えない女性を見つめ、しばらく沈黙していた麗子は、

ふいにたずねた。
「はい。おっしゃるとおり、ボクは死神です」
少年は自分の胸に手を当てて、あっさりと肯定した。
「……じゃあ、あれだ……私って、死んだ？　死んじゃった……？」
麗子は再び沈黙し、再びたずねた。
「……はい。立花　麗子さん、あなたはお亡くなりになりました」
少年は少し間を置いて答え、静かに頷いた。
「……」
麗子は三度、沈黙した。
「お気持ちはわかります。信じられないのも無理はありません。ですが、これはまぎれもない事実であり、現実です。もはやどうすることもできません。どうかご理解下さい」
少年は、ゆっくり、優しい口調で言った。
「……死因は？」
麗子は、倒れているもう一人の自分を見つめ、たずねた。
「えっ、死因ですか？　えーっと――」
少年は胸元から手を突っ込んで懐を探り、真っ黒な手帳を取り出した。ページをめくり、あるところで止めて確認した。
「――あ、ありました。えーっと、足を滑らせて転倒し、後頭部を強打。頭蓋骨を骨折し、脳挫傷。これが致命傷となって死亡、です」
少年は開いているページに記されてある死因を読み上げた。そして、読み終えるとすぐ手帳を閉じ、懐に戻した。で、顔を上げて麗子に意識を戻したのだが、そのときにはもう、彼女の形相は一変していた。
少年がハッとしたとき、麗子はすっくと立ち上がった。振り返りざまに手を伸ばして、彼の胸倉に掴みかかった。怒りに満ちた表情を近づける。
「わっ、わっ」
少年は驚き、困惑する。

「なんでよ……なんでそんな死に方なのよぉ！」
麗子の顔がまた一変し、今度は泣きそうな顔になった。声ではすでに泣いている。
「へっ？」
「だから！　なんでそんな死に方なのかって聞いてんのよ！？　滑って転んで頭ぶつけて死ぬなんて……それもチラシで！　だったら、その前の事故はなんだったのよっ！？」
少年はキョトンとしている。麗子はそんな彼を持ち上げて、前後に激しく揺すった。
「そっ、そこですかぁ……！？」
少年の頭が、カックンカックンと前後に揺れる。
「よりにもよってそんな死に方するなんて、恥ずかしくて死んでも死にきれないわよ！　末代までの恥！」
麗子は天を仰いで叫んだ。
「末代って……その末は、立花　麗子さん、あなたでしょうに……」
少年は一切抵抗せず、まるで身を任せるようにして揺さぶられている。
その顔は呆れている。
「そんなことはどうでもいい！　どうせ殺すんなら、もっと派手に殺しなさいよね！」
「そんなことって、言い出したのはそちらじゃないですか……後、一応訂正しておきますけど、ボクたちは殺したりしませんから。死を与えたりしません。すべては時の運。運命です。ボクたちは死後のお世話をしてるに過ぎませんから」
少年はちょっと不機嫌そうにしながら答えた。
「え、そうなの？」
「そうです」
「……じゃあ、この怒りは誰にぶつけたらいいわけ？」
一瞬興奮が冷めたかに見えたが、麗子もまた不機嫌な顔をした。
「さぁ。ご自分か神様にでもぶつけてください。ボクにぶつけるの

は八つ当たりです」
少年は麗子を指差し、次に天を指差した。
「私としては、八つ当たりでも構わないんだけどねぇ……」
麗子は少年の胸倉から片手を外すと、指を小刻みに動かしながら顔に近づけた。
「しょうがない方ですね。別に構いませんよ、どうぞお好きに。でも、そんなことしたって無意味ですよ。殴られようが、つねられようが、くすぐられようが、ボクはなにも感じませんから。ちなみに、立花　麗子さん、あなた自身もそうなんですよ」
「え？」
麗子は少年の頬をつねろうとしていたが、その言葉に手を止めた。
「ボクに触れている感覚、ありますか？」
少年は、自分の胸倉を掴んでいる麗子の手を指差し、たずねた。
「あ、あれ……？」
麗子は、指摘されてようやく気づいた。胸倉を掴んではいるが、その感触がまるでない。持ち上げているのに重さも感じなかった。頬に触ってみたが、肌触りも温もりも感じられない。柔らかそうなのに、柔らかくもない。そもそも、自分の身体が感じられなかった。確かにここにいるのに、まるでいないような錯覚に戸惑う。
「なっ、なによこれ！？」
麗子は困惑し、思わず少年から手を離してしまった。彼は真下に落ち、そのまま器用に着地した。その際、足音も衣擦れの音もしなかった。
「立花　麗子さん、あなたは今、精神のみの状態なんです。肉体はそこに倒れているほう。わかりやすく言えば、今のあなたは幽霊なんですよ」
少年は麗子の顔を指差した。
「幽霊？　……足、あるけど？」
麗子は、突きつけられた指先を見つめた。そうかと思えば足元をうかがい、自分の足がちゃんとあることを確認した。

「幽霊の足が無いというのは迷信です」
少年はすかさず答えた。
「あ、そう……」
少年の返答があまりに早く、その上、素っ気なかったので、麗子はちょっとだけムッとした。なんとなく馬鹿にされている気がしたのだ。
そのとき、どこからともなくサイレンが聞こえてきた。けたたましいその音は、徐々に二人の元に近づいてくる。すると、一台の救急車が現れて、すぐ前の道路に停まった。後ろのドアが開き、二人の救急隊員が素早く下りてきた。
二人は、歩道に倒れている麗子の元へと駆け寄った。その際、一人が立っているほうの彼女に迫った。
「ちょっ、うわっ！？」
咄嗟のことで避けられず、麗子はぶつかってしまった。と、そのとたん、麗子は大きく弾き飛ばされた。
「ぎゃんっ！」
麗子は横断歩道の中ほどまで飛ばされてしまった。――が、交通整備をしていた警官に当たってまたも弾き飛ばされ、信号機を失った柱にぶつかってようやく止まった。
まるで車にはねられたような衝撃だったので、思わず悲鳴を上げてしまったが、痛みは無かった。
「大丈夫ですか？」
少年は、救急隊員や通行人を器用に避けながら麗子の元へと移動し、手を差し伸べた。救急隊員がやってきたとき、彼一人、素早く後ろに下がって避難していた。
「いっ、今のなに！？」
麗子は混乱しつつも少年の手を取り、身体を起こそうとした。その際、彼の手の感触がないので余計に混乱してしまう。その上、自分の身体の重さや、重力なども一切感じず、軽やかに立ちあがれてしまった。

「ボクたちは、生きている方に接触すると拒絶されて、弾き飛ばされてしまうんですよ」
「拒絶……？」
麗子が眉をしかめているそのとき、もう一人の彼女の状態を確かめていた救急隊員たちが急を要する判断し、急いで頭を固定した。動かさぬよう注意しながらストレッチャーに乗せ、車に運び込んだ。そして、あっという間に走りだしてしまった。
サイレンが遠ざかる。
「あ！　ちょっと！　私の身体！」
救急車がもう一人の自分を乗せて走り出したことに気づき、麗子は慌てて追いかけようとする。が、少年に手を掴まれて止められてしまった。
「立花　麗子さん、もう一度言いますが、あなたはすでにお亡くなりになられています。早くて数分。遅くても数時間後には心臓が完全に停止し、脳や各臓器への血流が途絶え、死にます。そして、腐り始めます。精神と魂が乖離してしまった以上、もはや肉体に戻ることはできませんし、生き返ることも不可能です。諦めてください」
少年の、冷淡とも思える口調にカッときて、麗子は振り返りざまに平手を振るい、彼の頬を叩いてしまった。……が、なんの音もせず、叩いた手もなにも感じなかった。
「……失礼しました。言葉が過ぎましたね。もっと配慮すべきでした」
少年は、叩かれたことで横を向いた顔を正面に戻し、何事もなかったかのように平然とした表情を浮かべた。そして、深々と頭を下げた。
「……ゴメン……」
すると、叩いた麗子も謝った。
頭に血がのぼり、怒りに任せて叩いてしまったことを麗子は申し訳なく思った。怒りの色を反省の色に変えて、謝罪の言葉を絞り出した。

と、少年は下げていた頭を上げて、驚いたようにキョトンとした表情を浮かべた。
「立花　麗子さんって、善人(いいひと)だったんですね」
少年はニッコリと笑った。
「え、なんで……？」
「だって、すぐに謝られたじゃないですか。自分の落ち度を認めるのは難しいことです。相手にも落ち度がある場合は特に。だから、それを認め、すぐに謝れるあなたは善人です」
「は、はぁ……」
麗子は面と向かって善人だと言われて恥ずかしがっている。
「すみませんでした、ひどいことを言って。いきなり胸倉を掴まれたりしたので、乱暴な人だと誤解していました」
少年はぺこりと頭を下げた。
「あ、いや、それを言ったら私も、色々不適切な発言を……」
麗子は自分の発言を思いだし、罪悪感にとらわれた。それに加え、見るからに幼い子供に対して大人げない行動を取ってしまったと、自己嫌悪に陥った。
「ハハッ。不適切な発言って、なんだか政治家みたいですねぇ。――あっ」
声にだして笑っていた少年だが、なにかに気づいて麗子の腕を掴み、横に引っ張った。背後から通行人がやってきて、彼女に当たりそうだった。
「え！？　あ……ああ、そういうこと」
麗子は腕を引っ張られた意味を知って納得した。
「うーん、ここだと落ち着いて話ができませんねぇ。移動しましょうか。よっと」
少年は後ろ手に、背負う鎌の柄を掴んで取り、掲げた。すると、彼の身体が引っ張られるように浮かびあがった。
「わっ、うわっ」
腕を掴まれたままの麗子も浮き上がる。彼女はうろたえ、少年の

手にしがみついた。
「ビルの屋上にあがりますね」
言葉どおり、二人は交差点の角に建つビルの屋上にあがった。麗子を恐がらせないよう配慮し、静かに降り立った。
「ここなら通行人はいません」
少年はようやく麗子の腕を離した。鎌を背負い直した。
「そりゃいないだろうけど……」
麗子はハラハラしていた。高所恐怖症ではないが、それでも、単身飛行ともなれば話は別である。とはいえ、胸に手を当てても心臓の鼓動は感じない。
「色々あって説明が遅れましたが、あらためて。この度、立花　麗子さんの死後の世話を任されました、死神の命と申します。命と書いてミコト。どうぞ、よろしくお願いします」
少年は自己紹介した。彼の名前は命（みこと）と言った。
「ミコト……？」
「はい。……なにか？」
少年――命は、小首をかしげた。
「えっ、あ、ううん、なんでもない……」
麗子は素早くかぶりを振った。軽く慌てている。
「そうですか。お亡くなりになってまだ間がなく混乱されていることでしょうが、死者の方が地上に滞在できる時間には限りがありますので、申し訳ありませんが、今後の手順を簡単に説明させて頂きます。
まず、魂の善悪の重さを秤（はかり）にかけ、どちらの傾きが大きいかを調べます。善に傾けば天国への通行許可が下り、悪に傾いた場合は、残念ですが、地獄へと強制的に落ちて頂かなければなりません。天国と地獄、どちらに傾くかは、立花　麗子さん、あなたがこれまでどのような人生を歩まれてきたか、それに大きく影響します。まぁ、でも、ボクが見た限りでは善人なので、大丈夫だとは思いますけどね。

あ、ところで、もし、なにか思い残したことがあったら遠慮なくおっしゃってください。それが叶えられるものであればご協力させて頂きますよ。ただし、生き返りたい。地獄に行きたくない。生死にかかわらず、どなたかと会って話をしたい。豪遊。食事。性行為。恨みを持った人物への復讐などの願いは叶えられませんので、あしからず。叶えてあげられる願いの例としては、最後に一目、生存されているどなたかの姿や景色を見たい。知り合いの方がお亡くなりになったときのための伝言を残すなどです。……ここまではよろしいですか？」

「へっ？　あ、うん、なんとなく……」

急に問いかけられたので、麗子は軽く戸惑ってしまった。

（なんか、マニュアルを聞かされているみたいで全然頭に入らなかったなぁ……あの姿で性行為って……）

その部分だけはしっかりと聞いていたようだ。

「そうですか。では早速、立花　麗子さんの魂を査定しましょう」

命は、いつぞやのように、懐から真っ黒い手帳を取りだした。

あらためて見ると、表紙に“金色の天秤”が描かれている。

「この天秤に手を置いてください」

命は、天秤が描かれている表表紙を上にして両手で持ち、麗子に差し出した。

「査定って、なんかやだなぁ……」

麗子は不満を漏らしながらも、言われるままに手を伸ばし、恐る恐る天秤に手を置いた。すると、その手の下から金色の光が現れて、手の甲の上に手帳に描かれたものと同じデザインの天秤が浮かびあがった。

「おお！　今流行りの３Ｄ！？」

麗子がそんな冗談を言っていると、ふくらみの乏しい胸元から青い火の玉が出現した。自分の中からそんなものが出てきたことに驚いていると、その青い火の玉は天秤に飛び、左右の秤を支えている柱の先端部にある燭台に青い火を灯した。すると、左右の秤にも火

が灯った。白と黒、二色の火である。そうかと思えば、白い火のほうが若干大きくなり、秤をより深く沈ませて、天秤を一方に傾けた。
命はそれを見届けると、一度だけ頷いた。
「立花　麗子さん、お喜びください！　魂は善に傾きました。よって、天国に進む許可が与えられました。これまで、善い人生を歩まれてきましたね」
命は満面の笑みを浮かべた。
「はぁ……」
（喜んでいいんだか悪いんだか……）
麗子の心も顔も複雑そうである。
「それにしても、善の傾きが浅い。うーん、変だなぁ、もっと傾いてもおかしくないのに……なにか、悪いことしませんでした？　例えば、自分を殺そうとしたとか……」
不思議そうに天秤を見つめていた命は、ふと上目遣いになり、麗子の目を見つめた。
麗子はドキッとした。心臓の鼓動は感じないが、それでもドキッとした。思わず左手を後ろに隠し、押し黙ってしまった。
「……まぁ、いいでしょう。善に傾いたことに変わりはありませんからね」
命は手帳を下げた。すると、手の甲の上にあった天秤が消えた。彼が手帳をしまったので、麗子も手を戻した。左手はまだ隠したままである。
「さて。この後は、なにか思い残すことがあって、それが叶えられるものであればご協力致します。それでご満足頂けるか、限られた時間が押し迫った場合、天国への道を開いて、現世から旅立って頂きます。それでボクの仕事は終わりです」
「思い残すこと、ねぇ……願いかぁ、なにがいいかなぁ？」
麗子はまだ左手のことで動揺していた。正確には左手首の傷である。彼女は平静を装い、さも考えていますと言わんばかりに腕を組み、小首をかしげている。ついでに傷を隠していた。

「……あのう？」
「ん、あっ、ちょっ、ちょっと待って！　すぐに考えるから！」
「あ、いえ、そうじゃなくて。その……実は、折り入ってご相談があるのですが……」
「え、相談？」
「はい。それで、よかったらお時間を頂けませんかねぇ？」
「時間？　……う、うん。別にいいけど」
「本当ですか？　ああ、よかったぁ！」
命はホッとしたように喜び、柏手（かしわで）を打った。パンッ、という音はしない。
「で、相談って？」
「あ、ここではなんなので、場所を変えましょう。もっと落ち着いて話ができるところに」
そう言うと、命はまた鎌を手にした。その長い柄にまたがり、浮かびあがった。まるで魔女がホウキで空を飛ぶときのような姿だ。
ちなみに、三日月を半分にしたような形をした鋭利な刃は真下を向いている。
「どうぞ。後ろに乗ってください」
「あ、うん」
麗子は誘われるままにまたがった。
（んー……なんか、いよいよファンタジーになってきたなぁ。ちょっと前まではホラーやサスペンスっぽくてよかったのに。ファンタジーって苦手なのよねぇ……）
麗子は心の中でぶつぶつとつぶやきながら、恐る恐る腰を下ろす。彼女が身を任せても、鎌はちゃんと浮いている。
「では！」
命の掛け声に合わせて鎌が上昇を始めた。同時に前進する。まさに魔女の魔法のホウキのように飛び立ち、屋上を離れて空へと舞いあがった。
真下に事故のあった交差点が見える。麗子は、歩道の一角に赤黒

い小さな点を見つけた。
「ああもう、夢でも見ている気分……夢なら早く覚めてほしいわ」
麗子は切ない顔をした。
「そうですねぇ……うん、ようは夢みたいなものですよ、そう違いはありません。それに、夢だと思えば楽ですよ。ただ、覚めてはくれませんけどね……」
麗子のつぶやきに命は答えた。すると、その表情が悲しみの色に染まった。
「……？」
麗子は背後にいるので、命の今の表情を見ることはできない。けれど、その小さな背中から、彼が今、悲しんでいるのだとわかった。
（なにかしらの事情がありそうね……ミコトかぁ。フフッ、一瞬ドキッとしちゃったなぁ。まだ未練があるのかねぇ……あ、未練で思い出したけど、結局、一円も使ってないじゃん、退職金。死ぬってわかっていたら贅沢したのになぁ。ま、両親にお金を残せたからいいか。ゴメンねぇ、先に死んじゃって。今まで散々してきたけど、まーた、親不孝なことしちゃったよ……ゴメン、ゴメンねぇ、本当にゴメンねぇ……）
麗子は、その顔をくしゃくしゃにした。今、彼女は泣いている。けれど、その目からは涙が流れない。ほんの一滴も流れてはくれなかった。
麗子はようやく自覚した。心底思い知った。自分はもう生きてはいないのだ、と……。

（7）

「こちらです」
命は、とある建物の前で麗子を下ろした。そして、目の前のガラス扉に手を向けた。
「こちらって……」
麗子は視線を上げ、大きな窓ガラスのその上にある看板を見た。
そこには丸っこい文字で《ひとときの幸せ》と描かれていた。
「……な、なんでここ？」
行きつけの店を前にし、麗子は戸惑った。
「さぁ、入りましょう」
そう言うと、命は扉に歩を進めた。近づき、扉はもう目の前だというのに何故か足を止めず、ノブに手をかけるなど開けるそぶりも一切見せず、ただただ直進する。
ぶつかると思いきや、すり抜けてしまった。
「おお！　……って、私はどうしたらいいの？　私もすり抜けられ……ないじゃんかっ！」
見事なすり抜けに感心した麗子だが、独り取り残されてしまったことに気づき、困惑。自分もすり抜けられるのかと思い、近づいて手を伸ばしてみたが、音もなく当たるばかりで一向にすり抜けられない。正攻法としてノブを掴んで引っ張ってみたが、鍵でもかかっているのかビクともしない。しかし、店はちゃんと営業しており、鍵がかかっている様子もない。それなのに何故か開かず、そして何故すり抜けられないのかと、彼女はその場で右往左往する。
「ちょっと！　ねぇ、キミ！」
麗子は扉を叩き、店内にいる命に呼びかけた。しかし、叩く音はせず、彼は振り返りもしない。すると、彼ではない人物が扉に近づいてきた。マスターだ。
扉が開いて、ベルが美しい音色を奏でた。

麗子は扉が開くと知ってすかさず後ろに下がった。いつぞやのように当たって弾き飛ばされてはかなわないと、距離を取った。
「マ、マスター……？」
呼びかけてみたが、マスターは無反応で、麗子の存在に気づいていないらしく、素通りしていった。扉の横の、店内の様子を一望できる大きな窓ガラスの前に立ち、持っていた雑巾で表面を磨き始めた。
「あ、今のうちに……」
扉が開いたままになっていると気づいた麗子は、マスターを気にしつつ、扉をくぐった。そのとき、先に入っていた命は、すでに店の一番奥にいた。
麗子が客の目を気にしつつ、追いかけるように奥を目指すと、命は、トイレに続く扉の横にある、《従業員専用》と書かれたプレートがついている扉へと歩を進ませた。そしてまた独り、先にすり抜けていってしまった。
「あ！　もう、またぁ～！？」
従業員専用とある扉の前まで来て、麗子はまた右往左往する。念のためもう一度試してみるが、やっぱりすり抜けられない。
どうしたものかと、扉を前にして悩んでいると、ベルの音がした。マスターが店に戻り、扉を閉めたのだ。彼はまっすぐ、麗子がいる奥を目指す。
ぶつかると弾き飛ばされる。麗子は壁に身体を密着させてなんとかやり過ごそうとする。まもなくやってきたマスターは彼女の前を通り過ぎて、従業員専用とある扉を開けて入っていった。
麗子は当たらなかったことにホッとしつつ、扉の奥を覗いた。
そこには部屋がひとつあった。
内装は店内と変わらず、テーブルとイスがあるだけの簡素な部屋だ。従業員専用とある割にはそれ以外の物がなく、そこはまるで個室のようだ。
先に部屋に入っていた命は、すでに席のひとつに着いていた。

「こんなところあったんだ……」
初めて見る部屋をめずらしく思いながら、麗子も入った。
「さぁ、どうぞ。座ってください」
命は麗子を呼びつつ、手招きをした。彼女が気づいて視線を向けたところ、彼は真向かいにある席へと手を差し伸べた。彼女はすすめられるままに席に移動する。
部屋の中央に置かれている一台のテーブル。椅子は二席しかない。
麗子はもうひとつの椅子に座るべく、背もたれを掴んで引こうとした。が、出入り口の扉のようにビクともしなかった。それで気づいたのだが、椅子はテーブルから少し離した状態で置かれていて、ちょうど人一人が座れるほどの隙間があった。
麗子は正解を見つけたと言わんばかりに、その隙間に身体を滑り込ませた。
麗子が席に着くと、なにかを待つように、ずっと扉の横に佇んでいたマスターが動いた。開けたままにしてあった扉をくぐり、早々に部屋を出た。そのときはちゃんと扉を閉めた。
麗子は、閉め切られた扉を不思議そうに見つめる。
「えー、では早速、話に入らせて頂きますね」
すると、命が喋りだした。
「単刀直入に申しますと、これはスカウトです。死神へのスカウト。立花　麗子さん、死神として働いてみたいとは思いませんか？」
命は姿勢を正し、ぺこりとお辞儀をしたかと思えば、なんの前置きもなしにそのような発言をし、可愛らしく小首をかしげてみせた。
「え……ええっ！？　いや、ちょっと待ってよ！　いきなり過ぎるって！　色々あって、わけわかんないからっ！」
話があまりにも急過ぎて、麗子は困惑した。
「死神のスカウト！？　いや、その前に、どうしてここなの！？――っていうか壁！　キミみたいに通れなかったんだけど！？」
気になることが多過ぎて収拾がつかない。
「あー……アハハ、見るからに混乱してますねぇ。まぁまぁ、落ち

着いて。とりあえず、話を先に進めましょう。色々疑問はあると思いますが、追々ちゃんとご説明しますから」
命は笑うばかりで答えてはくれなかった。麗子は、どうして今教えてくれないのかと、納得できないでいる。不満と戸惑いを抱かずにはいられない。が、彼は構わず話を進める。
「では、あらためて。立花　麗子さん、ボクはあなたに、死神になって頂きたいと思っています。死神とは、その名のとおり、死の神。死をつかさどる神のことです。有名なのでご存知だとは思いますが、この死神という存在は、人に限らず、ボクたちが今いるこの世界、地上に生きる様々な生物の死を管理しています。とはいえ、ボクのような生前人であった死神がお世話をするのは、もっぱら人ですけどね」
命は自分の胸に手を当てた。
「え、じゃあ、キミも人だったの？」
「もちろんです。ボクだってこのとおり、人ですよ。見えませんか？」
「……見えなくもない……」
「曖昧なお答えですねぇ」
命は苦笑した。
「あ、じゃあ、キミもスカウトで？」
「いえいえ。ボクのときはまだスカウトを行ってはいなかったので、進んでなったというか、させられたというか……まぁ、そんなところです」
「つまり、強制ってこと？」
「はっきり言ってしまえばそうなりますかね。とはいえ、嫌々なったわけではありません。それに、やめようと思えばいつでもやめられましたしね。――おっと、話がズレちゃいましたので、本題に戻します。
ボクたち死神は、亡くなられた方々、つまり死者の方々の死後のお世話をするにあたり、その方が死神になれる条件に見合っていれ

ば、こうして、積極的にスカウトのお話を持ちかけています」
「死神にならないかって？」
「はい」
「じゃあ、私はその条件に見合っているわけ？」
「そういうことです。ちなみにその条件ですが、第一に、天秤が善に傾いた方であること。ただし、特例として稀に、悪に傾いた方が選ばれることもあります。次に年齢です。十歳以上でなければいけません。年齢に関しても特例はあります。続いて性別ですが、これは問いません。なので、ニューハーフの方であっても大丈夫です。あ、今はオネェと呼ぶのが流行りですかね？」
「いや、どっちでもいいから」
麗子は顔の前で手を左右に振った。
「すみません。えー、その次はですね、精神的にまともで、人間性に問題のない方であること、です。後、これが一番重要なのですが、死というものをある程度理解し、ちゃんと重んじることができる方でなければいけません。なので、死を軽視する方や、殺人、自殺など、自己の都合で故意に他人に死を与えた方や、自ら死を選ばれたような方は死神にはなれません。まぁ、当たり前なんですけどね」
「……」
命が最後の条件を説明すると、麗子は片目をぴくりとさせた。そのとき、テーブルの下の見えないところでは、左手首の傷を覆い隠すようにぎゅっと握り締めていた。
「これらの条件ですが、その理由は言わなくてもおわかりだとは思います。ですが、一応させて頂きますね。決まりではないんですが、誤解のないようにしておきたいので。
まず、善でなければいけない。これは、天秤が悪に傾いた方は地獄に落ちなければいけないので、そのような方を採用するわけにはいきませんから、当然の話です。稀に特例があると言いましたが、それは例えば、若い頃は悪に手を染める人生を送ってきたけれど、心から反省し、晩年は出家したり、ボランティアに身を捧げるなど、

他人に尽くす人生を送ってきた方が亡くなり、善が着々と実りつつも、わずかに足らずに悪に傾いてしまった場合などです。情けではありませんが、地獄へ落とすのではなく、死後も死神として尽くさせる――という選択肢がある場合です。本当に稀ですが、前例はあるんですよ。

死神は死を扱う仕事ですから、死に対して責任感を持てないような方には務まりません。なので、人道的に問題のある方は採用できません。精神的に弱い方や、不安定な方、人間性に問題のある方も一様にダメです。死を軽視することは決して許されません。

性別を問わないのは当たり前なので省きます。年齢に制限があるのは、自我や人間性が確立しており、死を理解できていなければいけないからです。ようするに、物心がついているかどうかということです。自我が有って無いような赤ん坊には任せられませんからね。ちなみに、自我がしっかりしていて、死というものをある程度理解できていれば、十歳未満であっても採用されることはあります。例えば、ボクとか」

命は自分を指差した。

「ボクが死神になったのは九歳のときでした」

「ふーん。じゃあ、その姿は九歳なんだ？」

「はい」

「……ちなみに、精神年齢はいくつなわけ？」

「そうですねぇ、ざっと千は超えているでしょうかね」

「見た目は子供だけど、中身はすっごいお爺ちゃんなのね」

「失礼ですね……」

命はムッとし、眉間にしわを寄せた。一方の麗子は意地悪な笑みを浮かべている。

「話を続けますね。最後の条件ですが――」

命が話を続けようとしたとき、扉が開いてマスターが入ってきた。彼はすぐに扉を閉め、テーブルに歩み寄り、トレイの上にあった茶道などに用いる茶碗とコーヒーカップ一式を静かに置いた。茶碗は

命の前に、コーヒーカップ一式は麗子の前に置いた。
茶碗には抹茶が入っており、コーヒーカップには文字どおり、コーヒーが入っている。
「え……？　えっ！？」
麗子は、目の前に置かれたものと、傍らに立つマスターの顔を交互に見やった。すると、彼がさっとサングラスを外した。その下から現れたのは赤い色をした瞳だった。命のものと似ているが、マスターのほうが若干色が薄い。
マスターはその瞳で、麗子をじっと見つめたかと思えば、ふっと優しく微笑んだ。
「私の姿が見えるの……？」
麗子が自分を指差してたずねたところ、マスターは一度だけ頷いた。
「どっ、どういうこと！？」
見えていると確信した麗子は興奮を隠せず、思わず声を上げた。そうしてたずねた相手はマスターではなく、命だった。そのとき彼は、茶碗を手にし、口元に運んでいた。
「ハァ～、やっぱり美味しい。さすがですね」
命は満足そうな顔をし、マスターに向かってぐっと親指を立てた。すると、マスターも親指を立てて返した。そして、その手を麗子にも向けると、サングラスをかけ直し、そのまま部屋を後にした。
「え……ちょっと、マスター！」
呼びかけも虚しく、扉は閉ざされた。
「寡黙な方ですが、実はお茶目なんですよねぇ。ズズゥ～ッ」
そう言うと、命はまた抹茶をすすった。麗子は、その声と音に気づいたように振り返る。今の彼女の表情は、まるでミステリーもののドラマに出てくるような――ラストに近づき、さぁこれから謎を解明しようというときの、なにも知らずに困惑する脇役のような表情をしていた。
命は音も立てずに茶碗を置いた。

「こちらのマスターさんは、いわゆる見える（、、、）方なんですよ。ボクたち死神の姿まで見えてしまうんだから、すごい力ですよねぇ」
命は閉ざされている扉に向けて手を差し伸べた。マスターを指しているのだろう。
「見える……？　それって、あれ？　霊能力者ってこと？」
「はい、ようはあれですね。とはいえ、お祓いをしたり、成仏させたりする力ではなくて、幽霊と呼ばれる類のものや、ボクたちのような神に類似するものなど、通常は人に見えないものが見える眼を持ってらっしゃいます。千里眼とか、心眼と呼ばれる類のものです。あと、そういったものに触ることができて、その身に宿る霊的なエネルギー――生きてる気と書いて“生気”を他人に分け与えることもできますから、こうして、肉体を持たないボクたちでも持つことができ、その上飲めて味までわかってしまう。彼は本当に類稀なる力の持ち主ですよね」
命は手元にある茶碗をあらためて持ち上げて、実際に飲んでみせた。
早速、麗子も試してみる。
「うわ、ほんとだ！　あ、熱い！　すごい、匂いもわかる！　美味しい！」
麗子は一々反応し、よい表情を見せた。
「いつもとおんなじ味だ……でも、なんか変な感じ……」
カップを触ると、その熱さや陶器製の表面のなめらかさ、それに硬さが感じられるのに、テーブルに触っても触っている感触がなく、その違いに違和感を覚えた。
「皆さん、そうおっしゃいますね」
命は、麗子の反応を眺めて楽しんでいる。
「マスターにそんな力があったなんて……不思議な人だとは思っていたけど……」
麗子は閉ざされた扉を見つめた。

「幽霊はともかく、ボクたち死神まで見える方は稀です。しかも、普通に話ができますし、触れたり、こうしてお茶を飲んだりもできるので、せっかくですから親しくさせて頂いてます。お店を利用させて頂いたり、霊障などで困っている場合にはご相談に乗ったり」
「死神と親しくって……」
麗子は呆れた顔をしつつ、コーヒーカップに手を伸ばす。
「フフッ。――ところで、そろそろ話を再開しても構いませんか？」
「え？　あ、うん。どうぞ」
麗子は急いで一口すすり、ソーサーに戻した。慌てて飲んだものだから、舌を火傷した。――が、そう感じただけだった。
「ではでは。えーっと……あれ、どこまで話したかな？」
命は話しだそうとするも、どこからか忘れたようで、眉をしかめて小首をかしげた。
「えーっと……あ、キミが実はすんごいお爺ちゃんってところじゃない？」
麗子も同じ向きに小首をかしげ、意地悪な顔をした。
「……ボクは九歳のときに死んで、死神になりました。ですから、実年齢も、精神年齢も、九歳！　……です。――で、最後の条件ですが……」
命は九歳を強調した。
（精神年齢まで九歳って……）
麗子は心の中でつぶやきつつ、苦笑した。
「……ああ、そうでした。自殺の件でしたね」
命は話の再開どころを思い出した。と思えば、その表情が何故か曇る。
（ん……？）
麗子は、命の表情の変化に気づいた。
「えー、自殺された方がダメなのは言わずもがなです。自殺というのは、生命を授かった存在としてもっとも犯してはならない罪です。大罪。最大の罪です。自らの命を捨てたような方を死神にするわけ

にはいきません。……ボクとしては、自殺された方は一人残らず、強制してでも死神にして、その罪の重さを思い知らせるため、半永久的に他人の死を見送り続けなければならないようにすべきだと思いますがね……」

命の口調が変わった。

（あれ、怒ってる……？　お爺ちゃんのところかな？　それとも、自殺……？）

自殺という言葉を思い浮かべると、麗子の右手は無意識に左手首を掴んだ。

「ご存知ですか？　子孫繁栄のための一手段や、犠牲、生物としての本能以外で自殺することができるのは、人間だけなんですよ。以前、どなたかがおっしゃっていましたけど、自殺は人間にのみ許されたことで、それは人間の特権である。――フッ、馬鹿げています。そんなものは！　自殺を、正当化するためだけの言葉に過ぎません！　人間は……人間という生き物（、、、）は、進化の過程で理性というものを得ましたが、その代償として、生命であることの根源の一部を失ってしまった。それはいわば退化に等しい。そんなことにも気づけないで、この地上の実質的な支配者として君臨していると思い上がっている人間は、人間という生き物は、どんな生き物にも劣る！　……と、神様はおっしゃっています」

なんとも険しい表情を浮かべ、雄弁にそう語ってみせた命だが、長く沈黙したと思えば、とたんに笑顔を浮かべた。

徐々に重みと凄みを増していった言葉や、表情についてゆけず、終始無言をつらぬいていた麗子は、命が見せたふいの笑顔にただただ困惑した。

命が自殺について語りだしたとき、その目の色が変わった。実際に色が変化したわけではないのだが、凄みというか、普段は表に出さない感情が込められていたように思えた。

麗子は、命の、つぶらでルビーのように鮮やかに輝いている瞳の奥に、底知れぬ根深い怒りがあるように思えた。憎しみも感じた。

彼が笑顔を浮かべたとたん、それらはふっと消失したが、本当に消えてしまったのか、再び心の奥底にしまい直されたのかまではわかりようがない。知りたいとも思わなかった。
「――以上が、死神になれる方の条件です。立花　麗子さん、あなたはそういった条件をパスしているわけですよ」
　命は未だに笑顔を浮かべている。可愛らしい笑顔だが、どこか嘘くさい。作り物を見ているようで、麗子は疑念を抱かずにはいられなかった。
「へ、へぇー……でも、それぐらいの条件だったら、結構ざらにいるんじゃないの？」
「いやいや、それがそうでもないんですよ」
「そ、そうなの？」
「はい、そうなんですよ。この日本だと、毎日、だいたい二千人から三千人ほどの方々がお亡くなりになるのですが、その善と悪の割合は悪が多く、善は半数にも満たないんです。といっても、悪の方の亡くなる割合が、善の方と比べて多いというだけなんですけどね。ちなみになんですが、一日、少なくとも二千人以上の方がお亡くなりになっているわけですけど、単純計算すると、一年でおよそ七十三万人の方がお亡くなりになっていることになります。日本の人口は現在およそ一億三千万人ですから、ざっと百八十年で滅亡してしまうんですよ。大変ですよねぇ」
　命の、作り物のような笑顔が次第に自然なものになってゆく。百八十年の件に近づくにつれて、その笑顔が輝きを増し、「大変ですよねぇ」の辺りになると喜色満面になった。
「かっ、可愛い顔して、なんてえげつないことを……」
　それとは対照的に、麗子の表情はどんどんと曇る。
「とはいえ、一日の出生率はわずかに上回っていますから、滅亡することはありません」
「そ、そうなんだ……」
「はい、そうなんですよ。それに、今の時代はずっとマシですよ。

特にこの日本は長らく戦争をしていません。否が応でも人を殺めなければいけない時代ではないですし、悪事に手を染めなければ生きられない時代でもない。それに切腹もない」

麗子は納得した。

「半数に達してはいませんが、近づいているのは確かです。そういう意味では、この日本という国は恵まれていると言ってもいいでしょうね」

「なるほど……でもさぁ、私なんかが死神になっていいの？　どこにでもいる、三十路を目前にした女なんだけど」

麗子は自分を指差した。

「構いませんよ。というより、なって頂けるととてもありがたい」

「なんで？」

「現在、死神は人手不足なんですよ……」

命はため息を漏らした。

「人手不足？」

「ええ、そうなんです。世界の人口は年々増え続けて、ざっと七十億人と言われています。正確にはそれ以上いますがね。一方の日本は減少傾向にある。ですが、それ以上に減少しているのが死神の数です。世界の人口と比べてかなりの開きがある……特に足りていないのは、この日本です。久しく戦争がなく、善の割合が高くなっていると先ほどは言いましたが、それはつまり、昔に比べて死者の数も減っているわけです。その上日本人の寿命が延びている。喜ばしいことですが、その喜びにはそういった弊害も生じているんですよ。

ちなみに、特に日本がと言いましたが、だったら他から持ってくればいいのでは？　と、疑問に思われたかもしれません。ですが、言葉の問題や人間性、文化、宗教の違いなどを考慮すると、国によって管轄をわけるべきなんです。つまり、日本人の世話は、日本人がすべきなんです。

今の日本人の考え方や傾向もあるのでしょうが、今の方々――現代人は、死神になりたがらない方が多い。昔であれば、死神という

存在を特別視してくれて、使命感からも自ら名乗りを上げてくれる方が多かったんですが、今の方々は死んだ後まで働きたくないとか、他人に尽くしたくないとか、他人の死など見たくもないとか……」
「ああ、確かにねぇ……」
麗子は大いに納得した。生前――といってもほんの数日前のことだが、仕事をしていたときも、新入社員など自分よりも若い人間と接したとき、そういったギャップをひしひし感じることが多々あった。彼女は今時とは呼べないタイプで、年相応ではなかったから、余計に感じていたのだろうが、それでも数年だ。それが死後、千年も死神として過ごしてきた命からしてみれば、なおさらだろう。と、彼女は思った。
「生活が豊かになり、寿命が延びたことで、長寿の方の場合、人生に満足してしまって、死後、これといって思い残すこともなく天国に旅立たれてしまう方が多く、別の事例では、天国でも地獄でもどちらでもいいからさっさと行って、とにかく、なにもかもを忘れてしまいたいといったような方も意外に多くいらっしゃって……若くして亡くなられた方は、他人や死んだ後の世界に興味がなかったり、死神になってくれてもろくに仕事をせず、生前に見られなかった世界を観光気分で好き放題飛びまわって、結果的にはクビに……」
（あ、ダメなんだそれ……）
麗子は、死神になれば世界を見てまわれるかもしれないと思い、ちょっと期待していた。
「それに、死神は強制ではなく、あらかじめ決められた年数、仕事をしなければいけないとかの契約制や義務制でもないので、本人が辞めたいといえば辞めることができてしまう。そのため、たいていの方が長続きしないんです。興味があって死神になってはみたけど、他人の死を見るのはやっぱり辛いとか、ただ働きなんか冗談じゃないって……」
「えっ、ただ働きなの？　あ、じゃあ、ボランティアってことだ」
「ええ、神の使いとして働くわけですからね。報酬を支払うわけに

はいきません。それに、ようは死人なのでお給料なんか発生しませんし、サービスで一日だけ生き返らせるとか、来世に優遇されるとか、そういったこともできません。つまり、飲まず、食わず、眠らず、疲れずで、ただひらすら他人の死の世話をしなければいけないわけなんです。こうやって考えると、嫌がるのも当然ですよねぇ……デメリットばっかりですもん。メリットといえば、死後、家族や世界がどうなってゆくのか、その行く末が知ることができるぐらい……だから、皆、すぐに辞めてしまうんですよ……」

「なんだかなぁ……この世もあの世も世知辛いのね」

麗子は自分の境遇もあり、切なくてたまらなかった。

「スケジュールが過密なんですよ……その上、新しい死神発掘のノルマまで課されていて、その結果、さらに辞める人が増えて……そろそろ、システムそのものを変えるべきだとは思うのですが、これがまた複雑で、この日本のようになにかを変えようと思っても色々な障害が発生して、結局はなにも進展せず、刻一刻と時間ばかりが無駄に過ぎてしまう……ですから、一人でも多く死神になって頂けると、とてもありがたいんです」

そう言うと、命は上目づかいになり、麗子の目を見つめた。

（うう、視線が痛い……捨てられている子犬かおまえは……！　くそぉ、生きているときには必要ないってクビを切られたのに、死んでから求められるなんて、そんな皮肉な……）

麗子は心底情けない気持ちになった。

「どうでしょう、死神という仕事に興味ありませんか？　こんな話をしたあとにおたずねするのもなんだとは思いますが……」

命は上目づかいを続けながらたずねた。すると、麗子は腕を組み、目を閉じて、「ん～」と唸りながら考え込んだ。

「……興味はある！」

麗子はしばし考え、そして、一度だけ頷いた。

「本当ですか！？」

命は思わず身を乗り出した。

「うん。辞めたいときに辞められるんだよね？　だったら、おためしで経験してみるのも有りかと思う。それに、突然リストラされて無職になるわ、大学時代からの恋人には浮気されてフラれるわ、よりにもよってあんな死に方するわでもう散々！　このままだと死んでも死にきれないわよ！　……って、もう死んでるんだけどね」
　自分で言ってあらためて情けなくなり、麗子は項垂れた。
「おためしでも構いません！　何事もまずは経験ですからね！　それに向き不向きもありますし！」
「そう？　……じゃあ、やってみようかなぁ、死神」
「本当ですか！？　やったぁっ！」
　命は大いに喜び、柏手を打った。無論、音はしない。そんな彼の姿は、まるで親にオモチャでも買ってもらった幼子のようだった。見た目は確かに幼子である。なものだから、麗子はつい可愛いと思い、微笑んでしまった。
「無職だからねぇ、ちょうどいい再就職だわ。それに、死神として第二の人生を送るっていうのも面白いじゃない。……それに……」
　麗子はふと目線を下げ、テーブルの下にある左手首を見やった。
（それにこれは、命を粗末にしようとした私への罰みたいなものだしね……）
　麗子は、左手首に斜めに走る小さな傷を、そっと指でなぞった。
「では、早速行きましょうか、冥府へ！」
　命は素早く席を立った。座る前に外し、壁に立てかけてあった鎌を手にする。
「冥府？」
　麗子が目線を上げたとき、命はなにもないところに向かって鎌をサッと振るった。
　赤い三日月が虚空を切り裂いた。すると、一筋の切れ目が走り、縦横に大きく広がって、この部屋とは異なる景色を見せる大きな穴が出現した。
　赤黒い荒野のような風景が見える。

「な、なにこれ……？」
麗子も席を立ち、その穴に近づいた。すると、鎌を背負った命に腕を掴まれた。
「この向こうは冥府に繋がっています。そこには、すべての死神を統治する神、冥府の王、ハデス様がいらっしゃいます。さぁ、行きましょう！」
命は麗子の手を引き、その穴に向かって歩き出した。
「ハデス？　ハデスってまさか！？　――わっ、ちょっ、ええぇっ！？」
麗子は強引に穴の中へと引っ張り込まれた。
二人がくぐり抜けると、その穴はすぐに閉じ、音も立てず、忽然と消え失せた。

それからしばらくすると、扉が開いた。
マスターが部屋に入ってきて、テーブルに残されていた食器を片づけてすぐに出てゆく。そして、扉を閉める際、彼はぽつりとつぶやいた。
「がんばれ」

（8）

赤黒い荒野のような世界が、どこまでもどこまでも続いている。
そのくすんだような色は、空気に触れて酸化した血液のようだった。
「……ここが冥府なの？」
麗子は、砂と岩だけの世界を見つめ、たずねた。
遥か彼方に見える地平線や、大地と同じ色の暗雲に覆われた空も眺めた。
色が同じなので、空と大地の境目がわかりづらい。
「はい、ここが冥府です。ハデス様が統治する世界です」
隣に立つ命が言った。
「なにも無いのね……冥府っていうから、地獄みたいなところを想像してたんだけど」
「ここは元々死者のために創られた世界なんです。死後、ここに送られて、天国と地獄、どちらの道に進むべきか、その神判が下るのを待つ一時的な場所でした。ただ、それではどうしても時間がかかってしまって、始めの頃、ここは死者であふれ返ってしまっていたそうです。無計画ですよねぇ。その後、時間短縮も兼ねて、ボクたち死神という存在が生まれました。それからというもの、一々ここに送る必要はなくなりましたから不要となり、今では、冥府とは名ばかりで、ハデス様がお住まいになられている世界に過ぎません」
命は荒野のような世界を指して説明した。
「ふーん。だからなにも無いんだ」
麗子はその場でぐるりと回り、世界を一望した。そのとき、あるものが目に入った。
「え……」
とたん、怪訝な顔をした。
「……ねぇ、あれってさぁ、なんなのかなぁ？　私にはビルに見え

るんだけど……」
麗子はまばたきをしたり、目をこすったりして、何度もそれを見返した。しかし、何度見てもそれは変わらず、確かにそこにあった。
まるで、バベルの塔を思わせるように高々と垂直に聳え立ち、暗雲を突き破っているそれは、近代的な超高層ビルだった。
「はい、見たままにビルです。正確にはビルディング。千メートル以上あるので、ハイパービルディングと呼ぶのがより正確ですね」
――もとい、超々高層ビルだった。
「いやいや、そういうことを聞いてるんじゃないって」
「もちろん、わかってますよ。ジョークですよ、ジョーク。――あれがハデス様のお住まいです。冥府の王のお城ですね」
命は、超々高層ビル――略して《ビル》を指差した。
「あれが？　……なんでビルなわけ？」
麗子は眉をしかめた。
「皆さん、そうおっしゃいます。ありえないですよねぇ……あれは」
命は呆れた顔をし、遥か彼方に見えるビルを見つめた。
「うん。これ以上ないというほどに不釣り合いだわ」
麗子は賛同した。
「それも皆さんおっしゃいます。今はあんなのですけど、昔は中世のお城を模した造りになっていて、意外に好評だったんですよ。でも、ハデス様が勝手に変えちゃって……」
「お城がビルにねぇ……ここにも時代の波って来るのね。時って残酷よね」
「ハデス様、新しい物好きなんですよねぇ。前のお城好きだったのになぁ……では、行きましょうか」
命はビルに向かって歩き出した。
「なーんか、人間くさい神様ねぇ……」
麗子もその後に続く。
遥か彼方のビルを目指して、荒野のような世界を歩く二人。ただ

歩いているのも退屈なので、麗子は気になることをたずねてみた。
「ねぇねぇ、ハデスってさぁ、ギリシャ神話に出てくる神様の名前よね？　確か長男で、ゼウスとかポセイドンは弟にあたるんじゃなかったっけ？」
「また唐突ですね。でも、はい、そのとおりです。よくご存知ですね」
「一時期、神話とかにハマったことがあってねぇ。ハデスが長男で、ポセイドンが次男。ゼウスが三男の末っ子よね？　姉も三人いたと思うけど、そのあたりはよく覚えてないわ。ゼウスの妻のヘラぐらいは知ってるけど」
「ヘスティア様とデメテル様ですよ」
「あ、それだ」
「ヘスティア様、デメテル様、ヘラ様、ハデス様、ポセイドン様、ゼウス様の順です」
「そうだったそうだった。……でも、なんでギリシャ神話なの？　日本だったら閻魔大王とかじゃないの？」
「閻魔大王は仏教・ヒンドゥー教に登場する神様ですから、正確には中国やインド、ネパールなどです。でも、ようは名前が違うだけで存在自体は一緒なんですよ。ハデス様も、閻魔大王様も」
「そうなの？」
「はい。キリスト教だと悪魔になってしまうんですが、サタン。エジプトではアヌビス神。神道ではイザナミノミコトやスサノオノミコトとか、死をつかさどる神という存在は一緒でも、宗教や信仰によって名前や存在が変わってしまうんです」
「へぇ～」
麗子は素直に感心している。
「日本という国は様々な宗教が存在します。なのに、何故だが目立った争いがなく、共存していると言っても過言ではない多宗教国家です。なので、どれかひとつに統一してしまうと色々ややこしいことになってしまうんですよ。そのため、この日本では、特定の宗教

に入っている方を除き、立花　麗子さんのように、家は特定の宗教に入っていても本人にこだわりがない場合や、そもそも無宗教な方は、小説、マンガ、テレビ、アニメ、映画、ゲームなど、いわゆるメディアで題材として多く用いられ、近年、その名が広く知られている、ギリシャ神話で統一しています。ギリシャ神話にも宗教は存在しますが、少数派でクレームが少ないので」

「クレームって……あるの？」

命はこくりと頷いた。

「宗教というのは特にデリケートな部分です。歴史的に見ても、戦争の火種となった主な原因のひとつに必ず含まれます。ここをおざなりにするとあとが怖い」

「なるほど」

麗子は大いに納得した。

「ですから、あらかじめお世話する方の宗教の有無や、その種類を確認して区分けをし、その方に適した者がお世話をするようになっています。仏教ならば仏教。キリスト教ならキリスト教。種類によってお世話の仕方も変わりますからね」

「色々と面倒なのね」

「そうなんですよ。宗教ってめんどくさいんですねぇ……」

「な、なんか危険だなぁ、その発言……あれ？　じゃあさ、神様は二人以上いるってことなの？　ハデスに、閻魔大王に。他にも色々いるんでしょ？」

「はい。宗教や信仰の数だけ神様はいますね」

「え、でも、さっき、神様はひとつだって言ってたじゃない？　てことは、一人で何役もこなしてるってこと？」

「……？　ボク、ひとつだと言いましたか？」

「え、違ったっけ？」

「ええ、多分違うと思います。あ、一緒とは言いましたよ。神という存在は一緒と」

「あれ、そうだっけ？　ゴメンゴメン」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それに、当たらずとも遠からず（、、、、、、、、）ですし」
「ん、どういうこと？」
「おっしゃったじゃないですか、一人で何役もこなしていると。あれはある意味正解なんですよ」
「？」
「つまりですね、死をつかさどる神という存在は元々ひとつで、そこから様々な神様が生まれて分かれている、ということです。ハデス様とか、閻魔大王様とか」
「……？」
「ちょっとわかりにくいですかね。では、もっと簡単に説明しましょう。――会社があります。その中にあるメインコンピューターを死をつかさどる神様の本体だとすると、各課にあるサブコンピューターがその分身。つまり、ハデス様であったり閻魔大王様であったりするわけです」
「あ、なんとなくわかってきたかも」
「それはよかった。さらに言ってしまえば、解離性同一障害。いわゆる、多重人格です。世界という脳の中、個々の人格が個々の世界を生み出して、個々の意思で動いているわけです。その人格のひとつがハデス様で、その世界がこの冥府なんです」
麗子はより納得し、何度も頷いた。
「――にしても、多重人格って……」
が、すぐに呆れた顔をした。
「でも、わかりやすいでしょ？」
「まぁねぇ……あ、でもさぁ、ゼウスとかポセイドンとか、兄弟の件はどうなってるの？　単なる設定とか？」
「いえいえ、設定ではありませんよ。ゼウス様もポセイドン様も、ちゃんと存在します。お二方も、ハデス様のようにメインがあってサブがあるんです。ようするに、多重人格のひとつなわけですね。だから、別の人格も存在する。その関係性も兄弟であったり、他人

であったり、神様によって異なります。でも、ハデス様、ポセイドン様、ゼウス様の場合、実際に兄弟です。まぁ、ようするに、神様ですから、そのあたりに抜かりはないってことですよ」
「じゃあ、これから会うハデスは、ギリシャ神話に出てくるハデスそのものってことだ」
「そういうことです。……ところで、そろそろ様をつけて頂けませんか？　ハデス様と」
「あ、そっか、ゴメンゴメン。今後は上司になるわけだもんね。ハデス様！」
「上司って、間違ってはいませんが、一応神様ですよ？」
「キミだって一応って言ってんじゃん……」
「おっと、これは失言」
命は自分の口に手を当てた。
「あれ、兄弟ってことはさぁ、その仲はやっぱり険悪なの？」
「……え？」
麗子がその質問をしたとたん、命はぴたりと足を止めた。
「ご存知でしたか……？」
「うん、まぁ。なんだっけ、仲違いの理由……ああ、そうだ、確かクジ引きだ」
麗子も足を止め、後ろを振り返った。仲違いの理由を思い出すと、ぽんと手を打った。
「ええ、そのとおりです、クジ引きです……」
命の表情が見るからに曇った。
「確か、ハデス、ポセイドン、ゼウスの男三人で世界のどこを統治するか揉めに揉めて、最終的にクジ引きで決めることになったんだけど、結果、三男で末っ子のゼウスが一番競争率の高かった天界と人間界を取っちゃって、ポセイドンは海を。で、ハデスは一番不人気だった冥府を取っちゃって、死者や罪人の管理をしなくちゃいけなくなったんだ。そうだよね？」
「はい、ほぼ合ってます……」

「それが理由でギスギスした関係になっちゃったのよねぇ……人間も、神様も、どうして兄弟って争うことが多いのかねぇ？　一人っ子の私にはわかんない世界だわ」
　麗子は小首をかしげ、また歩き出した。すると、命が慌てて追いかけてきて、そのまま追い抜き、彼女の前に回り込んだ。
「そのことをハデス様の前で言ってはいけませんよ！　絶対にっ！」
「えっ、な、なんで？」
「禁句なんです、それ……！」
「あ、ああ……」
「ハデス様は根深い方で、一度でも怒らせたら、一生どころか永遠に嫌われます……！」
「永遠って……」
「実際、ゼウス様のことはもうずっと嫌ってらっしゃいます。よっぽどのことがない限り、会おうともしません。まぁ、それはお互い様なんですけど。他の方々はそうでもないんですがねぇ……」
「じゃあ、気をつけるわ」
「ぜひともそうして下さい！」
　命は大きく頷くと、くるりと後ろを振り返り、正面を向いた。そしてまた歩きだした。麗子も再び歩を進める。
「新しい物好きで、根深くて、クジ運が悪いってことはわかったけど、ハデスって――あ、ハデス様ってどんな人物なの？　あ、神様だから、人じゃなくて神か。神物って、なんか変よね」
　麗子は苦笑した。
「お独りでなにを言ってるんです？」
　命は後ろを振り返った。麗子が隣に移動したので、顔も横を向いた。
「そうですねぇ、冥府の王ですから、恐ろしいイメージがありますが、怒らせない限りは怖くはありません。普段は温厚でお優しい方です。無邪気な一面もありますね。責任感の強さは神々の中でも一番でしょう。真面目で、始めは冥府を統治することを嫌っていたよ

うですが、だからといって決して手を抜くような真似はされません」
「へぇ、意外」
「残念ながら、皆さんそうおっしゃいます……」
命は本当に残念そうに項垂れた。
「でも、さすが長男って感じね。確かに末っ子の方が不真面目だし、浮気はするし」
「それについてはノーコメント。ですが、ハデス様は一途なお方ですよ。浮気なんかされません。……恐ろしくてできないと言うべきかもしれませんが……」
命は最後にぽつりとつぶやいた。
「ん？　なんか聞こえたんだけど……？」
「え、なんです？　空耳では？　とにかく、お会いになればわかります。意外と気が合うかもしれませんよ。立花　麗子さん、ハデス様とどこか気質が似ているところがありますから」
「ふーん、そうなんだ……ところでさぁ、遠くない？　いつになったら着くの？」
麗子は疲れた顔をし、立ち止まった。
行けども行けども、遥か彼方に見えるビルに辿り着けない。
「冥府を満喫してもらおうと思っていたんですが……そろそろ飛びましょうかね？」
命も足を止めた。背負っている鎌を手にする。
「お願い！　疲れはしないけど、もうウンザリ！　だって、あのビル以外おんなじなんだもん！　もう飽きた！」
麗子はげんなりした顔をし、荒野のような世界を指差しながら一望した。
「わかりました。では」
命はその場に鎌を浮かせると、ぴょんと飛び乗り、長い柄の上に腰を下ろした。麗子も彼の後ろに乗った。
二人を乗せた鎌はまもなく浮き上がり、遥か彼方に見えるビルを目指して飛び立った。

（9）

「でっかぁっ！」
天空を貫かんばかりのビルを前にし、麗子は声を張りあげた。
「こちらがハデス様のお城です」
命は、ビルの正面入り口に向かって手を差し伸べると、先導するように歩きだした。
「これ、何階建てなの？」
麗子もあとに続いた。
「外から見ると何百階とあるように見えますが、実は四階建てです」
命は正面入り口の大きな回転扉をくぐり抜けた。
「え、四階……？」
麗子は怪訝な顔をしつつ、また後に続いた。
回転扉の先には広いエントランスがあった。天井が高い。壁は一面ガラス張りで、床は鏡のように磨かれた大理石によって一面覆われている。
そこは清潔感に満ち溢れた空間だった。が、その反面、生活感がまるでなく、ホテルか会社のようで、外観どおりのビルだった。とはいえ受付はなく、ソファーなど腰を休められるところもない。調度品は一切飾られておらず、観葉植物もないので、完成してまもなくのようだった。
「なんにもないのね……」
麗子は内装に淋しさを覚え、残念そうにつぶやいた。
「必要ないですからね」
命は奥を目指しながら答えた。彼が向かう先にはエレベーターがあった。
「ここに誰かが訪れるのは、立花　麗子さんのように、死神になると了承して頂いた方をお連れしたときや、事情により呼び出された場合に限られます。ボクたち死神はもっぱら地上にいて、普段は冥

府にはいませんし、ここに住んでもいません。そもそも、家は必要ないですからね」
命はエレベーターを前にして立ち止まると、麗子が来るのを待ち、扉の横の壁にひとつだけあるボタンを押した。すぐに扉が開いた。
命、麗子の順に素早く乗り込んだ。
「ほんとだ。ボタンが三つしかない」
麗子は、扉の横にある各階を表すボタンを見やった。
ボタンが三つ、縦に一列に並んでいる。それぞれ、数字ではなくて文字が記されている。しかも、何故か日本語で、上から順に《地上》《倉庫》《玉座の間》と記されてあった。
麗子はそのボタンに軽い疑問を覚え、たずねようとするが――、
「文字が日本語なのは単にそう見えるだけで、見る人によって言語が変わる仕組みです。ボタンが三つしかないのは、それ以上必要ないから。今いるこのエントランスがないのは、ここに戻ってくる必要がないからです」
――と、その前に、命がすべて答えてしまった。
「あ、そう……」
たずねる手間が省けたとはいえ、その素早い対応に軽い不満を覚えた麗子は、唇を尖らせて、すねたような顔をした。
「では」
命は構わず手を伸ばして、一番下にある《玉座の間》のボタンを押した。外枠の部分がパッと点灯すると、扉が閉まった。
「あ、到着までは数分かかりますので、頑張ってくださいね」
命は、なにやら意味深な言葉を口にすると、何故か鎌を手にし、その場でぴょんと飛びあがって腰を下ろし、浮遊した。
「……？　それってどういう――ぎゃんっ！？」
なにをしているのか、がんばれとはどういうことなのか、麗子がそれをたずねようとした瞬間、突然身体が浮き上がって天井に激突した。
「ハデス様がいらっしゃる玉座の間は、だいたい、地球の地表から

コア――中心核までの距離があり、その移動に数分かかります。そんな短い時間で移動するわけですから、その速度は凄まじく、結果、そうして貼りついてしまうんです。ようするに慣性の法則ですね」
　天井に貼りつき、身動きひとつできないでいる麗子の姿を見上げ、命は説明をする。
「そっ、そういうことは、もっと、早く言いなさいよぉ～……！」
　麗子は身体を動かそうと躍起になっている。……が、動かせるのはせいぜい指ぐらいだ。
「すみません。でも、肉体がないので、痛くもかゆくも苦しくもありませんよ。少しの間なので我慢して下さいね。ちなみに、ボクはどうして平気なのかと言うと、このエレベーターと同じ速度で、同じ動きをしているからです。つまり、降りているわけですね。見た目にはわからないでしょうけど。それともうひとつ、念のために言っておきますが、立花　麗子さんが、ボクと同じように鎌に乗ってもダメなんですよ。この鎌と一体化しなければ、結局は天井に貼りついちゃうんです。これはかなりコツがいるんで、教えてすぐにできることではなく、どちらにしても我慢して頂くしかないんです。すみませんねぇ。とにかく頑張ってください」
　申し訳なさそうにしている命だが、その目や口元は笑っている。
　麗子は今、そんな命の微笑や、並んでいる三つのボタンのその上にある、現在の階数を表しているような数字を睨まんばかりに見つめている。それはどうやら、階数を表すものではなく、どれぐらいの距離を降りたかを表すもののようで、その桁が目まぐるしく増えていっている。
　すでに、大阪～東京間は超えている。

　それから数分後のこと。それはまた突然に起きた。麗子が落下したのだ。
「うわっ、ふぎゃあっ！？」
　弾かれたように天井を離れ、べしゃりと床に叩きつけられてしま

った。
すると、扉がひとりでに開いた。
「ご苦労様でした。到着しましたよ」
命は床に降り立ち、鎌を背負い直すと、顔面から突っ伏している麗子を見やり、言った。すると、彼女はなにかを言いたげに片手を伸ばした。彼はその手を掴み、ズルズルと引きずりながらエレベーターを降りた。
二人が外に出ると、扉がまたひとりでに閉まった。
「大丈夫ですか？」
命は後ろを振り返り、足元にある麗子の顔を見下ろした。
「だっ、大丈夫に見える……？」
見上げるように睨み返す麗子。その全身がピクピクと痙攣している。
「いいえ、見えません」
命はかぶりを振り、にっこりと笑った。正面に向き直すと、再び麗子の手を引いて進みだした。
エレベーターの外には広い通路があった。一本道で、ずっと奥に扉が見える。
真っ黒な扉だ。壁が白いので、より強調されて見える。命はその扉を目指していた。
「感受性が強いようなので、心配してはいたんですが、やっぱり動けなくなりましたか。思い込みの力ってすごいですよね。まぁ、無理もないです。もし肉体があったら、今頃は全身の骨がバラバラ。内臓は潰れちゃってますもん」
「おっ、恐ろしいことをさらっと言うな……！」
「これは失敬。それにしても、ハデス様も意地悪なことしますよね、まったく……改善を要求しても一向にしてくれない」
命はもどかしそうにし、ため息をついた。
「忠告のひとつもしてくれないキミもどうかと思うけどね……」
「だって、言ったところで結果は同じですもん。それに、言わない

方が面白い」
命はにっと笑った。
「あなたのような気さくな方であれば冗談も言えますし、そうじゃない方の場合、平謝りでもして、すべての責任をハデス様に押しつけてしまえばいい。というよりも、そもそもハデス様が悪いんです」
命は笑顔のままに振り返った。
「無邪気な顔した悪魔めぇ……！」
「悪魔？　いいえ、ボクは死神ですよ」
命は嬉しそうな顔をしながらまた正面を向いた。
「それにしても、痙攣まで起こして立てなくなるなんて、なかなかの思い込みの強さです。死神は精神力がものをいう仕事ですから、意外と向いているかもしれませんね」
「それって、喜んでいいの……？」
「ええ、もちろんです。喜んでください。才能に恵まれたわけですから」
「死んでから役立っても嬉しくない……！」
「アハハッ、それもそうですね」
命は無邪気に笑った。

命は麗子を引きずりながら、廊下の突き当たりにある、真っ黒な扉の前で足を止めた。彼が立ち止まったのを知り、麗子は視線を上げた。そして、思わず息を飲んだ。
大きな二枚扉が壁のように立ちはだかっている。通路と同じだけの高さと幅いっぱいのそれは金属製で、その重厚感、重圧感には圧倒する。
麗子が言葉を失っている理由はそれだけではない。真の理由は、その扉に施されている彫刻である。
二本の角を持つ骸骨が、立体感を持たせる手法で描かれている。
その骸骨だが、頭部は牛や山羊のような形をし、横に突き出した立派な角を有している。上半身は人間のもののようで、下半身は四

足の動物らしく、細い尻尾を持っている。
まるで、伝説上の生き物であるケンタウロスの骸骨である。
骨のみの左手に金色に輝く天秤を持ち、高々と掲げている。右手には命が背負っているものによく似た鎌を持ち、振るっている。
なんとも禍々しいでたちをしたそれは燃えさかる火中に立っており、その周りには無数の躯が死屍累々と転がっていて、今にも断末魔の叫びが聞こえてきそうだ。
「この扉の向こうが玉座の間です。ところで、そろそろ起きて頂けません？　もう動けるでしょう」
命は扉を前にしても動じず、後ろを振り返って足元にいる麗子を見下ろした。そのとき彼女は、怯えたような顔をし、彫刻を見つめていた。
「ね、ねぇ、あれってなに……？　もしかして、あれがハデスなの……？」
麗子は扉の彫刻を指差し、恐る恐るたずねた。
「はい、ハデス様をイメージしたイラストです」
「そ、そう……どんな姿をしてるのかって想像はしてたけど、まさか、こんな……」
麗子は見るからにたじろいでいる。すると、命が、「ハァ……」とため息をついた。
「立花　麗子さん、ボクの話、ちゃんと聞いてましたか？　あれは、ハデス様をイメージしたイラスト（、、、、）です。イメージであって、ハデス様のお姿をそのまま描いたものではありませんよ」
「えっ、そうなの？」
麗子はキョトンとした。
「あれは、ハデス様がどこからか見つけてきたものです。多分、地上でしょうね。えらくお気に入りで、皆にも見せてやりたいとおっしゃって、自ら扉に描かれたんです。でも、それは所詮口実で、本音はイタズラ。嫌がらせです。迷惑なんですよねぇ……この絵には皆、本当に困ってるんです。せっかくスカウトに成功してここまで

連れてきたのに、この絵を見られた方の中にはハデス様のことを誤解して怖がってしまって、やっぱりやめると言いだしたり……」
命は項垂れた。
「な、なんじゃそりゃ……私もちょっと思ったわよ！」
「あ、やっぱり？　ハァ……エレベーターもそうですけど、言ったところで聞き入れてくれる方ではありませんし、そんなことでやめるような奴は元々向いていないんだと突っぱねる始末で……」
命はさらに項垂れた。
「なんか、ハデスってめんどくさい奴ね」
「はい……でも、神様なんですよねぇ……」
命は今までになく大きなため息をついた。
「……で、結局、どんな姿なの？」
麗子はひょいと身体を起こし、その場であぐらをかいた。
「普段は人の姿をされています。そのほうがなにかと都合がいいそうで、好んでなられていますね。見た目は男前ですよ。あ、今はイケメンと言った方がいいですかね？　ただ、目つきがかなり悪いですね。泣く子も黙るって感じです」
「顔のいいヤクザみたいな？」
「あー、そんな感じですね。うん。それも、昔かたぎな感じです」
麗子は想像して納得した。
「目つき悪いし、乱暴でわがままでやんちゃで、子供っぽいところがありますが、一応は神様ですから、大丈夫ですよ」
「どこが大丈夫なのかまったくわからないわ……にしても、聞いていないからってキミも好き放題言うわねぇ、いいの？」
麗子は苦笑した。
「え、なにを言ってるんです、聞いているに決まってるじゃないですか。神様なんだから。地獄耳ですよ、地獄耳。ここは冥府ですけど」
「えっ！？　じゃ、じゃあ、今までの会話は……？」
「無論、筒抜けです。聞いているとわかってて言ってますもん」

命は自分を指差した。
「ちょっ！　先に言いなさいよ！　……私、なに言ったっけ？」
「大丈夫ですよ、一応は神様ですから。横暴な真似や無碍に扱うなんてことはできません。ちょっと口調が荒かったり、対応が雑になるかもしれませんが」
命は笑顔でそう答えると、歩を進めて扉に近づいた。すると、扉がひとりでに動き出し、地響きのような音を立てながら左右に開いた。
扉の向こうには真っ暗な闇が広がっていた。なにも見えない。だが、ふいに、ボッ！　という音と共に光が生まれた。それは青い炎で、左右にひとつずつ、そこに燭台があるわけでもないのに生まれて、闇を照らし始めた。まもなく、その奥に新たな炎が生まれた。同じ青い炎だ。そうかと思えば、またまもなく新たな炎が生まれた。さらにまた。そしてまた。そうして、まるで道でも描くように等間隔に炎が生まれ、奥へ奥へと続いてゆく。
「では、参りましょう」
命は、炎が浮かび上がらせた道に向けて手を差し伸べた。
「ふぅー……考えをあらためたくなる気持ち、なんかわかるわ……」
麗子は憂鬱な顔をして細くため息を吐きだすと、おもむろに立ち上がり、命に近づいた。そして、共に扉をくぐり抜けた。
「なんでこんなに暗いのよぉ……」
麗子は命の背後にぴたりと貼りつき、周りの闇に怯えてビクビクしている。
「演出だそうです」
「アホか……！」
麗子が苛立って思わず声を荒げたとき、後ろで大きな音があがった。彼女はギョッとし、素早く後ろを振り返った。見れば、扉が閉まっている。
「たっ、退路を断たれた！」
麗子は愕然とした。

「なんですか、退路って……さぁ、行きますよ」
命は呆れた顔をしながら、奥を目指してズンズンと進む。独りになるのが怖い麗子は、すぐに追いかけて距離を詰める。
青い炎に導かれるように真っ直ぐ奥を目指していると、椅子が見えた。明かりに照らされる形で浮かび上がったそれは見上げるほどに大きい。無数の骨を組んで作られたような凝ったデザインをしており、それを見た麗子は扉の彫刻を思いだした。
大きさやその派手さから、あれは玉座で、ハデスのためのものであろうと麗子は思った。そして、「悪趣味……」と感想を述べた。
「同感です。神様なんですから、これはないですよねぇ……これじゃあ、魔王ですよ」
命のその言葉に、麗子は大いに納得した。
「で、その魔王様はどこにいるの？」
目の前の悪趣味な玉座には誰も座っていない。
「もう、またなにかイタズラを考えているんじゃ……？」
命はあたりをキョロキョロした。と、そのとき、ふとあることを思いだした。
「そういえば、立花　麗子さんって、犬は平気ですか？」
命は麗子の顔を見た。
「犬？　唐突になに？　うん、まぁ、平気――っていうか、好きだけど、なんで？　えっ、犬がいるの？」
ふいな質問に眉をしかめた麗子だが、この場に犬がいるかもしれないと思うと、とたんに笑顔になった。
「はい、まぁ、いるにはいるんですけどね……」
命は口ごもり、さっと視線を逸らした。
「……どうして口ごもる？　視線を逸らす？　そして、どうして遠い目を……？」
麗子は笑みを消し、怪訝な顔をした。
「いやぁ、そのぉ……犬には違いないんですよ。ただ普通じゃなくて……まず、頭が三つありまして、たてがみがヘビで……あっ、へ

ビは大丈夫ですか？」
命はまた麗子に視線を向けた。
「ちょっと待て。おいおい、私はそれがなにかを知っているぞ。まさかそれは……地獄の門番とか言われている、ケルベロスではあるまいな？」
麗子は命に顔を近づけた。にこやかな顔をしているが、妙に威圧感がある。
「あ、やっぱりご存知でした？　じゃあ、大丈夫ですね」
命もにっこりと笑った。安心したようだ。
「いやいやいや、大丈夫じゃないでしょ！　ケルベロスって、あのケルベロスでしょ！？　とても大きくて、獰猛で、死者を食べるっていうあの――ヒィッ！？」
突然悲鳴をあげたかと思えば、麗子はある一点を見つめ、沈黙した。視線の先には石の壁があった。青い炎が生み出す明かりに照らされて浮びあがっている。そこに、別のあるものもまた浮びあがっていた。それは影だった。
犬を連想させる、前に突き出したような形をした頭と、胴体半分。その頭だが、ひとつではなく、重なり合うように三つ存在している。
麗子はそれを目の当たりにしてひどく驚き、そして怯えた。咄嗟に、手近にあった命にしがみついた。抱え上げ、ぎゅっと抱きしめる。そのまま、影から遠ざかるべく、抜き足差し足で後ずさる。
すると、ふいに影が消えた。闇の中に引っ込んだ。
麗子はそれに気づいてハッとし、思わず立ち止まった。彼女がその顔を強張らせたとき、それは背後から聞こえてきた。
麗子にはそれが、なにかの生き物の呼吸音に聞こえた。真っ先に頭に思い浮かんだのは犬だった。舌を出して体温調節をしているときの姿である。
背後になにかいる。それはきっと犬だ。
麗子はそう確信すると、抱えている命を盾にするように構えて、恐る恐る、後ろを振り返った。そして、そっと横から覗き込んだ。

すると、そこには――なにもいなかった。
「……あれ？」
闇があるばかりだった。しかし、呼吸音はまだ聞こえている。
「下ですよ」
麗子が怪訝な顔をしていると、盾にされている命が言った。
「下？」
麗子は導かれるように足元を見やった。そして、見つけた。
「キャンッ」
甲高い鳴き声を発したそれは、黄金色をしたつぶらな瞳で麗子のことを見上げていた。短くて小さくて尻尾をフリフリさせているそれは、真っ黒い毛並みの一匹の子犬だった。だが、どこにでもいるような普通の子犬ではない。同じ頭が三つあって、それぞれの首に細いヘビが絡みついていて、まるで首輪のようになっている。
その姿はまさにケルベロスだった。とても小さなケルベロスである。
「キャア～ッ！　可愛い～っ！」
麗子は黄色い声をあげたかと思えば、命を投げ捨ててその場にしゃがみ込んだ。彼女が手を差し伸べると、ケルベロスは警戒することなく自ら近づき、じゃれてきた。なんとも人懐っこい。三つの頭で彼女の手を舐めたり、命じてもいないのにお手をしている。
「うひゃあ～っ！」
実は可愛いものに目がない麗子。これには堪らず、今までに見せたことのない笑顔を浮かべている。まさに満面の笑みだ。
「こんなにちっちゃいのに、ちゃんとケルベロスなんだ～！　ケルベロスなのに、なんでこんなに可愛いのぉ～？」
麗子はもうご機嫌である。ほんの今まで怖がっていたのが嘘のようだ。
「……」
そんな麗子に対し、不満を抱く者が一人いる。命である。投げ捨てられるという不当な扱いを受けた彼は、まるでひもの切れた操り

人形のように無造作に横たわり、じっと彼女のことをうかがっている。……もとい、睨んでいる。
「ねぇ、なんで？　なんでこんなにちっちゃいの？」
命の不満を訴える眼差しにも気づかず、麗子はたずねた。彼女は今、その場に寝転んだケルベロスのお腹をわしゃわしゃと撫でている。ケルベロスは喜んでいるのか、後ろ足をしきりに動かしている。
「……その子は、生まれ変わってまだ間がないんですよ」
命は不満を顔に表しながら身体を起こした。
「生まれ変わり？　え、じゃあ、ケルベロスなのに死んじゃうの？」
「当然です。ケルベロスと言えど、生き物であることに変わりはありません。肉体は時が経つほどに成長し、いつしか老い、そして朽ちる。ハデス様たち神様であってもそれは同じことです。時間からは逃れられません」
「そうなんだ……でも、おかげで今のこの子と出会えたし、良しとする！」
麗子は大きく頷くと、ケルベロスを抱きかかえた。
「何様ですか……あ！　まったくもう、またくだらないことを考えて……！」
麗子の物言いに呆れた命だが、ふいにハッとし、急に不機嫌になった。
「……？」
麗子は不思議そうにし、命を見た。そして気づいた。彼の視線が自分に向いていない。背後に向けられている。彼女は何気なく後ろを振り返った。
「クカカカカカッ！」
すぐ目の前に、二本の角を生やしたしゃれこうべがあり、上下の顎を打ち鳴らしながら軽快に笑った。
「！？」
麗子は目を丸くした。
それは、入り口の扉の彫刻と同じ姿をした、大きな怪物だった。

その大きな顔をさらに近づけて、カパッ、と口を抉じ開けた。
「キャアアア――――ッ！」
麗子は恐怖のあまりに叫んだ。その際、反射的に右手に拳を作り、力一杯振るった。
渾身の右フックが怪物の下顎に炸裂した。
「あっ」
そう声を漏らしたのは命だった。
直後、怪物はしゃれこうべをぐるりと一回転させた。そして、一歩、二歩と後ずさったかと思えば、今度は全身で一回転した後、ぐしゃりと崩れ落ちた。バラバラと、あたりに骨が散らばった。すると、急にもうもうと白煙が吹き出し、巨体を包み隠した。
すぐに煙は晴れたのだが、そのときにはもう怪物の姿は忽然と消えていて、代わりに、命よりも小さな男の子が横たわっていた。
金色の髪をしたその男の子は、気を失っているようでぐったりしていた。
「え、誰……？」
右の拳を硬く握り締め、もう一発と身構えていた麗子は、急なことに戸惑ってしまった。すると、彼女の左腕の中にいたケルベロスが自らの意志で床に下り、倒れている男の子に駆け寄った。
「ハァ～……その方がハデス様です……」
大きなため息を吐いたかと思えば、命はぽつりとつぶやいた。
「……えっ！？」
麗子は少しの間を置いて驚き、思わず振り返った。握り締めていた拳に気づき、慌てて後ろに隠した。
「キャンキャンッ」
男の子に向かって吠え、その顔をペロペロと舐めていたケルベロスは、まるでお手でもするように前足を持ち上げ、彼の顔に乗せた。ちょっとしつこいぐらいに何度も繰り返す。けれど、男の子は微動だにしない。
完全に目を回しており、いわゆるグロッキーの状態だった。

（10）

大小様々な骨で組み立てられたような悪趣味な玉座に、幼子がちょこんと座っている。

命よりもなお幼いその男の子は、黒い大きな布を腰に巻き、一方の端を左肩から左腕にかけて袖のようにし、腰のほうに巻きつけて固定するという独特な、いわゆる民族衣装を身にまとっていた。それは“ヒマティオン”と呼ばれる、古代ギリシャで用いられていた一枚布の服である。

そんな風変わりな身形をした幼子。肩まで伸びた長い金髪を有し、その二つの瞳は血を思わせるような鮮やかな赤い色をしている。それでいて、炎のようにギラギラしていた。肌の色は生白い。……もとい、青白い。

幼子は、その小さな身体では高過ぎる位置にある肘掛けに無理やり寄りかかって、ふんぞり返っていた。そんな彼の顔の、左側の下顎はぷっくりと腫れており、痛々しいまでのアザまでできている。また鼻血でもでたのか、左の鼻孔には丸めて細くしたティッシュが押し込まれている。

「チィッ！」

幼子は強く舌打ちした。見るからに不機嫌で、その見た目には似つかわしくない形相と鋭い目つきをし、正面の、少し距離を取って佇んでいる二人の人物を睨みつけている。

麗子と命である。

睨まれているのは麗子だ。そんな彼女もまた、負けずに睨み返していた。

「ちょっ、ちょっと、お気持ちはわかりますが、相手は曲がりなりにも神様なんですよ、態度をあらためて……」

両者の視線がぶつかって火花を散らしている。――といっても、実際にでているわけではない。たとえである。

それを見かねた命は、両者の間に割って入り、まずは麗子に囁き、すぐに振り返って、幼子の元へと駆け寄った。
「ハデス様も、いい加減お怒りをお鎮めください。あなたは神様なんですよ？　だいたい、いつまでそうしているんです？　そんな傷、できるはずないでしょう。そもそもどうして鼻血がでるんですか、当たってもいないのに……」
「チィッ！」
命に、ハデスと呼ばれた幼子は、また強く舌打ちをすると、肘掛けに寄りかかっていた身体を起こして姿勢を正した。すると、その動作の間に下顎の腫れが引き、痛々しいアザも消えてしまった。
ハデスは右手の親指で右の鼻孔を塞ぎ、フンッ、と鼻息だけでティッシュを飛ばした。
跳んで床を転がるティッシュに、玉座の横に伏せていたケルベロスが反応し、すぐさま駆け寄った。けれど、辿り着いたときにはもう煙の如く消えていた。ケルベロスは不思議そうにし、ティッシュがあった床の周りをグルグル回っている。
（可愛いなぁ）
そんなケルベロスの愛くるしい姿に、麗子は睨むのを忘れている。
「いつまでもそんな子供の姿でいないで、本来の威厳ある姿にお戻りください」
「うるせぇ、俺様に指図すんじゃねぇよ、一介の死神風情が」
見た目どおりの可愛らしい声だが、その言葉づかいはひどく汚い。
「また……どうしてそういう汚い言葉を使うんです？　あなたは神様なんですよ？　言葉づかいには気をつけて頂かなければ、せっかくのお名前に傷がつきます。そもそも一介の死神風情に注意されて、情けないとは思わないんですか？」
「ああもう、本当にうるさい奴だな！　いいだろう、この姿でも！　楽なんだよ！」
ハデスは自分の胸に小さな手を何度も押し当てた。
「楽だからって、それでは威厳が……」

「知るか！　威厳なんぞクソ喰らえだ！　神に威厳なんぞ必要ない！　神は神。それ以上でもそれ以下でもねぇ。存在そのものに意味があるんだよ！　俺様は神。それだけで十分じゃねぇか！」
ハデスは親指を立てて自分を指差した。
「またもう、そうやって屁理屈を……」
命は眉間にしわをこしらえた。
「しつっこいぞ！　この話はこれで終わりだ！　神である俺様が決めた！　文句は言わせねぇぞ！」
ハデスは苛立ち、玉座の肘掛けを拳で一撃した。ゴツン、と音がした。
「……わかりました。じゃあ、本題に入りますね。――こちらの方が、新たな死神としてお連れした、立花　麗子さんです」
命は呆れた顔をしてひとつため息をついた。一歩横に移動して後ろを振り返ると、一人離れたところに立ち――もとい、しゃがんで、ケルベロスとじゃれている麗子に向かって手を差し伸べた。
「立花　麗子さん！」
命はもう一度、少々強めに麗子の名を呼んだ。彼女はハッとして立ち上がった。すると、ケルベロスも彼の声に驚いた。びくりとし、叱られたとでも思ったのか、三つの頭を下げ、しゅんとしてしまう。――と、その瞬間、「ならんっ！」と、ハデスが間髪入れずに声を荒げたものだから、ケルベロスはまたもびっくりし、思わず飛び上がった。慌てて玉座の横に戻り、伏せてしまった。
「え？」
命が振り返ると、ハデスは麗子のことを指差してこう言い放った。
「おまえのような奴に死神が務まるか！　さっさとここから出て行け！　消えろ！」
ハデスはそう罵倒すると、しっしと手を振り、追い払う仕草をした。
「な、なんだとぉ……」
麗子は見るからにムッとした。

「ちょ、ちょっと、ハデス様なにをおっしゃるんです、わざわざ来て頂いたのに……！」
「知るか！　とっととここから連れ出して、あのバカのいる天国にでも送ってしまえっ！　……いや、いっそ地獄に落としてやれ！――じ・ご・く・に・お・ち・ろ～！」
ハデスは立てた親指をゆっくりと真下に向けた。
「このガキィ……まだ殴られ足りないようね！」
これには麗子もカチンときた。右手を拳に変えてギュッと握りしめ、それを振り上げてハデスの元に歩み寄ろうとする。すると、命が慌てて立ちはだかった。
「落ち着いて！　挑発に乗ってはいけません！」
「どきなさい！　もう一発ぶん殴ってやらないと気が済まない！」
「おう、やれるもんならやってみろ！　かかってこい！　神の力を思い知らせてやる！」
ハデスはぴょんと飛び上がって椅子の上に立つと、ボクサーが見せるような構えをし、シュシュッ、とジャブを繰り出して見せた。その手はなんとも素早く、目で見えない。
「ハデス様！　いい加減にしてください！　あなた、それでも神様ですか！？」
命は自分を押しのけようとする麗子に必死にしがみついている。
「おう、俺様は神だ！　その神に手を上げるような不届き者はな、地獄の業火に焼かれて浄化されちまえばいいんだよ！　人間に殴られたのは生まれて初めてだ！　それも、女にだぞ！　ハッ、世も末だな！」
「その原因を作ったのはアンタだろうが！」
麗子は声を荒げ、ハデスを指差した。
「アンタとはなんだ、アンタとは！　人間のくせに神を指差すな！」
ハデスも負けずにやり返す。
「人間だからなんだって言うのよ！　その人間に殴られて目を回していたのは誰よ！？　神様のくせにあんなくだらないことして、な

にが楽しいの？　バカじゃないの？　そんなバカは殴られて当然よ！　このバーカッ！」
「なんだと！　バカはおまえだ！　バーカバーカ！　ブース！　バーカ！」
罵り合う二人。なんとも醜い争いである。すると、それまで麗子を押さえることに徹していた命が口を開いた。
「いい加減にしなさいっ！」
けたたましいまでの大声が、二人の罵声を一瞬にしてかき消した。両者ともに驚いて、思わず口を噤んだ。
二人の言い争いに戸惑っていたケルベロスもまた、その大声に驚いて、飛び上がった。そして、まるで腰でも抜けたようにその場にぺたりと座り込んでしまった。
一転、その場には静寂が訪れた。
そんな中、命はおもむろに顔を振り返らせた。ハデスを見つめ、何故か微笑を浮かべた。
「ペルセフォネ様に言いつけますよ……？」
凪ぎの日の海のように静かで優しげな命の言葉。そのくせ妙に迫力があり、そして重く感じるそれを聞いたとたん、ハデスは再び、びくりと肩を揺らした。すると何故か、すぐさま姿勢を正し、ストンと落ちるように座って大人しくなってしまった。
「……」
沈黙している麗子は、命の言葉にあった誰かの名前に心当たりがあり、考える。
（ペルセフォネって確か、ハデスの妻の名前じゃなかったっけ……？）
ハデスは見るからに動揺している。ビクビクしており、恐れや怯えが見て取れる。ついさっきまでの姿とは大違いだ。まさに幼子。悪さをし、それが母親に知られて、今まさに怒られようとしているときの幼子のようである。
（確か、ハデスがぞっこんなのよねぇ……恐妻家って話は聞いたこ

とがないけど。まぁ、神と言えど、所詮は男ってことね。ゼウスも妻のヘラには頭が上がらないし、家系なのかねぇ……？）

麗子はそんなことを思い浮かべながら、ふっと鼻で笑った。少し怒りが晴れたようだ。

「ハデス様、立花　麗子さんを死神としてお認めくださいますよね？」

命が丁重な口調でたずねると、ハデスは渋々ではあったが小さく頷いた。

「では、儀式をお願い致します。ただし、ちゃんと本来あるべき姿に戻ってからですよ」

命は目を細めた。

「むぐぅ……チィッ！　わかったよ、戻りゃあいいんだろう、戻りゃあ……」

ハデスは悔しそうにし、舌打ちをした。ひどく面倒臭そうな顔をしたかと思えば、突然、その姿が急速に成長して大人になった。

年の頃は四十代。金髪はさらに伸び、パーマをかけたようなウェーブがついた。ヒゲも生え伸び、豊かなものになった。元々端正な顔立ちだったが、それに磨きがかかり、年を経て彫りも深まって、男前の上になんともダンディーなものとなった。その見た目はいわゆる、ちょいワルオヤジである。ニヒルな感じも見受けられ、かつクールで、間違いなく美形の部類に入るだろう。

「へぇー、確かに男前だわ。……でも、話に聞いていたとおりの目つきの悪さね。まんまヤクザじゃん」

しかし、炎のようにギラギラ輝いている赤い眼がなんとも威圧的で、もはやちょいワルではない。泣く子も黙らせるとはまさにこのことだ。例えるならば、幾度も死線をくぐり抜けてきているような兵士か殺し屋の眼である。数人ばかり殺していそうな眼差しでとにかく恐い。

「ああん？」

麗子の言葉に反応し、ハデスは睨みを利かせた。

「おお、こわっ！」
麗子は怯むそぶりをして挑発する。
「ちょっと……！　ハデス様も！」
命がすかさず注意した。彼に睨まれ、二人はすぐに態度をあらためた。
「ハデス様、もう早く儀式しちゃってください」
命は投げやりに言った。
「へいへい……。――汝の魂よ、我が手中に」
ハデスはふて腐れた顔で返事をした。そうかと思えばさっと片手を伸ばし、今までとは異なる厳格な口調でそう言った。
すると、麗子の胸元が急に光りだして、中から青い火の玉が飛びだした。魂だ。それは麗子の元を離れ、まっすぐ空中を飛んでハデスの手中におさまった。上向きに反した手のひらの上で静かに浮かんでいる。
「お、なんかそれらしくなってきたわね」
「しぃ……！」
麗子は感心してそうつぶやいた。すると、命がすぐに振り返り、口元に人差し指を当てて静かにするよう注意した。彼女は口元にそっと手を当てた。
「チィッ！」
ハデスは麗子を睨んで舌打ちした。が、すぐに視線を魂に戻し、一度だけ咳払いをした。
「我、冥府の王、ハデスの名においてここに命ずる。汝、人であることを捨て、死と魂を管理する我が使役となり、手足となれ。目となり、耳となれ。そして、声となれ。ここに汝の魂を解き放ち、新たな戒めと力を授ける」
ハデスの口からでる言葉が形となり、魂に巻きついた。それは鎖に変わり、魂を縛る。
「我が血を授ける。これを契約の証とする」
手のひらの中心から血が染みだして、青い魂を赤く染めあげた。

「汝、立花　麗子はこれより人に非ず。死と魂の管理者であり、我が使役なり」
　ハデスは軽く息を吸い込み、魂に向かって吹きかけた。すると、その吐息が魂を麗子の元へと運んだ。胸元にある光に吸い込まれて、すっと体内に消えた。その瞬間、彼女は、胸の奥で、ドクンという鼓動のようなものを感じた。すると、胸元から全身にかけて赤い光がほとばしった。それはまるで血潮の流れのようだった。あるはずのない血管を通じて全身を駆けめぐった。
　その後、光は麗子の両眼に集まり、焦げ茶色の瞳を、ハデスや命のような真紅に染めた。
「ほらよ、これでおまえも死神だ。まだ見習いだけどな」
　そう言うと、ハデスは姿勢を崩し、とたんにダラけた。また肘掛けにもたれている。
「お疲れ様でございます」
　命は姿勢を正し、丁寧な言葉づかいと共に深々とお辞儀した。そのとき麗子は、自分の身体に起きた現象に戸惑っていて、お辞儀をしていなかった。それに気づいた彼は、手で合図をし、頭を下げるよう促した。彼女はようやく気づき、渋々ながらもお辞儀をした。
「おら、もう用はないだろう、さっさと出て行け。目障りだ」
　ハデスはまた、しっしと手を振り、追い払う仕草をした。麗子はムッとする。
「はい、畏まりました」
　命は返事をすると、すぐに頭を上げてきびすを返した。麗子の手を取り、扉のあるほうへと歩き出す。
「あ、ちょっと待て」
「はい？」
　ハデスに呼び止められて、命はすぐに振り返った。麗子は横目にうかがうばかり。
「そいつの教育はおまえがやれ。ベテランのおまえがしっかり教えてやるんだぞ。特に、神である俺様に対する接し方や、敬うってこ

とをな」
ハデスは麗子に向かって顎をしゃくった。
「畏まりました」
命はまたお辞儀をした。そして、すぐに正面に向き直し、麗子の手を引きながら足早にその場を後にした。
去り際、麗子はハデスのことを睨んでいた。彼もまた睨んでいた。
遠ざかる二人をケルベロスが追いかける。
二人が近づいたことで扉が反応し、いつぞやのようにひとりでに開かれた。足早にくぐり抜けて離れると、またひとりでに閉じる。
ケルベロスは閉じ始めた扉の前で止まり、二人を見送ると、軽快な走りで戻ってきた。
そのときにはもう、ハデスは幼子の姿に戻っていた。扉が閉まり、麗子の姿が見えなくなったとたん、下顎を押さえて涙目になった。
「いってぇ〜……！　あの女、思いっきり殴りやがって！　油断してたとはいえ、なんて重いパンチしてやがる！　本当に死人か！？」
ハデスはひどく痛がり、玉座の上でもんどりうっている。戻ってきたケルベロスは彼を心配し、玉座の前で右往左往している。
そのとき、閉じたはずの扉が再び開いて、誰かがひょっこり顔を覗かせた。
「！」
ハデスはすぐに気づいて目を凝らす。それは麗子だった。彼女はニヤリと、いやらしい笑みを浮かべ、そして言った。
「ハデス様〜、アンタのクジ運の悪さって、まさに神級よねぇ〜！」
麗子はすぐに顔を引っ込めた。
そのとき、ハデスのこめかみのあたりで、なにかが千切れたような音がした。
とたん、ハデスの目の色が変わり、形相が一変した。幼子の姿が、瞬く間にいつぞやの怪物へと豹変した。
「ウオオォ〜〜ノオオォ〜〜レエエェ〜〜ッ！　ユ〜テハナランコトヲオオォ〜〜ッ！」

怪物の巨体が玉座を押し潰した。ケルベロスは、蹄のあるその大きな足に踏みつけられまいと、慌てて避難する。
怪物は雄叫びを上げ、右手に持った鎌を振り回しながら扉を目指した。鎌が、青い炎を切り裂き、かき消してしまうので、徐々に光が減ってゆく。
扉を目前にし、怪物は後ろ足だけで立ちあがった。両の前足を揃えて一撃し、蹴破った。
扉の向こうには通路があり、その一番奥に見えるエレベーターの扉が開いていた。
ちょうど、麗子が全速力で駆け込もうとしていた。彼女が乗り込んだと同時に扉は閉まった。彼女はすぐさまきびすを返し、閉まりつつある扉の隙間から顔を覗かせて、怪物に向かって舌をだした。
アッカンベー。
すると、扉が閉まった。

ヌグォォオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――ッッッッッ！

怪物のものと思われる凄まじい雄叫びが扉越しに聞こえてきた。
地底から聞こえてくるようなそれは、憤怒や悲哀など、胸が張り裂けそうな思いがひしひしと伝わってくる。まるで大地そのものが鳴いているようだ。……もとい、泣いている。
「まったくもう、禁句だって言っておいたのに……」
雄叫びは絶えず聞こえてくる。命は哀れみを込めて大きなため息をついた。そんな彼は今、浮かぶ鎌の上に座っている。
「どうしてあんなひどい真似をするんですか？　確かに、ハデス様が悪いです。至らないところは多々ありましたが、わざわざ古傷を抉るような真似をしなくてもいいでしょうに」
命は目下にいる麗子に対して、こんこんと説教をしている。しかし、今の彼女は、エレベーターの急上昇により床に押し潰されて、

とてもじゃないが耳を貸す余裕はなかった。
「わ、忘れてた……」
麗子の頭が床にめり込みそうになっている。

（11）

エレベーターが停止して、扉が開いた。
まず命が出てきた。
「まだ聞こえてきますよ、可哀相に……当分は荒れるでしょうね」
命は、どこからともなく聞こえてくる叫び声に耳を傾けた。
「な、なによぉ、同情するつもり？」
続いて、麗子がおぼつかない足取りで出てきた。
「ええ、同情しますよ。でも、ハデス様に対してではありません。ボクたちのあとに来られる方々に対してです。ところで、二度目とはいえ、もうご自身の足で降りられるなんて、なかなかにタフですね」
命は、ガニ股になり、ふんばりながら歩いている麗子の姿を見つめ、感心した。
「さすが、神様を殴り飛ばせるだけのことはあります」
「それ、褒めてないよね……」
先を行く命。壁に手をついて寄りかかりながら、麗子もついてゆく。
通路の幅や天井までの高さは今までと変わらないが、さほど奥行きはなく、歩けばすぐ突き当たりに行き着いた。そこには、会社などによくあるアルミ製の扉があった。普通だ。
《倉庫》と書かれたプレートが貼ってある。
「ここは……倉庫？」
扉を前にして麗子はたずねた。
「ええ、見たままに。今それ、聞く必要あります？」
「いんや、ない」
麗子は苦笑した。
「ここで死神らしい姿になって頂きます。あと、死神の鎌を支給します」

そう言うと、命は扉のノブに手をかけた。
扉を隔てた向こうには、とても広い部屋があった。命に続いて扉をくぐり抜けた麗子は、思わず目を見張った。扉の外からは想像もできないほどに広かった。
右手を見れば、様々な服を着たマネキンがズラリと並んでいる。
左手には、命が背負っているものとそっくりそのままのデザインの鎌が、これまたズラリと立てかけられて並んでいた。大小様々で、サイズが細かく異なる。
「ふへぇ～！」
広大な部屋をまさに見渡すと、麗子は感嘆の声を漏らした。
「まずは身形を整えましょう。この中から好きなコスチュームを選んで下さい」
命は、無数のマネキンに向かって手を差し伸べた。
「あ、やっぱり、これじゃダメなんだ？」
麗子は自分を指差した。正確には、自分が今着ている服を指差した。彼女の今の姿は、シャツにパーカーにジーパンにスニーカーと、なんともラフである。まさに普段着だ。
「はい。死神としてのイメージがありますからね。決まりはないんですが、例えば、今のご自身と同じ格好をした死神が現れたとして、その方を死神として信じられます？」
「ハハッ、無理無理」
「ですよね。――では、どうぞ。お着替えを」
「は～い」
麗子は返事をすると、最寄りのマネキンに歩み寄った。
そのマネキンは、命と同じぼろきれを思わせる黒いローブを着ていた。
「死神のイメージとしてはやっぱりこれよね」
「着替える場合はマネキンに触れて下さい」
「こう？」
麗子は言われるままに触ってみた。すると、どこからともなく黒

い煙が出現して、たちまち包み込まれた。「うわっ！」と驚いている間に煙は消えてしまった。するとどうだ、目の前のマネキンが着ているものと同じ黒いローブを、いつの間にか身にまとっていた。それもピッタリのサイズのものを。ちなみに、前の服は忽然と消えていた。

「おお、なるほど。こりゃあ便利だねぇ。試着の手間が省ける」

麗子は自分の格好を見定めようとした。すると、マネキンが自分と同じ動きをした。

見れば、マネキンの顔が自分の顔になっている。姿や体形も同じで、まるで鏡でも見ているようだった。まさに瓜二つである。

「ご自分の姿を立体的に確認することができます。同じ動きをしますが、向きは常に一定なので、横や後ろからも見られますよ。それ、皆さんに好評です」

「へぇ～、これはすごいわ！」

麗子は大いに感心し、ポーズを取ってみたり、横や後ろに回り、自分の姿を確認した。

「……けど、自分を見るってなんか変な感じねぇ。ちょっと照れ臭いし……後、この服、イマイチかな。なんかありきたりだし、本当にぼろきれを着てるみたいだし。なんとなく似合わない気がする」

麗子は、今の自分の姿を客観的に見定め、眉をしかめた。

「死神としてはポピュラーなコスチュームなんですが、今の方には人気薄ですね。確かに、ぼろきれを着ているみたいだとか、地味だとかいう意見が多いです」

「やっぱり？　らしいんだけど、これはちょっとねぇ……でも、キミはこれなのね」

「ええ、まぁ。ボクが死神になったときは、今のように多種多様なコスチュームはありませんでしたから。着替えることはできますが、他のものはあまり似合いませんし、それに、これじゃないと色々面倒なんですよ。外見が幼いというのもあるんでしょうが、死神だと言っても信じてもらえないんですよね。ですから、仕方なくこれな

んです」
命は自分の胸に手を当てた。
「あー、なるほどねぇ」
麗子は視線を戻し、他のコスチュームに目をやった。
「あ、スーツとかもあるのね。男物に女物。ちゃんと一通り揃ってじゃん。ねぇ、キミ、スーツとかはどうなの？　……あ、ダメか、まんま七五三だ。――お、燕尾服なんてのもあるのね。ハハッ、キミが着たら演奏会みたいね。――へぇ、学校の制服とかもあるのね。学ランにセーラー服にブレザー。また色んな種類があるわねぇ……あー、でも、制服着る年じゃないか。もう二、三歳、年が上だったら似合うだろうけど。――なにこれ？　幼稚園児の服？　なんでこんなものがあんのよ？　これは幼過ぎるわ。――うへぇ！　メイド服！　こんなのもあるんだ！　あ、でも、これなんかいいんじゃないの？　意外と似合うかもよ？　ある一部に絶大な人気が出そう！」
麗子は奥へ奥へと進み、様々な服を眺めて楽しんでいる。
「ボクに似合う服を探してどうするんですか、ご自身の服を探して下さい。そしてさっさと着替えちゃって下さい」
命は扉の近くに立ったままである。ちょっと不機嫌そうだ。
「やーねー、そんな怒んなくたっていいじゃない。ジョークよ、ジョーク。――しっかし、どれもこれも黒ばっかりねぇ。死神だから当たり前なのかもしれないけど、なんか、喪服専門店って感じ」
そう言いつつ、麗子はさらに奥へ進む。
「奥は変なのばっかりねぇ……ここは民族衣装のコーナーか。見覚えのあるのから、ないのまで。――ここからは……専門職？　ウェイターにウェイトレス。コック。白衣にナース服。キャビンアテンダントにパイロットスーツ。警察官、消防士、自衛官に各国の軍服。各種作業着に、作務衣、着物、法衣、袈裟。うわっ、ウェディングドレスまであんのねぇ。黒一色のウェディングドレスってなんか不気味ねぇ……まんまホラーじゃん。こんなのを着た死神が来たら怖いって。――その先は……うわ、これまたおかしなのばっか。チャ

イナドレス、スクール水着、巫女服、ボンテージ……って！　途中からコスプレじゃない！　――わっ、なんじゃこりゃ！？　包帯……！？　これ、どうやって着るのよ？　こっちはひもじゃん。ほぼ裸じゃないの！　ってか、裸！　誰よ、こんなもの用意したバカは！？」

麗子は独り、キャッキャとはしゃいでいる。

「決まっているでしょう、どなたかなんて……」

命はその様子を横目にうかがいながら、ぽつりとつぶやいた。

「それ以上先に進んでも、呆れるようなものしかありませんから、いい加減戻ってきて、早く決めて下さいよ！」

麗子との距離がだいぶ遠のいたのを知ると、命は声を張り上げて注意した。

「はいはい！　この先にどんなのがあるのか、ちょっと見てみたい気はするけど……」

麗子は名残惜しそうにしつつ、命の元へと引き返した。

「どれにするかはもう決めてるんだよねぇ。――これ」

道中、あるマネキンの前で足を止めた。女物のスーツ一式を身にまとい、まるでＯＬを思わせる格好をしたマネキンである。背広にシャツにパンツにパンプスと一式揃っており、いずれも黒で統一されている。

麗子はマネキンに触り、女物のスーツ一式に着替えた。

「うん、やっぱりこれがしっくりくるな。嬉しいような悲しいようなって感じだけど」

麗子はポーズを取り、自分と瓜二つになったマネキンを動かし、確認した。

「お似合いですよ、とても」

「あんがと」

命に微笑まれ、麗子はにかっと笑い返した。

「では、立花　麗子さん、こちらへどうぞ。鎌を選びましょう」

命はようやく扉の前を離れた。鎌のほうへと歩きだす。

「あいよ。――あ、ところでさぁ、その呼び方なんだけど、いい加減なんとかならない？」
「呼び方ですか？」
命は足を止めて振り返った。
「立花　麗子さんって、一々フルネームで呼ばなくてもいいでしょう。聞いてるこっちがめんどくさいわよ。麗子でいいよ」
命に歩み寄りながら、麗子は自分の顔を指差した。
「わかりました。では、今後は麗子さんとお呼びしますね。その代わり、ボクのことも、キミではなく、命と名前で呼んでください」
命も自分の顔を指差した。
「オッケー。じゃあ、命クンでいい？　それとも、ミコっちゃんとか？」
「お好きにどうぞ」
「そんじゃあ、まずは命クンね。慣れてきたらミコっちゃんって呼んだりするわ」
「わかりました。では、麗子さん、こちらへ」
「あいあ～い」
麗子は命に先導されて、ズラリと並んだ鎌の前に移動した。立てかけられ、ずっと向こうまで続いている無数の鎌。手前から奥にかけてサイズが大きくなっている。
「ある意味壮観ねぇ……物騒極まりない光景だけど」
麗子は遠くを見つめる仕草をした。
「この中に、麗子さんに合ったものが必ず存在します。これからそれを呼びましょう」
「呼ぶ？」
「手を伸ばし、鎌をイメージして、来いと呼びかけてください」
「こう？　――来い」
麗子は言われるままに手を伸ばし、鎌を思い浮かべて呼びかけた。すると、遠くでなにかが動いた。そうかと思えば、一振りの鎌が猛スピードで飛んできた。

「わひゃあっ！」
麗子は恐怖のあまり叫び、慌てて横に逃げた。刹那、紙一重のところを鎌がとおり過ぎ、鋭い先端が、後ろの壁にざっくりと突き刺さった。その光景に、麗子は言葉を失った。
「殺す気かっ！？」
が、すぐに声を荒げ、命に詰め寄った。
「殺すもなにも、もう死んでますって……避けなければ、刺さることなくその手におさまっていましたよ。――さあ、もう一度」
命は動じず、呆れた顔をし、壁に突き刺さっている鎌に手を差し伸べた。
「うぐぐ、簡単に言いおってからに……死んでも怖いもんは怖いわ！　――こ、来い」
不満を漏らしつつ、麗子はまた手を伸ばした。今度は命を盾にしながら呼んだ。すると、鎌がまた動き、ひとりでに壁から抜けて飛びだして、彼女の手におさまった。
「おお……！」
麗子は鎌を手にし、感嘆と安堵の声を漏らした。
「それが、麗子さんに見合った鎌です。多分、使いやすいサイズだと思いますよ」
盾にされていた命は、麗子から二歩遠ざかった。
「よくわかんないけど、使いやすいのかな……？　……あ！　あ～、ナハハッ、サイズのサイズを測ったわけね」
麗子は、手にしている鎌を指差し、不敵な笑みを浮かべた。
「そのダジャレ、たいていの方がおっしゃいますね。主にオジサンと呼ばれる年代の方が」
命は白けている。
「……でしょうね」
麗子はムッとし、唇を尖らせた。すねている。
ちなみに鎌は英語でｓｃｙｔｈｅ（サイズ）と言う。正確には鎌ではなく、

草刈り鎌や大鎌のことである。だから、つまり、サイズ（鎌）の、サイズ（大きさ）をということなのだが……。

「死神といえば鎌だけど、やっぱりずっとこれを持っていなきゃいけないわけ？　言っちゃあ悪いけど、正直邪魔じゃない？　それに物騒だし……」

麗子は手にしている鎌を見つめた。その先端は鋭く尖っており、不気味に輝いている。

「使わない間はこうして背中に張りつけておくか、装飾品に変えることが可能ですよ」

命は背負っている鎌を指差した。

「装飾品？」

「はい。指輪、ブローチ、ペンダント、イヤリングなどなどです。方法は命じるだけです。たとえば、指輪になれ――」

命が鎌を手にして命じた。すると、鎌が見る見る小さくなり、指輪になった。

「――と、このように」

命は指輪をした手を見せた。

「おお！　……ダッサッ！」

見事指輪に変わったので、感心して声をあげた麗子だが、その指輪のデザインを目の当たりにし、げんなりした。

命の中指にあるのは、黒いドクロの指輪だった。目にはルビーのような赤い宝石があり、怪しく輝いている。

「デザイン、他にはないの？」

「ありません。統一されています、これに」

命はドクロの指輪を見せつけた。

「他のデザインに変えるのは可能です。ただし、ハデス様にお願いして、許しを頂かなければいけませんが。――戻れ」

命が命じると、指輪が鎌に戻った。彼は素早く背負い直した。

「またあいつか……チィッ、仕方ない！　――指輪になれ」

麗子は舌打ちをすると、鎌に命じた。命のときと同じ指輪に変化した。
「ダッサァ……」
麗子は自分の中指にある指輪を見つめ、またげんなりする。
「諦めてください、こればかりはどうしようもありません。――この死神の鎌は、正式な名称とかはないんですが、命あるもの。たとえば、人間の肉体と精神を繋ぐ役目である魂を刈り取ることができます」
命は背負っている鎌を指差して説明を始めた。
「それ、前にも言ってたけど、肉体と精神と魂ってところ、もうちょっと詳しく教えて」
「もちろんです。今後実地研修を行う際に説明するつもりでしたが、ご要望であれば今、お教えしましょう。
人間なりし、生命は、肉体・精神・魂の三つで構成されています。わかりやすいところで人間で説明しますが、肉体とはすなわち、肉体。身体のことです。精神は心と言い換えるとわかりやすいと思います。さらに言えば、今のボクや麗子さんの状態ですね。そして魂とは、ここまでに見てきた青だったり、赤だったりした火の玉のようなものです。魂は肉体と精神を繋ぐ鍵のようなもので、これが乖離し、肉体と精神が離れてしまうと肉体の崩壊が始まります。つまり、死ですね」
「ふむふむ。ん～……つまり、倒れていたもう一人の私が肉体で、今の私が精神で、あの火の玉みたいな魂が乖離したから、肉体から精神が離れちゃって、今の私がここにいるわけだ。……うーん、わかった気がするけど、よくわからない気もする……」
麗子は小首をかしげた。
「言葉で説明されても理解するのは難しいと思います。今後、死神としての仕事を経験するとわかると思いますし、とりあえず、そういうものだと思っていてください」
「うん、わかった」

「他にご質問はありますか？」
「えーっと……あ、ここに来るときにこの鎌を使ったじゃない？　なんかこう空間を切り裂いたって感じ？　あれはどういうことなの？」
「あれはですね、この鎌の能力のひとつで、魂を刈る以外に冥府への入り口を開ける力があるんですよ。簡単に言うと、次元の壁を切り裂いてあの世とこの世を繋いでしまうってことです」
「なるほど。わかりやすい」
「この鎌は意外に便利なんですよ、他にも空を飛んだりできますし。……ただ、気をつけなければいけないのは、魂を刈る力があるので、むやみやたらに振るうと、ぜんぜん関係ない方の魂まで刈ってしまうことがあります。なので、注意してくださいね」
「え、それって関係ない人を殺しちゃうってこと？　超危ないじゃん！」
「そうなんです。危ないんです。ただ、誤って魂を刈ってしまっても、すぐに戻せば問題ありません」
「あ、戻せるんだ、よかった……」
「ちなみに、魂を刈ってしまっても、突然死んでしまったりはしませんので、落ち着いて対処してくださいね。あと、冥府の入り口を開ける場合なんですが、こちらも場所に注意しなければ、誤って生きている方がくぐり抜けてしまう場合があります。これがいわゆる、神隠しです。神隠しのたいていはこれが原因です」
「なんとはた迷惑な……」
「この冥府は生物が生きられる環境にないので、急がなければ命を落としてしまいます。もし、誤ってくぐり抜けた方がいる場合はただちに戻してあげてください」
　命はにっこりと笑った。
「ほんと、可愛い顔して恐ろしいことをさらっと言うわぁ……気をつけるわ」
　麗子はドクロの指輪を見つめ、誓うように頷いた。

「他に質問はありませんか？　……なければ地上へ戻りましょう」
麗子からの質問が途絶えたので、命は扉に向かって歩きだした。
「あれ、そういえば手帳は？　まだもらってないけど？」
命を追いかけていた麗子は、ふと気づいてたずねた。
「これのことですか？　――これは、正式な死神として認められた際にハデス様から与えられます。麗子さんはまだ見習いですので」
命は懐から黒い手帳を取りだし、そして答えた。
「なるほど」
「では、エレベーターへ」
命は手帳を懐に戻すと、扉に向かって手を差し伸べ、同時に歩きだした。麗子もあとに続いた。
二人は倉庫を後にした。
エレベーターを目指して通路を進んでいたとき、麗子はふとあることを思いついた。
「あ、ねぇねぇ、死神の手帳ってさぁ、あれよね、デスノー……あ、違うか、手帳だからハンドブックよね。チェッ」
麗子は自分で気づいて悔しがり、ふて腐れた。
「フフッ、残念でした」
命は苦笑しつつ、エレベーターのボタンを押した。すぐに扉が開いた。
命、麗子の順にエレベーターに乗り込んだ。
「地上だから、上よね？　よっし！　来い！」
麗子はきびすを返すと、すぐさま床に横になり、うつ伏せになった。
「麗子さんのそういうところ、ボク好きですよ」
命はそんな麗子の姿を見下ろし、微笑んだ。
「ハハッ、あんがと！」
麗子も笑顔を浮かべた。
「では、がんばって」
命は鎌を手にし、その上に座って浮かぶと、手を伸ばして《地上

≫と書かれた一番上のボタンを押した。
扉が閉まった次の瞬間、エレベーターが急上昇。麗子の身体は床に押しつけられた。
「なんのぉ……！」
が、見事に耐えている。腕立て伏せをするような形で身体を支えている。
「おお、三度目にして耐えるなんて、すごい精神力ですね」
命は感心し、拍手した。が、音はしない。
急上昇を続けていたエレベーターだが、突然ぴたりと止まった。麗子の身体がその反動で浮き上がった瞬間、扉が開いて吸い込まれるように外へと飛びだした。
「うわっ！？」
ハッとしたとき、目の前には真っ青な空があった。そのままぐるりと視界が回り、次に目に飛び込んできたのは、遥か彼方に見える色とりどりの大地だった。
それは冥府ではなく、勝手知ったる地上の光景だった。
「うひゃあああああ――っ！？」
麗子は遥か彼方の大地を目指し、真っ逆さまに落下する。恐怖のあまり、悲鳴をあげた。それはまるで――いや、まさにスカイダイビングだ。それも、パラシュートのない、死のダイビングである。
「しっ、死ぬぅ～っ！」
「――大丈夫、もう死んでますから！」
「！？」
すぐそばで声がした。見れば、命が鎌に乗った状態でいる。麗子は必死に手を伸ばし、掴まろうとするも、彼は手を差し伸べず、右手の中指を指差すばかりだった。
「麗子さん、鎌です！　鎌をだして！」
その言葉にハッとし、麗子は自分の右手を見た。中指にあるドクロの指輪を。
「も、戻れっ！」

麗子が命じると、指輪が鎌になった。すると、命は言った。
「それでは早速、飛ぶ訓練をしましょう。浮けと命じてください！」
麗子はしきりに頷き、鎌を両手で握り締め、そして叫んだ。
「浮けっ！」
刹那、大地を目指して落下していた麗子の身体が、まるで弾かれたように飛びあがった。急上昇し、あっという間に見えなくなってしまった。
大空の彼方から悲鳴が聞こえる……遠ざかる……。
「あらら、飛びあがっちゃった」
命はその場に留まり、麗子の姿を目で追った。とはいえ、もはや見えない。
「精神力が強すぎるのも考えものってことだなぁ……どこまで飛んで行っちゃったかな？」
命はゆっくり浮上し、大空の彼方に飛んでいった麗子のあとを追いかけた。

（12）

とあるマンションの屋上に二人の死神が舞い降りた。……もとい、一人は不時着した。

「しっ、死ぬかと思った……」

不時着したほうの死神の麗子は、その場に這いつくばってひどくぐったりしている。

「よかったですねぇ、生前にはまず体験できませんよ」

舞い降りたほうの死神の命は麗子の傍らに立ち、ニコニコしながら見下ろしている。

「ええ、まったくね……」

笑い返す麗子だが、その口元は引き攣っている。あと、目が怖い。

「ところで、どうでしたか？　宇宙は？」

命は空を指差した。

「フッ、地球は確かに青かったわよ……神様はいなかったけどね！」

麗子は卑屈に笑った。

「なるほど」

命は嬉しそうに苦笑した。

「身体ひとつで宇宙に出てようやく実感したわ、自分がもう死んでいるんだって……」

麗子は身体を起こしてその場に座った。

「今ですか？」

命はまた苦笑する。

「フフッ。でも、なんだかんだいってきれいだったなぁ」

麗子は少し前のことを思いだして感嘆のため息をこぼした。そしておもむろに空を見上げ、遠くを見つめた。彼女の視線の先にはどこまでも続くような青空がある。陽が暮れ始めているのか、雲など、一部が茜色に染まりつつあった。

「不謹慎な発言に聞こえるかもしれませんが、見られてよかったで

すね」
「ハハッ、まったくもって不謹慎だわ。こっちは死んだっていうのに」
麗子は声にだして笑った。
「よっこいしょっと。身体が無いから身体が軽いわ。って、なんじゃそりゃ」
麗子は軽やかに立ちあがった。その際、つい癖で、お尻についた汚れを叩いて落とす仕草をしてしまった。
「さーてと、仕事をしようかね」
麗子は姿勢を正して腰に手を当てた。命を見る。
「麗子さん、なんだか生き生きしてますね」
「死人なのにね。それで？　まずはなにをするの？」
「そうですねぇ、まずは街へ行きましょうか。駅前とか、人通りの多いところに」
命は少し考えてそう言うと、鎌を手にし、屋上の端へと移動した。
「ではでは」
命は、心許無い高さの柵をぴょんと飛び越えると、そのまま、臆することなくその身を投じた。すぐに鎌を掲げて浮かび、緩やかな滑空を始めた。
その様子をうかがっていた麗子も、あとに続けとばかりに指輪を鎌に戻して、柵を乗り越えた。
「うわぁ、これぐらいの高さの方がリアルに怖いなぁ……これが鎌じゃなくて傘だったら、まんまメリー・ポピンズ――ねっ！」
麗子はそんなことを言いながら柵を蹴り、勢いよく飛び出した。すぐさま鎌を掲げた。
「ほんのちょっとだけ浮いて！」
麗子はすかさず声をあげた。すると、鎌がわずかに浮上し、小さな放物線を描きながら落ちていこうとしていた彼女の身体を支えた。しかし、命のような滑空はせず、緩やかに上昇を始めてしまう。
「あー、浮き上がってるなぁ……うーん、難しい。――浮くのスト

ップ！」
麗子の声に合わせて上昇がぴたりと止まり、一転、今度は落下を始める。
「はい、浮いて！　ほんのちょっとだけよ！」
麗子の声に合わせて鎌がまたわずかに浮上する。彼女はそうして上昇と落下を繰り返しながら命を追いかける。
「器用なんだか、不器用なんだか」
とにもかくにも、ちゃんとついてきてはいる麗子の姿に、命は苦笑いを浮かべる。

昼夜を問わずと言っては過言だが、朝は早くから、夜は遅くまで、日々大勢の人が行き交う駅前に、二つの黒い影があった。
黒づくめの服を着た少年と女性で、少年は大きな鎌を背負っていて見るからに禍々しい姿をしているのに、誰一人気づかずに素通りする。
「本当に見えていないのね……。――おっとっ」
他人の視線がまったく感じられないことに、麗子はどうしても戸惑ってしまう。――と、そのとき、自分に向かってくる歩行者がいるのを察知してぶつからぬように避けた。
「本来であれば注目の的でしょうね」
頭上から声がした。声の主は命だった。彼は今、誰にも使われず、ただそこに存在し、さも景色の一部と化している公衆電話ボックスの上に座っている。人を避けた麗子は公衆電話ボックスの扉の前に立ち、彼のことを見上げた。
「うん、私だったらまず見るわね。私はともかく、キミの姿はまさにだもん。でもさぁ、たまにこっちを見たんじゃないかって気がする人がいるんだけど、私たちの姿に気づいている人もいるのかな？
マスターみたいに」
麗子は扉に寄りかかった。
「稀ですけど、見える方はいらっしゃいますよ。あと、見えてはい

ないんですけど、なにかを感じる方がいますね。妙な気配を感じたとか、目の端になにか見えた気がしたとか」
命は軽く身を乗り出した。
「あー、あるねぇ、そういうのって」
「いわゆる、第六感ですね」
「あ、実際にあるんだ、第六感って」
「ボクはあると思いますよ。だって、ボクたちが存在するんですから、あってもおかしくないでしょ？」
「ハハ、そうだね――」
そのとき、スーツ姿の男が小走りで駆け寄ってきた。
「あ！」
気づいたときにはもう遅く、麗子はぶつかってしまった。
「うわあっ！」
麗子はいつぞやのように弾き飛ばされた。ぶつかった男はまったく気づかず、公衆電話ボックスに入り、急ぎどこかに電話をかけ始めた。
「大丈夫ですかー？」
客待ちをしているタクシーの上を飛び越えて道路の真ん中にまで飛ばされた麗子の姿を命は目で追った。そして、声をかける。彼女は慌てて起き上がり、迫る車から逃げながらなんとか戻ってきた。
「あー、びっくりした！　油断してた。公衆電話を使う人、まだいたのね」
麗子はあたりを警戒してキョロキョロしている。人里に迷い込んだ野生動物のようだ。
「携帯電話のバッテリーが切れてしまったとか、そういう理由じゃないですかね」
命はさらに身を乗り出して、公衆電話ボックスの中を覗き込んだ。
「なるほど、そうかもね。私も、もし急いでいたらそうするかも」
そうこうしていると、男が公衆電話ボックスから出て人波に消えた。

麗子はどこか懐かしそうな目をし、男を見送った。
「ねぇねぇ、人にぶつからないようにするとかできないの？　人をすり抜けるとか」
麗子はまた命を見上げた。
「可能ですよ。ただ、壁とか扉とか、物体をすり抜けるよりもずっと難しくて、習得するにはかなりの時間を要しますね。一朝一夕には無理です」
「そうなんだ……」
麗子は少し残念がる。
「それよりも、うまく人を避けられるようになるよう練習すべきだと思いますよ。助言をするとしたら、人が通らないところを通るようにしましょう、かな」
「そうだね、うん。わかった。でも、あれだね、こうなってわかったけど、透明人間って不便なものだろうね」
「不便でしょうねぇ。ようは見えないだけですから。裸にならなければ透明にはなれませんし、無論、靴を履けないので常に足元に注意しなければいけません。相手に見えないわけですから、平然とぶつかってきますし、足も踏まれるでしょう。それがヒールだったらさぞ痛いでしょう。下手をすると穴が開くかもしれません」
「うっわ、いたぁ……」
麗子は想像し、顔をしかめた。
「その点、死神は楽ですよ。なーんにも感じませんからね」
「まぁねぇ、それがせめてもの救いよねぇ……ちょっと悲しくもあるけど」
「そうですねぇ。ただ、死ぬことが救いとは思えませんが」
命は苦笑いを浮かべた。麗子もつられて苦笑し、おっしゃるとおりだと言わんばかりに肩をすくめた。
「ともかく、麗子さんがまず練習すべきなのは人の避け方と、物体のすり抜けです。壁や扉をすり抜けられなければこの仕事は務まりません」

そう言ったとたん、命の身体が落下し、公衆電話ボックスの中に入ってしまった。彼はそのまま、ガラスをすり抜けて外に出てきた。
「おお〜！」
麗子は素直に感心し、拍手する。しつこいようだが音はしない。
「コツは、自分を理解することです。自分は精神だけの存在、つまりは幽霊で、壁や扉にぶつからない、すり抜けられると思い込む。では、試してみてください」
命は公衆電話ボックスに向けて手を差し伸べた。麗子は小さく頷くと、向き直して手を伸ばし、指先を揃えてガラスに近づける。
「自分は幽霊……すり抜けられる……ぶつからない……」
自分に言い聞かせるようにそうつぶやきながら、指先をガラスに密着させた。すると、音もなく当たり、せき止められた指がぐにっと折れ曲がった。
「……ダメじゃん」
麗子はしばし自分の手を見つめると、ミスした者を責めるような目で命を見やった。
「そんなすぐにはできませんよ。練習あるのみです」
命は催促するようにもう一度ガラスに手を差し伸べた。
「難しいなぁ……そもそも、どうして幽霊なのにすり抜けられないの？　身体がないんだから、普通はすり抜けられるでしょ？」
麗子は少しふて腐れ、目の前のガラスに手をついた。
「それは、麗子さんの中に、壁はすり抜けられないものという生前時の感覚と常識が染みついているからです。壁はすり抜けられないという思いがあるから、すり抜けられないんですよ。壁を壁だと思うからぶつかってしまう。ボクたちは肉体を持たない精神だけの存在ですから、本来、その存在は空虚なものです。だって、存在しないんですから。それを理解できるかどうかですよ」
命は手を伸ばし、もう一度ガラスに腕を通してみせた。
「そっか、生きている頃の感覚とか常識が思い込みとなって残っているわけだ。普通は、壁は壁でもなんでもないって、そういうこと

なわけ――だぁっ！？」
納得し、頷いていた麗子の身体がガラスをすり抜けてしまった。
驚き、思わずその身を強張らせた瞬間、すり抜けなくなり、おかしな形で固定されてしまった。
「お見事！　今の感覚ですよ」
命は音のしない拍手をした。
「まず無意識でしょうが、ボクの言葉に耳を傾けたことで目の前の壁から意識を遠ざけた。ボクの言葉を受け、ほんの少しとはいえ理解を深め、壁を壁と認識しなかったことでそのようにすり抜けられたわけです。その後、驚いた拍子にまた、壁を壁と認識してしまったから、途中ですり抜けなくなってしまったというわけですね」
「ちょっ、解説はいいから！　これ、どうすればいいのよ！？」
麗子は、公衆電話ボックス内に上半身を入れた状態で動けなくなっている。
「残念ながら、ボクにはどうすることもできません。引っ張ったところで、動くかどうか……それは麗子さんの意識の問題ですからね。ご自身の力で抜け出してください。ちょうどいい練習ですよ。がんばって！」
そう言うと、命はその場でぴょんと飛び上がり、また公衆電話ボックスの上に座った。
「こ、こらっ！　ちょっ、ええぇ～っ！？　ああ～、もうぉ～！」
助けを得られなかった麗子は、なんとかして抜け出そうともがき始める。……しかし、二進も三進もいかない。
四苦八苦。試行錯誤。
時間をかけて、なんとか抜けだせたと思えば、その体勢や、抜けだすことばかりに気を取られていて、扉を開けることができないことをすっかり忘れていた。その結果、誤って公衆電話ボックスの中へと入ってしまい、今度は外に出られなくなってしまうというハプニングに見舞われてしまう。
その後、ようやく解放された頃には、陽はもうすっかり暮れてい

た。
「ご苦労様でした」
公衆電話ボックスの外に出られ、勝ち誇ったように両の拳を突き上げている麗子に対し、命は労いの言葉をかけた。
「どう、習得したわよ！」
麗子は目を輝かせて、自慢げに言った。
「お見事です。思っていたよりも早かったので、ちょっと驚いています」
命は公衆電話ボックスの上から飛び降りた。
「麗子さんのことなので、もしかしたらとは思っていましたが、まさか、中に入って閉じ込められるなんて……あれもまた見事でした。プッ、まさにコントです。いやぁ、楽しませて頂きましたよ、フフッ」
命はそのときのことを思いだしてつい笑ってしまう。
麗子が公衆電話ボックスの中に閉じ込められて、そのことに気づいて悲鳴をあげたとき、命はその上でケラケラと笑い転げていた。
「ハ、ハハハ……そりゃあようござんしたねぇ」
麗子はやけくそ気味に笑った。が、その目はひとつも笑ってはいない。
「すり抜けを覚えられたので、次の段階へ移行しましょう。早速ですが本番です。死神としての本来の仕事に取りかかります。つまり、死出のお世話です」
命は懐を探り、死神の手帳を取りだした。両手に持ち、パッと開く。すると、ページがペラペラとひとりでにめくれて、あるところでぴたりと止まった。
名前や年齢、住所など、様々な情報が記されたそのページの間になにか挟まっている。見たところそれは、手帳の一ページを破り取ったもののようで、二つ折りにされて挟まっていた。
「あ……」
その紙切れに気づくと、命はハッとして小さな声を漏らした。

「なにそれ？」
麗子は横から覗き込み、その紙切れを指差した。すると、命がぱたんと手帳を閉じてしまった。彼は顔をあげ、何故か彼女の顔をじっと見つめた。
「なるほど、そうですか、今日でしたか……ふーむ、面白いですね。運命というのはこういうことを言うのかもしれません」
命は感慨深い顔をし、独り言のようにつぶやいた。言葉の意味がわからず、麗子は小首をかしげる。すると、彼はにっこりと笑った。
「すぐにわかりますよ。予定されている時間が押し迫っています。対象者の方の元へ参りましょう」
命は手帳を懐に戻して、代わりに鎌を手にした。柄にまたがり、浮かびあがる。
「後ろに乗ってください、運びますので」
「あ、うん」
命が急かすので、麗子は言われるままに柄に飛び乗った。彼女が座り、彼の身体に掴まると、鎌はまもなく浮上し、大空の彼方を目指して一直線に飛び立った。
「どこに向かうの？」
「病院です。これから、原田（はらだ）　義重（よししげ）さんという方の死出のお世話をします」
「原田　義重さん？」
「その病院は別の県にあり、そこまではかなりの距離があるので、速度を上げます。落ちないよう、しっかり掴まっていてくださいね」
「う、うん！」
麗子がさらにしがみつくと、それに合わせたように飛行速度がぐんと増した。
すっかり夜の色に染められた空を、二人の死神が風の如く飛翔する。
西の空の彼方の、地平線との境目に、朱色に染まった空がまだわずかだが取り残されている。二人はそれを目指すように飛んでいた。

まるで、黄昏を追いかけているようだ。

（13）

とある病院の屋上に、二人の死神が音もなく舞い降りた。
「ここに、原田　義重さんって人がいるの？」
麗子は見知らぬ街並みを眺めながら、隣にいる命にたずねた。二人が今いる屋上はヘリポートになっているようで、通常はあるはずのフェンスがなく、病院の周辺の景色が良く見渡せる。すでに夜。電気がついているので、街並みは星が散りばめたようにきれいだ。
「はい、ここの七〇二号室にいらっしゃいます」
命は返事をしつつ、景色ではなく、屋上の端にある扉を目視した。彼が歩を進めると、麗子も歩きだした。
「今日は三日月ね……なんだか、この鎌みたい」
扉を目指しているとき、麗子はふと空を見上げた。夜空には鋭利な月が輝いていた。
二人は順に扉をすり抜けた。麗子はまだ慣れておらず、少しだが手間取ってしまった。
扉の先は非常階段に続いていて、二人は七階を目指して下りた。階段を出るととても薄暗かった。すでに照明が落とされているようだ。
「七〇二号室ですよ」
命はもう一度言い、廊下を歩きだした。
「わかってるって。……夜の病院に死神って、なんだか似合いのシチュエーションよね」
命に先頭を任せ、麗子はあとに続いた。病室の番号と入院患者の名前を順に見てゆく。
通路の中ほどに明かりが見える。ナースステーションだ。麗子は、看護師たちの視線を気にしながら通り過ぎた。と、命が立ち止まっていて、ぶつかってしまった。
「あっ、ゴメン」

「麗子さん、七〇二号室です」
命はある扉の前に立っていた。指差し、麗子に教えた。
「あ、七〇二号室、原田　義重さん、ここね」
麗子はすぐに、扉の横にある部屋の番号と名前を確認した。
「入りましょう」
命は目の前にある閉め切られた扉に向けて直進し、そのまますり抜けた。麗子もあとに続いた。
スライド式のぶあつい扉の先には暗闇が広がっていた。カーテンが閉め切られているためだ。始めのうちはなにも見えなかったが、目が闇に慣れて徐々に見えてきて、はっきりとものが見えるようになった。
そこは個室だった。
名前がひとつしかなかったので、麗子はあらかじめそうだろうとは思っていた。
病室だから当然の如くベッドがある。介護用の大型のベッドで、そこには一人の老人が横たわっていた。
「原田　義重さんです」
命は老人に向けて手を差し伸べた。麗子も老人に注目する。だが、まず目に入ったのは、ベッドの周りに置かれた様々な医療機器だった。その中で見覚えがあるのは心電図を表すモニターぐらいのもので、あとはどのようなものかまるでわからなかった。
老人の身体の色々なところから管が伸びて、医療機器に繋がっている。麗子にもわかるモニターが、彼のものと思われる心臓の微弱な動きを波形で表している。それを目で追いつつ、今度は老人の特徴を確認した。とはいえ、見えるのは頭と二本の腕だけで、あとは布団に覆われていて見えない。彼女はとりあえず顔を見た。
しわの多い顔だ。ひどく痩せ、頬はこけている。
少ない髪は透き通るように白い。見事な白髪だ。
点滴のために出されているその腕はまるで枯れ枝のようで、まさに骨と皮だけである。そんなことを思ってしまった麗子は、よくな

いと自分をたしなめた。
　そのとき、ふと、ベッドの横の棚の上に置かれているものの存在に気づいた。
　折り紙だ。定番のツルの他に、恐竜など、色とりどりの折り紙が棚の上を占領している。なんだか華やかだ。その中には手紙が紛れ込んでいる。子供に人気のあるキャラクターが描かれた便箋に、ほとんどひらがなの文章が書かれていた。その文字もまた色とりどりで、鮮やかだった。
　その二つからは幼さを感じる。麗子は、老人には孫がいるんじゃないかと思った。
「お爺ちゃんなのね……」
　麗子は複数の意味を込めてそうつぶやいた。
「……ねぇ、あれはなに？　なにか黒いものが見えるんだけど、気のせい……？」
　麗子の赤く染まった瞳が淡く光り輝き、老人の身体に表れている異変を捉えていた。
　老人の身体にうっすらとだが黒い靄のようなものがまとわりついている。身体の下から染みだしているようだ。
「いいえ、気のせいではありません。ボクにも見えます」
　そう言うと、命は黒い靄を指差した。
「あれは“死”です。“死相”とも言いますね。死が間近に迫っている方に現れる、ようするにサインですよ。ここは暗いのでわかりにくいかもしれませんが、これが昼間、もしくは明かりの下であれば、もっとはっきりと見えます。多分、ゾッとしますよ」
「……もしかして、私のときにも？」
「もちろんです」
　命は頷いた。麗子の表情が強張ったのを横目にうかがいながら、手帳を取りだした。
「原田　義重さん。八十八歳。予定では、およそ一時間後にお亡くなりになります」

「八十八歳？　じゃあ、米寿だ……」
「麗子さん、今回はボクがお世話をしますので、手順などをよく見ておいてください」
「うん」
命は取りだしてまもない手帳を懐に戻し、代わりに鎌を取った。彼が老人に近づくのに合わせて、麗子は少し後ろに下がった。
「……これから、人を殺すのね……」
麗子はぽつりと呟いた。それに対し、命は彼女のことを横目にチラリとうかがっただけで返事をしなかった。彼は老人を前にして立ち止まった。
「今、原田　義重さんは、肉体と精神と魂の三つが融合した状態にあります。死が迫っているので、正確には、鍵であるはずの魂が外れかかっており、肉体と精神が乖離しつつあります。これからこの鎌で魂を刈り取り、鍵を外し、原田　義重さんの精神を出します」
命は軽く後ろを振り返って麗子を見た。彼女は相槌を打った。
「では！」
命は正面に向き直すと、鎌の長い柄を両手で握り直し、構えた。そして、横たわっている老人めがけて、薙ぎ払うように振るった。
赤い刃が老人の身体を一太刀にし、まとわりついていた黒い靄もとろも切り裂いた。
とたん、老人の姿が二重に見えだした。
「これが精神です。わかりますね？　次は呼びかけます」
命は鎌を背負い直すと、より老人に近づいた。
「もしもし、原田　義重さん、ボクの声が聞こえますか？　もしもし？」
命はベッドの端に手をついて、覗き込むようにして呼びかけた。麗子も一歩近づいた。彼が呼びかけを続けていると、一方の老人のまぶたがすっと開いた。細い隙間の向こうにある眼球が小刻みに震えている。しばらくするとぴたりと一点に止まり、ゆっくりと横に移動し、傍らにいる彼のことを見つめた。

「ボクのことが見えますか？　ボクがわかりますか？」
命は、自分を見つめている老人の目を覗き込み、そうたずねた。
老人は目を細め、彼のことを凝視する。近くにいる麗子の存在にも気づいて、また凝視する。そして、また彼に視線を戻した。
「……わかる。と、思う」
老人は消え入るような声で答えた。
「……死神か？」
老人は少し声を大きくした。枯れ枝のような腕をあげて、細い指を伸ばして命を指差す。
「はい、ボクたちは死神です。あなたは、原田　義重さんで間違いありませんね？」
命がたずねると、老人は小さく頷き、もぞもぞと横にしていた身体を起こそうとした。すると、何故か驚いた顔をした。
老人は自分の身体に戸惑っていた。長らく、自力ではベッドから離れられなかったのに、すんなりと起きられてしまったからだ。身体が羽のように軽く、節々の痛みを感じない。
老人は困惑しながらもベッドから足を投げだし、下りて、自らの足で立った。
その後ろのベッドにはもう一人の老人が横たわっている。
「わ、わしは死んだのか……？　……いえ、死んだのでしょうか？」
老人は命に対して敬語で喋りだした。
「いいえ、まだ死んではいません」
「では、これから死ぬのですね？」
「はい」
「そうですか……そうか、わしもようやく……」
老人はどこか物悲しく、それでいて安心したような表情を浮かべている。しかし、徐々にだが、その表情に不安の色が見え始めた。
「この度、原田　義重さんの死出のお世話を任されました、死神の命と申します。命と書いてミコトです。今後の手順を簡単ではありますが説明させて頂きます」

命は自己紹介をすると、いつぞや麗子にもした説明を始めた。老人は俯いて、終始そのままでいたが、たまに相槌を打っていた。
その様子を眺めていた麗子は、デジャブのようなものを感じていた。
命は説明を終えると、懐から手帳を取りだした。表表紙にある金色の天秤を見せる。
「この金色の天秤に触ると、原田　義重さんの魂が記憶する、一生における善悪の重さをはかり、天国と地獄、どちらに進むべきかを教えてくれます。……ご理解頂けましたか？　もしなにかわからないことがございましたら、遠慮なくおっしゃってください」
「……」
しかし、老人はかたく口を閉ざし、小さくかぶりを振るばかりだった。
「そうですか……では、原田　義重さん、この天秤に手を置いてください」
命は手帳を両手に持ち直し、一度は立ったが、今はまたベッドの端に腰掛けている老人の前に移動した。彼が手帳を差しだすと、老人は小さくハッとして顔を上げ、その手帳を、金色の天秤をじっと見つめた。膝の上に置いていた手を伸ばそうとするも、半ばで止めてしまう。それ以上は伸ばせず、元あったところに戻してしまった。そして、また俯いた。
「……どうしました？　もしかして、怖いのですか？」
命が優しくたずねたところ、老人はようやく口を開いた。そして第一声、「怖い……！」と言った。
「怖い……怖くて、どうしても触ることができない……うう、申し訳ない……」
老人は頭を抱えてしまった。震えており、本当に怯えているようだ。
「構いませんよ。無理もありません」
命は微笑みを浮かべ、そっと手帳を引いた。

「では、魂の善悪をはかるのはあとにして。原田　義重さん、おたずねしますが、なにか思い残していることはございませんか？　もし、それが叶えられることであれば、ご協力致しますよ」
「思い残していること……？　……会いたい。良江に……妻の良江に会いたい。会いたい！　会って、謝りたい！　頼む、どうか良江に会わせてほしい！　お願いだ！」
命の言葉を受けると、老人はまた沈黙し、しばらく考えに更けた。そして、思い残していることを見つけると、再び自らの足で立ち、彼に迫って懇願した。
「……申し訳ありませんが、その願いを叶えることはできません。生死の区別に関わらず、家族など、親しい方への面会は許されていないんです」
命は小さくかぶりを振って、その願いを断った。
「ど、どうして……？　どうしてダメなんだ！？　神様だったら、それぐらいのこと許してくれたっていいじゃないかっ！　……あ、すっ、すみません、つい……無理なものは、無理なんでしょうな……」
老人は興奮し、声を荒げた。が、すぐに理性を取り戻した。そっと頭を下げると、そのまま後ずさり、ベッドに腰を下ろした。
「ご理解くださりありがとうございます。残念ながら、お手伝いできることはある程度の範疇に決められているんです。できないことは、どうしてもできません。可能なことは、生存されているご家族やご友人の姿や、死ぬまでに一度は見てみたかった景色。思い出のある場所を見たり、親しい方が亡くなったときのための言葉や手紙を残すぐらいなんです。たとえば、このように――」
命は小脇に挟んでいた手帳を両手に持ち、あるページを開いた。そこには例の紙切れが挟まっている。彼はそれを取りだした。
「……？」
老人はその紙切れを見つめた。麗子も見つめていた。
「これがなにかわかりますか？　これは、原田　義重さん、あなた

の妻の原田　良江さんからお預かりしたお手紙です。彼女が残した最後のメッセージです」
命はまた手帳を小脇に挟み、紙切れを開いた。数枚の紙が折り重なっていた。
「良江からの！？」
老人は驚きの声をあげ、そのたるんだまぶたを抉じ開けた。
「五十八年前、ボクが、原田　良江さんの死出のお世話をしました。これは、そのときにお預かりしたものです。夫である、原田　義重さんがお亡くなりになるそのときにお見せするという誓いを立てて。――麗子さん、これを朗読してください」
命は手紙を、傍で見ている麗子に差しだした。
「えっ、あ、うん……！」
麗子は、急の呼びかけに戸惑いながらも命に歩み寄り、手紙を受け取った。丁重に持ち、書かれてある内容に目を通した。
紙質は手帳のものと同じで、そこに書かれている文字は達筆だった。昔の漢字とカタカナで書かれていて、とてもじゃないが読めない。これはダメだと、音をあげようとすると、彼女の赤い瞳が怪しく輝いて、幻を見せた。
文面に、麗子でも読める文字が浮かびあがった。
これならば読める。麗子は手紙を返そうとしていたが思い留まり、もう一度目を通した。そして、読みあげるべく、語るべく、口を開こうとした。――が、そのときだ、「待ってくれぇ！」と、老人が声をあげた。
「お願いだから、待って……頼むぅ……！」
老人が懇願するので、麗子は従い、声を出さず、口も閉じた。
「……怖いのですか？」
その様子を傍でうかがっていた命がたずねた。
「ああ……怖い……」
老人は顔を手で覆い、小さく頷いた。
「どうして……？」

そうたずねたのは麗子だった。手紙の内容と、老人を、交互に見ている。
「あいつはわしのことを恨んでいる……きっと恨んでいる。それを知るのが怖い……！」
老人は背中を丸め、身体を小さくした。
「わしはきっと……いや！　必ず地獄に落ちる！　何故なら、大勢の人を殺した……！　敵兵だけじゃない、女も、小さな子供も……わしはあんな小さな子供まで……殺すつもりなんかなかったんだ！　でも、わしの投げた手榴弾（てりゅうだん）がたまたま……わしはただ、生きるのに必死だった！　がむしゃらだったんだ！」
老人はうわ言でも言うように語りだした。すると、そんな彼の姿に変化が現れた。
急に若返ったのだ。
骨と皮だけだった身体には肉がつき、ぐっと締まった。しわがなくなり、張りも出た。髪も増え、黒々とした色に染まった。そして、服が、患者衣から軍服へと変わった。
「！」
その変化に驚き、麗子は目を丸くした。すぐに命をうかがう。すると彼は、自分の唇にそっと人差し指をあてがった。
「生きたかった……生きて彼女の元に帰りたかった！　修平と……僕（、）が考えた名を呼んであげたかった！　僕と彼女と、息子の三人で、ただ静かに平和に暮らしたかった！　それだけだったんだ！　それなのに……それなのに僕は……！」
老人……もとい、青年は、涙声になり、手をどけてその顔をあげた。
若々しいその顔はひどくやつれて、生気というものをまるで感じられない。無精ひげを生やし、一向に焦点の合わないその目の下にはひどいクマまでできていた。
麗子はそんな青年の姿を見つめ、彼は病んでいると思った。
「毎夜毎夜、来るんだよ……僕がこの手にかけた人たちがやってく

る……良江と再会できて、息子の成長した姿を見られて、心から嬉しかった。嬉しかったはずなのに、当時の私（、）にはすべてが敵に思えた……見えた、敵兵に見えたんだ！　私が殺した人たちに見えた……私を殺そうとしているんじゃないかと思えた……！　心が休まることなんかなかった……あったかもしれない。でも、思いだせない……！」

青年の姿がまた変化する。見るからに痩せて、数年ばかり老けた。始めはきれいだった軍服もボロボロになり、穴も開いた。そうかと思えば、ツギハギの多い古ぼけた着物へと変わった。

死人のような目は相変わらずで、無精ひげは手入れのされていない長いヒゲに変わった。白髪が目立ち、見るからに禿げている。しかし、その禿げ方が乱雑で、ところどころには円く禿げたところも見られる。円形脱毛症ではないかと麗子は思った。ひどいストレスに晒されて、うつ病にかかっていることは火を見るよりも明らかだった。

「彼女にひどく当たった……献身的に尽くしてくれる彼女のことが信じられず、疎ましく思っていた……いっそ、見限ってくれたらどんなに幸せだろうかと馬鹿なことを思ったし、そう伝えもした。息子はそんな私を恐れて、いつしか近づこうともしなくなった……悲しかった……でも、安心もした。あの子が近づかなければ、傷つけなくて済むから……」

青年の姿がまたも変わる。さらに年を取り、肉づきが良くなった。古ぼけた着物は、工場などで見られる作業着になった。

死人のようだった目にはわずかだが光が宿り、髪は黒さを取り戻し、量も増えた。短くきれいに刈り込まれて、長かったヒゲも剃られてさっぱりした。

「良江のおかげで立ち直れた。でも……私の分まで仕事をし、家を守り、息子を育てて、その上私の世話までしていた無理がたたり、ある日……あのとき、倒れた……」

もはや青年とは呼べぬ三十代半ばの男は、そう消え入るような声

を漏らすと、とたん、その顔をくしゃくしゃにして俯いてしまった。
「まだ三十になってまもないのに……本当なら、まだまだ先があったのに……私がそれを奪った……わし（、、）が殺したも同然だ……」
男の姿がまたも変わり始める。見る見るうちに年を取って、「わし」という言葉を口にした頃には元の老人の姿へと戻っていた。着ている服も患者衣に戻っている。
「良江はわしを恨んで死んでいった……そうに決まっている！　だから、怖いんだ……！　知るのが怖い……！」
老人は、老人の姿に戻ると、また手で顔を覆ってしまった。その変化を見届けた麗子は、彼が顔を伏せたところで命に視線を移した。どうすればいいか、その判断を求めたのだ。すると、命も彼女のことを横目にうかがっていて、目が合うと、さっと視線を落とした。手紙に目をやったのだ。そして、すぐにまた彼女の目を見つめて一度だけ頷いた。
読めと合図している。そう判断した麗子は手紙の文面に目をやり、朗読する。
「義重さん、お元気でしょうか。あなたが――」
すると、老人はハッとして顔をあげ、「やめろ！　やめてくれ！」と、声を張りあげて彼女の声を遮り、やめさせようとする。けれど、麗子はやめない。
「あなたがこれを読んでいるということは、もうすぐ、あなたも、今の私と同じように、これから――」
「やめてくれぇ！　聞きたくない！」
すると、老人はまた声をあげ、耳を塞ごうとした。だが、そばにいた命がすかさず彼の腕を掴んで制止した。
「原田　義重さん、あれは、良江さんが残した、最後の言葉です。ちゃんと聞いてあげてください。あなたの生涯で、ただ一人の妻（女性）でしょう？　信じてあげられないんですか？」
老人の怯えた目を見つめ、命はたずねた。すると、彼は押し黙り、

その目をゆっくりと動かして、麗子の手の中にある手紙を見つめた。
「麗子さん、もう一度、最初からお願いします」
命の言葉に、麗子は頷いた。書かれている文字を――言葉を朗読する。

（14）

『義重さん、お元気でしょうか。あなたがこれを読んでいるということは、あなたももうすぐ、今の私と同様、これから人生の終わりを迎えるところなのでしょうね。あら、でもそれだと、元気という言葉はおかしいかしらね。

私があなたの元を去ってから、どれほどの時間が経っているのでしょう。十年。二十年。もしかしたらもう何十年も経っていて、あなたはすっかりお爺さんになっているのかしら。もしそうであれば、どんなお爺さんになっているのかしら、見てみたいわ。

義重さん、私はあなたに謝らなければなりません。先立つ不孝をどうかお許しください。あの日、いつまでも一緒にいようと約束したのに、叶えられませんでした。

今、私の目の前には死神様がいらっしゃいます。見たところ、修平と同い年くらいで、とても可愛らしく、それでいてしっかりされていて、聡明な方です。

死神様はおっしゃってくれました。もしなにか思い残すことがあれば、その願いを叶えてくれると。そこで私はあなたに一目会いたいとお願いをしましたが、残念ながらそれは叶えられない願いらしく、ですから、こうしてお手紙を残すことにしました。

手紙を残すことにしたのは、あなたに死ぬ前にお伝えしておきたかったことがあるからです。それは謝罪と、感謝の言葉です。

義重さん、ありがとう。私はとても幸せでした。心の優しいあなたと共に生きられたことを誇りに思っています。

この言葉を、本当であれば、直接あなたにお伝えしたかったです。覚えていますか、一緒にいようと言ってくださったあの日のこと。とても嬉しかった。あなたは知らないでしょうが、私、あのあと家に帰って泣いてしまったのよ。本当に嬉しかったから。お父さんやお母さん、妹や弟、皆がいる前で泣いちゃった。

恥ずかしくてずっと秘密にしていたけど、最後だもの、教えます。実は私、お見合いをする前からあなたのことをお慕いしておりました。本当よ。だって、あなたの写真を見せてもらったあと、こっそりとあなたの姿を見に行ったもの。あなたは道場で竹刀を振っていました。そんな勇ましいあなたの姿に一目惚れしてしまったの。だから本当に嬉しくて、それで泣いてしまったの。知らなかったでしょ。

修平が生まれたときは、もっともっと嬉しかった。

お産は痛いと教えられてはいましたけど、あんなに痛いものだとは思いませんでした。お産婆さんが来るまでの間、あまりの痛さに我慢できずに泣いていたら、あなたったら、青ざめた顔をして見るからにうろたえて、おかしかった。普段は恥ずかしがり屋だから、してくれないけど、あのときばかりは私の手を握ってくれて、落ち着かせるために歌まで歌ってくれた。あなたの歌声を聞いたのは、あれが初めてでした。声は震えていたけど、お上手でしたよ。

あの頃は幸せでした。でも、修平が一歳になってすぐのことです。あの赤紙が届いた。受け取ったのはこの私。忘れもしませんわ、あれをこの手に取ったときのことは。まるで血の色のようで、とても恐ろしく思えた。

お友達のチヨちゃんの旦那様は、名誉だと胸を張って喜んでいたけど、喜べませんよ。チヨちゃん、私のところへ来て泣いていたわ。私も泣いてしまいました。

大切なお勤めとはいえ、あなたを戦地に送ったときは、まるで心の一部を切り取られてしまったように感じました。辛かった。できることなら、あなたを危険な場所へなど行かせたくはありませんでした。無理にでも引き留めたかった。たとえお国のためとはいえ、人間同士で争い合うのは、悲しく愚かなことです。そう叫べないことがとにかく歯痒く、なによりも苦しかった。

あなたがいない間に大変なことがたくさん起きました。辛いことです。でも、ここには書きません。知らなくていいことですもの。

でも、ひとつだけは書きます。あなたには黙っていましたが、私、あるとき光を見たの。昼間だったのに光って見えた。一瞬だったけど、とても強くて、まるで小さな太陽を見たようでした。そのときはわからなかったけど、あとで、あの光が新型の爆弾であると知り、驚きました。だって、長崎からはずっと離れているのに、それなのに見えたのですもの。

ごめんなさいね、こんなことを書いて。でも、ずっと打ち明けたかったの。

日本が負けて、戦争が終わって、無事にあなたが帰ってきたときは、まるで生き別れになった我が子と再会したような、そんな思いがしました。あのとき、私を細くなった腕で抱き締めてくれたとき、とても嬉しかった。とても愛おしかった。二度と離すまいと思いました。笑顔を見せてあげたかったのに、どうしても涙が止まりませんでした。

お勤めへ行かれている間に、あなたの心はすっかり荒んでしまわれた。よほど恐ろしい体験をなされたのでしょうね。辛い日々が続きました。一年も、二年も。でも、それは、あなたが悪いのではありません。すべてはあの戦争が悪いのです。

憎かった。あなたを変えてしまった戦争が、この国が、とても憎かった。

ずっと気がかりでした。もしかしたら、あなたが、そのことをずっと気に病んでいるのかもしれないと思って。

重義さん、あなたはなにも悪くありませんよ。もし、私があなたのことを恨んでいたかもしれないとそうお悩みでしたら、そんな悩み、さっさと捨ててしまいなさい。私は決して、あなたを恨んだりはしません。大好きなあなたを恨んだりするものですか。

あなたと人生を共に歩めた。あなたの妻となれた。かけがえのないあの子を得られた。そして残せた。それだけでも、私は十分幸せですよ。

そして今、あなたのお側で死ねる。

あなたがずっと手を握ってくれていたこと、私は知っていますよ。今も、あなたは私の名前を呼んでくれている。良江、良江と泣いてくれている。こんなに嬉しいことはありませんよ。これ以上の幸せを望めば、それは贅沢というものです。神様仏様に叱られてしまいます。

義重さん、残念ですが、もうあまり時間がないそうです。もっともっといっぱいあなたにお伝えしたいことがありましたが、可愛らしい死神様にご迷惑をかけてはいけないから、そろそろ終わりにしますね。それにあまり長くなったら、読むのが大変ですものね。ごめんなさいね、おしゃべりで。手紙でもおしゃべり。

義重さん、今、死神様から興味深いお話を教えて頂いたのですが、私たちのように夫婦であったり、親子や、家族、親しい友人になった方々というのは、強い絆や、縁で結ばれているのだそうです。前世も、そのまた前世も、私たちは実は知らない間に出会っていて、だから、来世もまた会えるかもしれないそうです。

いつのことになるかはわかりませんが、あなたとまた出会える日が来ることを、私は心から願っております。できることならば、私は再び、あなたの妻でありたいと思います。今度はもっとずっと一緒にいたいです。もし、神様仏様にお会いすることがありましたら、そうお願いしようと思います。

それでは、義重さん、またどこかでお会いしましょうね』

「――良江より」

麗子は最後に書かれていた文字を読みあげると、小さなため息をついて終わりにした。

文面に向けていた視線を老人に移した。彼はそのとき、口元に拳を押し当てていた。

「原田　義重さん、聞きましたね？　あなたへの恨み言はありましたか？」

命がたずねると、老人はおもむろにかぶりを振り、その拳を下ろ

した。
「無い……無かった……良江は……良江は、わしを恨んでなどおらんかった……！」
老人は顔をくしゃくしゃにした。しわの多い顔がより一層しわくちゃになった。
老人は大声をあげて泣きだした。心に押し込めていた長年の痞(つか)えを今解き放っている。しかし、今の彼は精神の存在であり、その目から涙は流れない。
そのとき、心電図の波形が一時的にだが大きく乱れた。
麗子はそれに気づいて注目した。そして、あることにも気づいた。
「涙が……」
ベッドに横たわるもう一人の老人の閉じた目から涙があふれ出していた。
「手紙を、見せてもらえないか……？」
老人は震える手を伸ばした。
「はっ、はい」
麗子はすぐに返事をした。老人に近づき、手紙をその手に持たせてやった。彼は壊れやすいものでも扱うようにそっと持ち、文字を見つめた。
「ああっ、良江の字だ、彼女の字！　なんて懐かしい……」
一枚、二枚、三枚と目を通してゆき、すべてに目を通したらまた一枚目に戻る。すると、老人はその手紙に顔を押しつけた。
「ごめんよぉ……ごめんよぉ……！　よしえぇ、おまえが恨んでいるだなんて、そんな馬鹿なことをずっと考えてぇ、ずっと悩んでぇ……おまえのこと、信じてやれなかった……」
老人が嘆き悲しみ、心から悔やんでいると、手紙がふいに淡い光を放った。彼がそのことに気づいてハッとしたとき、手紙は光の粒となって、まるで蝶が飛び立ったように手元を離れ、天へと昇った。
その場にいた誰もが、その光の蝶を目で追った。
「手紙が……！　良江の手紙がぁ……！」

老人は光の蝶を捕まえようと手を伸ばすも、どうしても掴めず、しまいには消えて無くなってしまった。
「ああっ！」
老人は思わず声をあげた。両腕を天に伸ばしたまま、しばらく固まっていた。
「……五十八年前の約束を果たしたことで、手紙はその役目を終えました。だから、消えたんです」
そんな老人の姿を見つめ、命は言った。
「うん……うん……」
老人は脱力したように腕を下げると、ゆっくり、噛み締めるように頷いた。
「原田　義重さん、まだ怖いですか？」
命は小脇に挟んでいた手帳を手に取り、たずねた。老人は小さくかぶりを振った。
「いいえ、ありません」
老人は手を伸ばした。命はその言葉を受け、小さく頷くと、手帳を、金色の天秤を上に向けた状態で両手で持ち、そっと差しだした。
「もし地獄に落ちたとしても、悔いはありません」
老人はそう断言すると、金色の天秤に手を触れた。すると、置かれた手の下から黄金色の光が発せられ、いつぞやのように、手の甲の上に金色の天秤が浮かびあがった。
老人の胸元に光が生まれ、そこから青い火の玉が現れて、二つの秤を支える中央の柱の頂にある燭台に青い火を灯した。すると、二つの秤に白と黒の火がひとつずつ灯り、白い火のある秤がより深く沈んで、天秤を一方に傾かせた。
命はそれを見届けると、満面の笑みを浮かべた。
「原田　義重さん、お喜びください。あなたの魂は善に傾きました。よって、あなたが進むべき道は地獄ではなく、天国です」
「え……わ、わしが天国へ……？」
老人は驚いた顔をし、その手を引いた。すると、金色の天秤が消

えた。
「辛く険しい生涯でしたね。でも、良江さんの亡き後、男手ひとつで、修平さんを立派に育てあげ、戦争で殺めてしまった人たちのことを決して忘れず、良江さんや、命を奪ってしまった人々の分まで必死に生きてきたことを、神様はちゃんと見てらっしゃいましたよ。そして、あなた自身の魂も……原田　義重さん、善い人生を歩まれてきましたね」
命は手帳を抱くと、まるで自分のことのように喜び、愛くるしい笑顔を贈った。
「あっ、ありがとうございます……！」
老人は声を上ずらせて、深々と頭を下げた。
「一応おたずねしますが、思い残していることはございますか？」
「いいえ、もうなにもありません！」
「そうですか、わかりました。では、天国への道を開きます」
命は天井を見上げて、金色の天秤を見せつけるように手帳を掲げた。すると、白い光の穴が現れた。穴は広がり、そこから光が降り注いで老人を照らした。
「ああ……温かい……」
老人は光の彼方を見つめた。その光はなんとも穏やかで、まるで雨上がりに、雲間から降り注ぐ太陽の光のように神々しかった。
「もう一度この手帳に触れてください。そのとき、あなたは旅立ちます」
命は手帳を差しだした。老人は一度だけ頷き、そっと手を伸ばした。
「夫婦共々、お世話になりました」
手帳に触れてまもなく、老人の身体が淡い光に包まれて、無数の光の粒となり、まるで吸い込まれるように光の彼方へと昇っていった。
光の粒となって消える瞬間、老人はとても安らかな顔をしていた。
降り注いでいた光が途絶え、穴も消えた。そこは薄暗い病室へと

戻った。
「ご苦労様でした」
命はそっとつぶやいた。
「……」
そのとき、麗子は無言のままに天井を見つめていた。光が消えたあとも、しばらくそうしていた。すると、急にアラーム音が鳴り響いた。彼女は驚いて、びくりとした。
それは心電図の波形が乱れた際に、緊急を知らせるために鳴るアラームだった。そのことに気づいた麗子は、同時に、老人の身体にまとわりついていた黒い靄が消えていることにも気づいた。
「精神と魂を失ったことで、原田　義重さんの肉体は崩壊を始めました。つまり、死へと歩み始めたんです。まもなく心臓が止まります」
麗子がたずねようとすると、その前に命は答えた。
そのとき、荒々しい足音が近づいてきた。扉が開いて、一人の看護師が飛び込んできた。
「これから、ここは騒がしくなります。出ましょう」
命は麗子に近づき、手を取り、窓のそばへと引っ張った。
「う、うん」
素直に移動する麗子だが、老人のことが気になるのか、つい振り返って見てしまう。
「あとのことは、こちらの世界の方々の仕事です。ボクたちには関係ありませんし、どうすることもできません。アレの処理はお任せしましょう」
ベッドに横たわっている老人を指差し、命は言った。まるで、物かなにかでも扱うような口ぶりだと、麗子は思った。
命はすぐさま振り返り、早々に目の前の壁をすり抜けて出て行ってしまった。独り残された麗子も、後ろ髪を引かれる思いでその場を後にする。
集中し、まずは手を通し、徐々に身体を押し込んで、次に頭をす

り抜けさせようとしたとき、後ろからある音が聞こえてきた。
心電図の波形が真っ直ぐに伸び切って、心停止したことを知らせている。
麗子は、その音の正体を察し、思わず身を固めた。……が、すぐにまた動きだし、壁をすり抜けた。
麗子がその場を後にしてまもなく、夜勤の医師が駆けつけた。

（15）

原田　義重という老人がいた病室を出た二人は、その真上の、屋根のように突き出した屋上の端に腰掛けて、夜の世界を眺めていた。

麗子は物悲しい表情を浮かべ、星が散りばめられたような街並みをじっと見つめている。その隣にいる命はというと、足をブラブラさせながら、空を見上げている。

漆黒の夜空に浮かぶ三日月はとても鋭利で、命が背負う鎌を思いださせる。

「……」

二人の間に会話がなかった。それは麗子が押し黙っているためだ。命はそれに合わせて口を閉じている。

そのとき、ふと、命が横目に麗子をうかがったとき、彼女もちょうど横を向いたので、目が合った。すると、彼女はふっと微笑み、ようやくその口を開いた。

「これが死神の仕事なんだねぇ……」

その言葉を言い終えると、麗子はまた視線を街並みに戻し、ひとつ、ため息をついた。「……辛いですよね」

そんな麗子の横顔を見つめていた命もまた、口を開いた。彼のその言葉に、彼女は少し返答に悩んだ。

「……うん、まぁ、ちょっとね。――私ね、人が死ぬところを見たことがなかったんだ。今日が……これが初めてだった……」

麗子は見つけた答えを、景色を見ながら口にした。

「そうだったんですか……それはお辛い」

「事故とかは何度か見かけたことはあったんだけどね……私が知る限りは、家族では誰も死んでいない。お祖父ちゃんやお祖母ちゃんはまだぴんぴんしてるし、もちろん両親もね。親戚で亡くなった人はいたけど、皆、私が小さかったときの話で、葬式とか行ったことはなかったから、人が死んだって……亡くなったってちゃんと実感

できるような体験をしたのは今回が初めてだった……あれだねぇ、やっぱり、気持ちのいいもんじゃあないね」
麗子は苦笑いを浮かべた。そこでようやく命に顔を向けた。
「そうですね……そうだと思います」
命は優しく微笑み、深い頷きをした。
「人にとって、死というのは理解しがたい未知なる現象です。おかしな言い方かもしれませんが、死んでみなければ、死を真に理解することはできないでしょう。そしてたとえ、死を経験したとしても、それでも理解に苦しむものです」
「お、なんだか哲学的だね……」
麗子は冗談めいた言葉を口にし、余裕のない笑みを浮かべた。
「死に慣れるということはないでしょうし、そもそも慣れていけないものだと思いますが、生涯で、家族や友人など、他人の死にかかわることは大事なことだと思います。人は、一生の間に必ず、死について疑問を覚え、考える時期というのがあります。麗子さんの場合、それが生前ではなく、死後だったわけですね。ある意味恵まれていますが、経験の機会にという意味では、恵まれなかったとも言えますね」
「嬉しいような、悲しいような……でもさぁ、不思議だよね。自分が死んだときはあまり実感がわかなかったんだけど、ベッドに横になっているあのお爺ちゃんの姿を見たときや、心臓が止まったとき、なんとなくだけど、あ、死んだんだって……これが、死ぬってことなんだって、そう思えたよ。なんだろうなぁ、人のはずなのに、人に見えないっていうか……周りにある機械と同じものに見えた気がしたよ」
麗子はその瞬間を繰り返し思いだして、相槌を打つように何度か頷いた。
「それが死です」
命は一度だけ頷いた。
「じゃあ、私のときもああだったんだねぇ……怖くてちゃんと見ら

れなかったから、全然覚えてないや」
麗子は苦笑した。
「そういうものですよ、誰しもね。ボク自身、自分の死の瞬間のことはよく覚えていませんし、自分の死体を見る勇気なんてありません。そういうものですよ」
「そういうものなんだ？」
「ええ」
命は頷いた。
「人は、他人の死を受け入れることはできます。家族や友人など、親しい人の場合は難しいですが、それでも、時間が経つなりすると受け入れられたりする。ですが、自分の死を受け入れることはできません。当然です。麗子さんのような場合は、その中でも特に困難でしょう。まだお若く、なにより突発的な死でした。あまりに突然で、未だに自分の死が信じられないんじゃないですか？」
「……うん。ほんと言うとね」
麗子は申し訳なさそうにし、肩をすくめた。
「大丈夫ですよ、そんな顔をしないで。仕方のないことです」
「うん……」
麗子は笑顔を作った。
「麗子さんが自分の死を受け入れるには相当な時間がかかると思います。いや、麗子さんのみならず、誰しもがそうでしょう。たとえば、ボク自身、そうでしたからね」
命は自分を指差した。
「そうなの？」
「ええ。ボクは幼くして死にました。九歳です。死ぬには早過ぎる。大昔でもね。自分の死を受け入れるには時間がかかりました。麗子さんと違ってすぐに死神になったわけではありませんから、特に時間を要したんじゃないでしょうかね」
命は当時を思いだし、苦笑した。そんな彼の表情はどこか大人びて見える。

「死神の中でもボクはかなりの古株です。誰よりも長く死に接して、死を学んできました。それでもまだ、死を完全には理解できていません。さすがに自分の死は受け入れられたと思いますがね。死というのは難しいです。とても難しい。でも、当たり前なんですよね。死は形としてあるものじゃない。どれだけ学ぼうと、その実体は見えてはこない。正解がありませんから、いつまで経っても、漠然としたままです。いくら考えたところで憶測に過ぎません。それを、平均八十年しか生きられない人間が考えて、理解しようとしたって無理な話ですよ。死神歴千年のボクですらそうなんですから」

命はまた自分を指差して笑った。今の彼の表情はさっきと違って幼く、無邪気なものだ。

「人というのは特に、目に見えないものや、存在として存在しないものを理解するのには苦しむ生き物です。でも、悩み、苦しむことで、そこからなにかを学び、得られることはできます。たとえば、麗子さんが、原田　義重さんのお世話をしたことで、死がどういうものであるかを知ったようにね。それでいいんだと思いますよ、ボクは」

命はにっこりと笑った。

「そうだねぇ……うーん、結局、よくわからないってことでいいのかな？」

麗子は小首をかしげ、苦笑した。

「でも、なんとなくはわかるでしょ？」

「うん、なんとなく」

「そう、それでいいんですよ。ボクたちは死神ですが、所詮は人なんですから、死を理解することなんかできませんよ。理解しようと思い、考え、悩み、学ぶことが大事なんです。結果ではなく、その過程が大事ってことです」

「なーんか、急にくだけたなぁ……」

「そうですかねぇ？」

二人は苦笑し合った。

「でも、あれだね。あのお爺ちゃん、最後は安らかだったよね？」
「はい」
命は満面の笑みを浮かべて頷いた。
「そういうことなのかなぁ、死神って……」
「ボクはそういうものだと思っています」
「そっか。じゃあ、それでいいんだろうね……うん！」
麗子は自分の気持ちにふんぎりをつけるべく、大きく頷いた。
「まだ一回目だけど……それも見ていただけだけど、大変な仕事だね、死神って……大変じゃない仕事なんてないと思うけど、それでも、この仕事が一番大変なんだと思う。でも、やりがいはある！」
「これは嬉しい言葉を頂きました」
その言葉どおり、命は今、嬉しそうな顔をしている。
「あれだ、私はこう思うね。この死神の仕事は、私に、死というものがなにかってことを考えさせるための神様からのチャンスだってね。あ、言っておくけど、あいつじゃあないかんね。その兄弟でもなくて、なんというかその……そう、運命よ！　運命という神様が私にくれたチャンス。私はそう考えるね。うん、そうだ！」
麗子は自分で言って自分で納得した。
「立派なお言葉ですが、諸事情により肯定も否定もできません。あと、応援も」
命は苦笑した。
「なんでよぉ、パートナーのくせにつれないぞぉ」
麗子は不満そうに頬を膨らませると、命の顔を指差した。そのまま近づけて、彼の見るからに柔らかそうな頬をぷにぷにした。
「正しくはパートナーではなく、教育係ですよ。それに先輩ですよ、大先輩。それなのに失礼な方ですねぇ」
とは言うものの、注意したりやめさせようとはせず、命はぷにぷにされている。
ぷにぷに。ぷにぷに。
麗子はその後もしつこくぷにぷにする。

（くそぉ、本当はお餅みたいに柔らかいだろうに……肉体がないのが恨めしい）
麗子はそんなことを思いながら、やはりぷにぷにする。
「なにも感じられないのって悲しいですよね」
命はにやりとした。
「えっ！」
（心を読まれた……！？）
麗子はハッとし、ついにその手を止めた。
「ところで、気分もすっかり本調子に戻ったようなので、そろそろ、死神としての教育を再開させてもらってもいいですかね？」
命は表情を真顔に戻した。
（しっ、仕切り直された……！）
麗子はもう一度ハッとする。
「じゃあ、再開しますね」
が、命は無視して続けた。
「死神としての仕事はこれで一応終了したわけですが……とはいえ、今回は老衰や病死の場合なんですけどね。で、初めての仕事を終えてみて、なにか質問はありますか？」
「うーん……わからないことがわからない」
麗子はぷにぷにするために出していた手を下ろし、肩をすくめた。
「ハァ～、これがゆとり教育の弊害ですか……冗談抜きにした場合はどうです？」
「天井に光の穴が開いたけど、あれが天国なの？」
麗子もあっさりと仕事の顔に戻った。
「まぁ、そんなところですね」
命は曖昧な答えをした。
「ようは天国なわけね。あれはどうやって開けるの？　手帳をかざしてたよね？」
「ええ、正確にはこうして……天秤のあるほうを前にして、空、もしくは天井に掲げるんですよ。魂の善悪をはかって、対象の魂を預

かった状態で手帳を掲げると、天国への道が開きます。ちなみに、地獄の場合はこのように足元へ向けます」
命は手帳を取り出し、実際にやってみせた。
「なるほど……ところで、地獄の場合はどんな感じなの？」
「まず、床なりし地面に穴が開きます。こう黒と赤が混ざり合ったような色で、そこから炎が噴き出して対象に絡みつき、そのまま引きずり込みます」
「そっ、想像だけでも十分恐ろしいわね……」
「まぁ、地獄ですから」
命は笑顔を浮かべた。
「そ、そうね、地獄だもんね……」
麗子は無理やり納得した。――と、そのとき、命が急に「あっ」と声を漏らした。
命の手にある手帳がブルブルと振動している。
「えっ、なに……！？」
麗子はギョッとし、警戒する。
「次にお世話をする方が決まりました。これはそのお知らせです」
命は振動が治まった手帳を開き、新たに追加されたページを開いて確認した。
「えーっと、それはつまり、バイブレーションなの……？」
麗子は手帳を指差し、たずねた。
「はい」
命はすぐに頷いた。
「そ、そう……」
（手帳にバイブ機能……？）
麗子は戸惑っている。ちょっと呆れてもいる。
「あれ、なんで振動がわかるの？　私たちって精神だけの存在なんでしょ？」
麗子は抱いた疑問をぶつけた。その際、自分と命を交互に指差した。

「それは神の御業です！」
命は得意げな顔をし、手帳を掲げた。
「……」
そんな姿に麗子は思った。
胡散臭い。まるで、寄付金目当てのエセ宣教師のようだ。
命は麗子の反応が薄いことに気づくと、とたんにつまらなそうな顔をし、すぐに手帳をしまい直した。すねているのか、口を尖らせている。
（神の御業か……ようするにあいつね。まーた適当なことを……どうせ携帯電話のバイブ機能から思いついたんだろうけどさ……）
麗子は誰かを思い、鼻で笑った。
「ちなみに、それってどんなシステムになってんの？」
麗子は命の胸元を――手帳を指差した
「簡単に説明しますと、お世話をする方――つまり、これからお亡くなりになられる方の一番近くにいる死神に仕事が振り分けられます。なお、すでに他の仕事が入っていたり、仕事中の場合は除外されます。ただし、先ほどの原田　義重さんの場合、妻の原田　良江さんとの約束により事前に予約してあった状態で、そのような場合は場所に限らず、予約してある方に死が迫っていると知らせてくれます。また、他の死神の方とカブらぬよう、ボク以外の方はあらかじめ除外されます」
「なるほど」
「他に質問はありますか？」
「んーっと……ううん、今のところはもうないわ」
「そうですか。では、次の方のところへ参りましょうか」
命はその場に立ち上がり、鎌を手にした。またがり、浮かんだ。
「原田　義重さんの場合は初めてということもあり、ボクが実演をしてみせましたが、次からは麗子さんにお世話して頂きます。何事も経験ですからね。でも、ご安心を。ボクがちゃんとフォローしますからね。あ、ところで、次の方の予定されている時刻まではまだ

間がありますから、それまでは空を飛ぶ練習をしましょう。いつまでもボクが運ぶわけにいきませんから」
「ん、もろもろ了解……」
麗子は憂鬱そうに返事をした。手を伸ばし、「戻れ」と言った。すると、指輪が鎌へと戻った。彼女は鎌を手にしながら、命を真似するように立ちあがり、またがった。
「……この刃が刺さったらどうしようかといつも思うんだけど」
鎌の、下を向いている赤い刃を指差し、麗子は言った。
「大丈夫ですよ。刺さったところで痛くないですし、死にません。そもそも切れません。刺さりはしますが、大丈夫です！」
「刺さりはするんだね……」
麗子の顔に不安の色が現れた。命の言葉はさして励ましにはならなかったようだ。
「では、まずは浮かんでみましょう。ボクみたいに静止してください」
命は今の浮かんだ状態でゆっくりとその場を離れて、麗子の正面に移動した。
「う、うん」
麗子は頷くと、両足でフェンスを蹴り、空中に飛びだした。そしてすぐさま、「飛べ！」と命じた。
「えっ、そこは“浮かべ”では？」
命はすぐに気づいて指摘した。――と、その刹那、麗子を乗せた鎌は猛烈な勢いで飛びあがり、一瞬にして天空の彼方に消えた。
「あ～……」
命は空を見上げ、麗子の姿を目で追った。すると、まもなく、なにかの影が悲鳴と共に目の前を過ぎった。それは病院の裏庭に落下し、音もなく地面に激突した。
「あ～あ……」
芝生に、顔面から突っ伏している麗子の姿を見下ろし、命は哀れむような声を漏らした。ゆっくりと高度を下げ、地面に降り立った。

麗子は今うつ伏せで、顔を芝生に押しつけ、腰をくの字に折り曲げて、お尻を突きだすような形になっている。そんな彼女に対し、命は言った。
「麗子さん、パンツでよかったですね。スカートだったら……見えてましたよ」
「……」
麗子はピクリとも動かず、声のひとつも漏らさない。
「ボク、一応性別は男なんですけど、こういうときってどうするのが正しいんでしょう？　やっぱり、ここは残念がるべきなんですかね？」
命は小首をかしげ、たずねた。
「……」
麗子は返事をしない。
「鎌が見当たらないんですが、咄嗟に手を離したんですか？　それとも、振り落されましたか？　まぁ、どちらにせよ、手を離した時点で止まりますし、呼べばすぐに飛んできますから大丈夫ですけどね」
「……」
「がんばって飛べるようになりましょうね。大丈夫！　麗子さんならすぐに飛べるようになりますよ！　ボク、応援しますので！　……ところで、今、ボクにかけてほしい言葉はどちらですか？　前途洋洋ですか？　それとも、前途多難ですか？」
「……前途洋洋」
「わかりました。――麗子さん、前途多難ですね！」
命はなんとも意地悪で、かつ満面な笑みを浮かべ、言った。
「ムキィ～～～～～ッ！」
そのとたん、麗子は夜空に向かって猿のような声をあげた。
その横では、命が腹を抱えて笑い転げている。

同時刻、冥府。
荒野のような世界に聳え立つ、超々高層ビルの最下層。重厚な扉の先にある玉座の間。大小様々な骨を組み立てたような禍々しい玉座に、足も届かない幼子が一人、ちょこんと座っている。
ハデスである。
えらく目つきの悪い幼子の姿をしているハデスは、虚空を見つめるようにどこか遠くを眺めていたが、ふいに口角をあげて、「ヘッ」と鼻で笑った。
「愚か者め……おいっ」
独り言をつぶやいたと思えば、ハデスは誰かを呼んだ。すると、傍らで「キャンッ」という鳴き声がし、三つの首を持った可愛らしい子犬、ケルベロスが頭をもたげた。尻尾をフリフリしながら玉座の前に移動し、おすわりをした。
「取ってこい！」
ハデスは手を伸ばし、玉座から骨を一本取り外して闇に投げた。すると、ケルベロスはすかさずきびすを返し、骨を追いかけていった。
「ハッハッハッ、愛い奴め」
ハデスはなんだかご機嫌である。……が、「ハァ、ヒマだなぁ……」と急に退屈そうにした。ため息を漏らし、大きく背筋と腕を伸ばした。
「退屈しのぎに、今流行りのタブレット型の手帳でも作るかなぁ」
ハデスがまたぶつぶつと独り言をつぶやいていると、ケルベロスが、さっき投げた骨を咥えて戻ってきた。
真ん中の頭が骨を咥えているものだから、左右にある頭がその骨に押され、苦しそうにしている。
ケルベロスは玉座の前に戻り、またおすわりした。頭をあげて、咥えている骨を取って欲しそうにする。けれど、ハデスは思案に更けていて気づいてくれない。

ケルベロスは我慢して待っている。真ん中の頭は骨を咥えているのに疲れて震えており、左右の頭は骨に押しつけられているのが苦しくて、「クゥーン」とステレオで唸っていた。

ああもう、ただただ愛くるしい。

（小説　【ＬＩＦＥ　ＡＦＴＥＲ　ＤＥＡＴＨ　～死後の人生～】
原稿　著者・小野　大介　完）

（15）（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございます。

いかがでしたか？
楽しんでいただけましたら、幸いでございます。

この小説はここでひとまず、完結にします。
ただし、物語はまだ終わりません。
まだ始まったばかりです。

いつになるかはわかりませんが、
物語のつづきを書きたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2686z/

LIFE AFTER DEATH　～死後の人生～

2012年1月10日03時46分発行